

『「第四期岩崎式日本語」大全』本編

Iwasaki's System of Reconstructing Japanese IV

考案過程、文法、思想体系の解説

主格主語言語性の完成を指向する現代日本語を母語とする解離性障害者・言語障害者等の多種の非主格主語的な解離自己・放散自己・超自己による自己言及を可能とするための日本古語を基層とする後驗芸術言語としての新生日本語の考案、現代日本語及び当新生日本語によるこれらの自己に関する超言語学的・超哲学的・超精神病理学的・超数学的言明のイデアルな記述の試み、我々の涙と吐息への還元、そしてそれら全てへの情熱、東洋の実存の精神について

2005年11月24日 初筆

2012年7月29日 改筆

著　：　岩崎　純一

監修　：　岩崎式日本語研究会

協力　：　花薄会

協力　：　『新純星余情和歌集』全解釈プロジェクト

【本編】 目次

§ 1 序

1.1 概要

1.2 従来の言語学、精神病理学、数理論理学等との関係

§ 2 音素・書記素体系等

2.1 音素・書記素

2.2 漢字仮名交じり文及び外来語

§ 3 文法範疇

3.1 品詞

3.2 格詞

3.3 燈詞

3.4 動詞・形容詞・形容動詞・助動詞

3.5 時制・相・法・態

§ 4 我燈宣言規則

§ 5 解離性障害者等の世界認識

§ 6 世界認識の連続体性

§ 7 現行の言語学の格解釈の再考

§ 8 解離性障害者等への検証実験

§ 9 真格（阿頼耶格）の構築

9.1 空我（無我）

9.2 識我

9.3 具我

9.4 及我

9.5 希我

9.6 能我

9.7 意我

9.8 活我

9.9 主我 1

9.10 主我 2

9.11 主我 3

9.12 主我 4

9.13 主我 5

§ 10 格標識の分析

10.1 無標（ ϕ ）の使われ方

10.2 「が」の使われ方

- 10.3 「は」の使われ方
- 10.4 「の」の使われ方
- 10.5 「で」の使われ方
- 10.6 「を」の使われ方
- 10.7 「に」の使われ方
- 10.8 「へ」の使われ方
- 10.9 真我進化と真我遡及
- § 11 既存の類型論に対する格分類の再編
- § 12 幼児の言語獲得過程及び社会的少数者の世界認識
- § 13 解離性障害者等の擬音語・擬態語
- § 14 生命性解釈の再編（有生物と無生物の対立の有無）
- § 15 動詞の自他の不問
- § 16 能動・受動両態の区別の再考
- § 17 中我態
- § 18 斜格主語の優越
- § 19 時間の非直線性
 - 19.1 時制・相・法
 - 19.2 現在時制、及び進行相・完了相
 - 19.3 過去時制
 - 19.4 未来時制
- § 20 証拠性と蓋然性の連続体性
- § 21 真格と動詞の関係
 - 21.1 自ら木の枝を切った場合
 - 21.2 自ら爪を切った場合
 - 21.3 美容室で髪を切ってもらった場合
 - 21.4 手紙の封を切った場合
 - 21.5 人との縁を切った場合
 - 21.6 英語における文法ミス
- § 22 自己意識の流動性
- § 23 自己意識の話題格性
- § 24 上古代日本語等の再解釈
- § 25 地方方言との類似性
- § 26 格詞・燈詞・動詞・助詞・助動詞等についての留意点
- § 引用文献
- § 参考文献

§ 別添資料一覧

§ 1 以降の解説の読解に際し参考とすべき資料の一覧である。(別ファイル)

別添資料(1) 一般学習者向け文法マニュアル

別添資料(2) 記号・用語・概念の一覧

別添資料(3) 使用者の分布

別添資料(4) 真格一覧表

別添資料(5) 我燈一覧表

別添資料(6) 検証実験の回答

別添資料(7) 動詞の連続体性

別添資料(8) 言語変遷過程表

別添資料(9) 話題格の模式図

別添資料(10) 水海道方言との類似性

続編別添資料(1) 論理値表

続編別添資料(2) 構文一覧

【岩崎式日本語使用者による例文と文学】

(使用者らによって完成し次第、ウェブサイト上に別掲。)

(1) 例文集 (第三期岩崎式日本語)

(2) 『平成純一巫女考』 (第三期岩崎式日本語)

(3) 「疾病及び関連保健問題の国際統計分類(ICD-10) 第 V 章 精神及び行動の障害」

と第三期岩崎式日本語との対応表 (2011 年 5 月版)

※ 2012 年 8 月より使用者による日常生活における試用開始。

§1 序

1.1 概要

岩崎式日本語 (ISReJP・アイエスリジェイピー) は、在野の言語学研究家である私岩崎純一が基礎理論を考案し、私的な研究会である ISReJP 研究会のメンバーを中心とする我が国の一部の解離性障害者、統合失調症者、自閉症者、アスペルガー症候群者、言語障害者らによって発展・使用され、場合によっては「第二の日本語」として共有されているクレオール日本語と、その言語観の総体の呼称である。

正式名称を、「主格主語言語性の完成を指向する現代日本語を母語とする解離性障害者・言語障害者等の多種の非主格主語的な解離自己・放散自己・超自己による自己言及を可能とするための日本古語を基層とする後驗芸術言語としての新生日本語」と言う。

現在、使用されている場合は、使用者と考案者（本稿筆者）との間でのメール・書簡・会話のやり取り（使用者による症状・病状の考案者への報告など）、特に鬱や強迫性障害を呈する使用者による日記・文学作品（詩など）の執筆や生活における各種のメモや覚え書きの文章（買い物の品・電車などによる行動予定のメモなど）、考案者（筆者）自身による使用者の症状・病状の記録、世界保健機関の定める疾病分類である ICD の各項目に対応する文の作成などである。

当言語の俗称として考案者個人の名を冠している目的は、当言語が、将来的に何らかの学術的評価を得る可能性はあるにせよ、現時点においては、既存の SAE 圏や我が国の言語学・精神病理学などの諸理論体系からは導出されない極めて特異な理論体系を呈しており、個人の名・俗称を冠さないことによって生じる諸問題（保護者が、当言語理論を世界的または国内的に主流・正統の理論と思い違ふなどして、丁寧な読解・理解のないまま自閉症の我が子に適用・教育しようとする行動など）を最低限回避するためである。

また、今一つ重要な理由は、現在のところ、考案者の私自らが当言語について、「言語学・精神病理学・哲学・論理学などの学術的な成果」というよりも「一個人による、学術性の匂いのする一芸術作品」とであると考えているためである。ただし、これはあくまでも、「使用者である精神疾患者や言語障害者らに対して、当言語体系に含まれる学術上の難解な知見や技術を過度に説明したり、そのことで余計な負担をかけたりすることは本望ではない」との心境を表すための、考案者としての暫定的な考え方にすぎないのであって、言語学その他の学問の網羅的な知識を有する読者に読まれ、そこから学術的な議論が展開されることは、無論心底より喜ばしく、元より当言語が学術性と芸術性の輻輳した試みであることは確かだと思われる。

この ISReJP に関するプロジェクトは、現代日本の（直接的に未定義ながら精神医療等で使用される概念である）定型発達者（一般健常者）が日常的に使用する SAJPCJP、同人々が使用する SAECW、及びそれらの早期教育に対して一部の自閉症者、精神疾患患者、言語

障害者らが有している違和感を解消する言語として ISReJP を構築することを目指している。

なお、当プロジェクトにて用いる「解離性障害」や「自閉症」などの呼称と定義は、ICD やアメリカ精神医学会の定める精神疾病分類である DSM などに従う。

また第四期 (ISReJP4) 以降は、この言語が持つ可能性のある言語学的・哲学的・数理論理学的意義についても検証する。

クレオール言語(Creole Language)とは本来、意思疎通ができない異なる言語の貿易商人らなどの間に自然発生したピジン言語(Pidgin Language)が、その話者たちの子供によって母語として話されるようになった言語を指すが、ISReJP のクレオール性とは、すなわち、SAE の文法に追従する傾向を有する SAJPCJP に対する日本の発達障害者や精神疾患者の違和感を解消し、成人以前または近世以前の日本人の外界解釈様態に近いこれらの人々のそれを記述しうる言語を、語彙だけは SAJPCJP をもとにして構築する点にある。

なお、ISReJP を理解できる者の8割以上が女性であることは注目に値するが、解離性障害者には女性が多く、かつ多くの場合で言語能力を失っていないこと、発達障害者には男性が多く、かつ多くの場合で言語障害を伴うことなど、要因は多岐にわたり、輻輳していると考えられる。

1.2 従来の言語学、精神病理学、数理論理学等との関係

ISReJP は、ソシユールの用語を借りるならば¹、ラング(*la langue*)である SAJPCJP に対する社会的少数者のパロール(*la parole*)である。しかし、ISReJP にも一定の統語規則があり、その意味では、社会的少数者に対してラングとしてはたらくが、もしその統語規則から漏れる社会的少数者が存在すれば、ラングとしての ISReJP の統語規則のほうを書き換えるとの立場を取っている。これによって、現在、ISReJP は三度の改定を経て、第四期にある。

サピアやウォーフらをはじめとする言語的相対論²の「強い仮説」においては、思考は言語と一致する。言語を離れた思考の存在は否定される。一方、「弱い仮説」においては、非言語的な思考については譲歩して認めるが、それでも人間の思考が言語（母語）によって制限・束縛を受けることは否定しない。「強い仮説」を強硬に唱える言語学者もほとんどいなくなったが、一方で、チョムスキーの生成文法理論の継承者はいるにせよ、言語を離れた、人類に唯一普遍的な思考と文法のみを思考と文法と認める言語学者も、ほとんどいないであろう。

しかしながら、例えば、我が国の MD・SD(SAJPCJP)者の世界認識様態は、極論に思え

¹ de Saussure, F. (1986) *Course in general linguistics* (3rd ed.). (R. Harris, Trans.). Chicago: Open Court Publishing Company. (Original work published 1972). p. 9-10, 15.

² Hoijer, H. (1954) "The Sapir-Whorf hypothesis", in Hoijer (1954): 92-105

るこの「強い仮説」が SAJPCJP を操る SAP にこそ適用されるべきものである可能性を示しているように感じられる。この場合、「ラングとしての SAJPCJP をほぼ理解できる SAP の思考は、統語規則によって強く制限されている」、すなわち、「SAP に存しない思考が我が国の自閉症者や失語症者に存すると考えられる」との意味をも含むし、ISReJP は、むしろそのことを強く意識して考案されている。

SAJPCJP と SAE とは、実際には互いに大きく異なる文法を持っはいるが、現代一般の SAP は、言語に何らかの障害がない限りは、母語である SAJPCJP をいったん英語的世界認識に翻訳して認識していると言っても過言ではないだろう。すなわち、SAP が従っている「言語」とは、「日本語」ではなく、「英語的世界認識で記述され、学校文法化された日本語」である可能性のことである。

我々が日本語にも存在すると考えている「主体と客体の峻別、S と P(V) と O の一定の関係、Vint と Vt の分類、AV と PV の区別、PST・PRS・FUT を直線的にとらえる時制なる概念、時制から独立した相なる概念」、こういった文法範疇は、むしろ、明治期以降に輸入した SAE の文法論理と世界認識に基づく解析である。

今、このように、SAE、特に SAECW の文法論理と世界認識によって記述される日本語、現在の多くの SAP の世界認識に基づく日本語を、便宜的に SAJPCJP と呼称するのであるが、そうとすれば、「否応無しに SAJPCJP を母語としつつも、そこから放り出される少数の日本人」が発生しているはずである。

この点で、言語的相対論の是非と、「我々の母語は SAJPCJP であるから、我々の思考は SAJPCJP の統語規則の範囲内にある」ことの是非とは、全く異なった命題である。

すなわち、日常生活においては、重度の言語障害もなく SAJPCJP を操っているように観察されても、ある特定の条件下での実験を目の前にした場合には、ラングとしての SAJPCJP の文法に反するかのように見える回答を示すこともある。重度 DD 者らの世界認識は、言語的相対論を支持しないように見えるし、事実、「弱い仮説」にしか与しないのである。すなわち、SAE の立場からの普遍文法論よりも、日本の DD 者の言語世界、ひいては諸 SAE 圏の幼児の言語世界のほうが、「普遍文法的」でありうる。

ロマン・ヤコブソンは、『失語症と言語学』（1941）において、失語症者の音素崩壊過程は幼児の音素習得過程の逆順を辿るとの主張を行ったが³、ISReJP は、いわばこのことを日本語の統語論において主張している言語であると見ることができる。

また、チャールズ・フィルモアは、格文法理論において、V の深層格とそれらの格の昇格について主張したが⁴、ISReJP は、このことを日本語の通時態において主張している言語であると見することもできる。

何らかの社会的な外圧や心的外傷などによって解離性障害・強迫性障害・鬱・統合失調症・

³ Jakobson, R. (1941) Child Language, Aphasia and Phonological Universals

⁴ Fillmore, Charles J. (1968) "The Case for Case". In Bach and Harms (Ed.): Universals in Linguistic Theory. New York: Holt, Rinehart, and Winston, 1-88.

カプグラ症候群・コタール症候群などに陥った日本人の中に、言語らしき言語を話せなくなり、SAJPCJP や SAE への理解を大きく失ったにもかかわらず、この ISReJP の文法の理解が比較的容易である者が存在することが、ISReJP の何らかの言語学的意義を示していると考えられる。

あるいは、精神疾患とまでは言えないまでも、SAE や SAJPCJP の文法は理解が困難である一方で、ISReJP の文法や日本の古語、アメリカ原住民語の統語法に親和性を示す者がいる。

さらに、脳血管障害などで「失語症・失文法・錯文法」と呼ばれる状態に陥り、助詞(JPa)の使い方が「おかしくなった」高齢者の男女も、高度に抽象論理的な SAE から逆順に理解できなくなっていき、日本の古語や先住少数民族語、ISReJP に類似した格体系を現出させる者がいる。

Umt(SAJPCJP)のうち、MD・SD(SAJPCJP)のみによって「東京標準語」のような「ラング」体系は構築されがたいことを考慮すれば、ソシュールの述べる「ラング」とは、命題 $SAP=\{\forall q \in CMD \cdot p, \neg MD(p,q) \cap \neg SD(l)\}$ を満たす者の正統の文法を指していると換言できる。精神疾患以外の病理（ガンなど）は「定型発達者」でも陥り、母語以外の言語不能は「言語障害」とはされず、盲聾者や手足の不自由者は直接に「身体障害者」と呼称される。

「非定型発達者」とは、我が国においては、精神及び行動の障害者であること（とりわけ発達障害者であること）、または、心身疾患の結末としての脳機能不全による言語障害者であることと結びついており、それらの和集合と考えることができる。

一方で、ISReJP は、人類にとっての「普遍文法(UG)」があるとするならば、それはむしろ「非定型発達者」の世界解釈を積極的に加味して「能格言語的」さらに「前能格言語的」に記述されなければならないとの立場に立っていると言える。そして、この非定型発達者を Upo(ISReJP)であると考ええるものである。

ISReJP 体系においては、チョムスキーの生成文法理論は、その理論自体が「ある統語規則に束縛されてしか人の脳機能から導出されない」という解釈を受ける。

また、同様の立場から、ISReJP 体系は、イエスペルセンをはじめとして主張されてきた、英語の将来における漢語的孤立語化説⁵に少なからず異存を有していることになる。

ただし、格解釈の仕方がイエスペルセンと大きく異なるとは言っても、彼の言語文化に対する姿勢に ISReJP は多くを倣っているところがある。すなわち、彼が現代英語の蔓延を危惧し、「古き良き」「健全な」古英語の凋落を嘆き悲しんだことが、彼の言語学への情熱の根幹であると同様に、ISReJP も SAJPCJP の東京首都圏中心主義化と英語化に対する深い違和感を表明することになる。

以上の視点を踏まえ、ISReJP は、件の日本人の社会的少数者のうち、SAJPCJP の発語に支障を被った者について、文法理解のうちいかなる要素を失ったかを逆算し、失った部

⁵ Jespersen, Otto (1905) “Growth and Structure of the English Language”

分にのみ新たな単語と文法とを設けて、SAJPCJP で誤りとされる文法を許容する状態を作り出している。

例えば、DD を重度に引き起こしている一部の日本人女性には、ISReJP が最も自然に感じられ、SAJPCJP が次に自然であり、英語が最も理解困難である。彼女らは、主格言語 NOM-L を放棄して、能格言語 ERG-L 化した SAJPCJP を話す。

重度の DD を負った女性においては特に、述語論理 PL の各記号・規則への理解が失われるのは同時ではない。PL への理解が共時的に成立するのは、SAP で心的外傷を負っていない者の脳においてのみであって、或る統語規則が理解できていながら或る別の統語規則が理解できていない脳の様態が DD などで見られる。

これを SAJPCJP 内では、例えば、「A と B(A and B)」なる文法が理解できて「A か B(A or B)」なる文法が理解できていない DD 女性がいる。ISReJP においては、「自分がどの言語段階にいるか」は、自己領域を表す我燈 Ga によって宣言することができる。

特に離人症性障害では、ある程度重度であっても現実検討能力が維持されることが知られる。例えば、自己と身体とが一致せず、自己だけが他者の身体や他物体に移動したように自覚される場合でも、実際の自らの身体の範囲は了解し、遠方から操作しているかのように身体を動かすことができる。あるいは、「A か B」なる文法が理解できなくとも、それが理解できない自己を理解している。

SAJPCJP の理解が困難でありつつ ISReJP は理解できることを了解している自己というものがいかなるものかについても、なるべく仔細を記したい。ISReJP 使用者が SAJPCJP を発した場合に見られる「ミス」を、以下にいくつか挙げておく。

- (1) 「を」の脱落 （「私は髪とく。」）
- (2) 中動態の使用範囲の著しい拡張
- (3) 「と」の脱落 （「あなたがこの本ほしい言う。」）
- (4) 主体への「の」の多用 （「春の来て、」）
- (5) V の活用の崩壊 （「私、これ食べれ。」）

ISReJP は、このような「ミス」が「ミス」とされない文法体系を有していると言うことができるが、SAJPCJP の使用に支障がないほどに回復した場合には、ISReJP を放棄することも、言語学的・知的な遊戯としての位置付けに残すことも可能であるし、一方で、SAJPCJP に苦痛を感じる者が ISReJP を符牒型の第二母語として使うことを求めるならば、それも許容するものである。

また、Umt(ISReJP)に見られる自己言及の特殊性は、クルト・ゲーデルが不完全性定理の原論文で挙げた「リシャールのパラドックス」や「うそつきのパラドックス」と密接な関係がある。

「私には x が理解できない」という文 Se1 の x に「私には x が理解できない」という文 Se1

を代入すると、Se2「私には『私には x が理解できない』が理解できない」となるが、自己の現実性保持と自己の遊離とを自己内に共立させることが可能な一部の解離性障害、特に離人症者においては、Se1「私には x が理解できない」が理解できていながら Se2「私には『私には x が理解できない』が理解できない」が理解できない言語障害併発者が存在する。

このことは、或る数学や論理学の公理や推論規則の体系が、或る自我様態においてしか生成され得ないことを示している。

ある重大な心身の外傷を負って「 $=$ 」への理解を保ったまま「 $+$ 」への理解のみを失った場合には、その者は「 $1+1=2$ 」について、現代日本語としては「私には $1+1=2$ が理解できない」と言明するはずである。

このような者の自己は、「足し算」について別の形式的体系を有していると考えられる。このことを自己が現代語で表明し得ない場合を「自閉症」や「言語障害」と医学が見なししていると、ISReJP は分析するものである。

§2 音素・書記素体系等

ISReJP の文法を論じるに当たって、ISReJP 五十音図をはじめ音素・書記素に関する事項を掲げておく。

2.1 音素・書記素

SAJPCJP とほとんど同様であるが、ISReJP 特有の発音が出現することもあるため、以下に留意点を掲げておく。

あいうえお	a,i,u,e,o
かきくけこ	ka,ki,ku,ke,ko
さしすせそ	sa,si,su,se,so (sha,shi,shu,she,sho)
たちつてと	ta,ti(chi),tu(tsu),te,to
なにぬねの	na,ni,nu,ne,no
はひふへほ	fa,fi,fu,fe,fo (ha,hi,hu,he,ho)
まみむめも	ma,mi,mu,me,mo
やいゆえよ	ya,yi(i),yu,ye(e),yo
らりるれろ	ra,ri,ru,re,ro
わゐうゑを	wa,wi(i),wu(u),we(e),wo(o)

ん n

がぎぐげご	ga,gi,gu,ge,go
ざじずぜぞ	za,zi,zu,ze,zo
だちづでど	da,di,du,de,do
ばびぶべぼ	ba,bi,bu,be,bo
ぱびぷぺぽ	pa,pi,pu,pe,po

きやきゆきよ	kya,kyu,kyo
ぎやぎゆぎよ	gya,gyu,gyo
しやしゆしよ	sha,shu,sho
じやじゆじよ	ja,ju,jo
ちやちゆちよ	cha,chu,cho
にやにゆによ	nya,nyu,nyo
ひやひゆひよ	hya,hyu,hyo

びやびゅびよ bya,byu,byo
ぴやぴゅぴよ pya,pyu,pyo
みやみゅみよ mya,myu,myo
りやりゅりよ rya,ryu,ryo

(1) サ行音は、SAJPCJP のサ行音のほかにシャ行音となることがある。重度の MD・SD 者らの中にこれらの区別が付かない人がいるためである。

サ行音とシャ行音を使い分けられない方言は、中国地方にも、形骸化したものの、残存する。(広島方言の「～しなさい」＝「～しんしやい」など。)

なお、近世の庶民の多くは、サ行音とシャ行音に区別を付けていなかった。アイヌ民族は、明治時代に至ってもなお両行音の区別が付かず、戦後、これらを区別する SAE の影響を受けた SAJPCJP を母語とする人が増えて、その伝統的音韻体系が失われた。

(2) タ行の「チ」「ツ」は、SAJPCJP の「ティ」「トゥ」(近世以前日本語の「チ」「ツ」)で発音されることがある。

(3) ハ行の子音は、SAJPCJP では「ハ」「ヘ」「ホ」と「ヒ」と「フ」とで全く異なっている。「ヒ」のみ舌の位置が急上昇し、「フ」のみ唇を使う。「フ」は「ク」からほど遠いが、「ヒ」はほとんど「キ」に近く、時代が下るにつれて両者は接近している。

しかし、重度の PDD・MD・SD 者らにおいて、ハ行の発音が平安時代以前の発音(現在のファ行やパ行発音)に戻る者がいる。

ISReJP では、ハ行は SAJPCJP のファ行(平安日本語のハ行)で発音することを許可している。ただし、奈良時代や有史以前のパ行発音にまで遡ると、現行の外来語(「ポット」など)の表現が困難となるため、ファ行とは別に、明確な「p」を子音とするパ行を設ける。

(4) ザ行の「ジ」「ズ」とダ行の「ヂ」「ヅ」は、SAJPCJP では同じ発音であるが、戦前までは両者を区別する人が多く、現在では山梨県奈良田方言⁶など一部にしか残されていないものの、重度の MD・SD 者らでは、これらの区別が再び生じることがある。

ただし、現代の若い MD・SD 者の場合、「藤(ふぢ)」や「富士(ふじ)」といった古語の知識が必ずしもあるわけではなく、それが無くとも「zi,zu,di,du」が現れる。つまり、「藤」も「富士」も、それぞれ「ふぢ」及び「ふじ」と発音することがある。

⁶ http://home.hiroshima-u.ac.jp/ikonishi/narada/narada_tu&du.html (山梨県奈良田方言を話す男性の音声ファイル) 上記の発音は、現在の一部の発達障害者や重度の解離性障害者らの発音に似ている。

2.2 漢字仮名交じり文及び外来語

SAJPCJP と同じく、漢字仮名交じりで書けばよく、また正字・正仮名で書いてもよい。外来語の仮名書きも自由であり、例えば「ラジオ」を「ラディオ」や「ラヂオ」と書いてもよい。ただし、一個人または一センテンスの中では、そろえることが好ましい。

§3 文法範疇

3.1 品詞全般

上古代日本語から SAJPCJP に至るまでに登場した名詞、形容詞の語幹、形容動詞の語幹、動詞の語幹、助動詞の語幹、助詞、副詞、代名詞、連体詞、接続詞、感動詞の全ての語彙は、ISReJP でも用いてよい。

ただし、ISReJP では、助詞のうちのいわゆる格助詞だけは極めて特異な使われ方をし、ISReJP 固有の格助詞と合わせて「格詞」と呼ばれる。

3.2 格詞

ISReJP は SAJPCJP と大きく異なる格体系を持つ。格なる概念も、ISReJP においては便宜的に持ち出された文法範疇にすぎない。名称については、「空格」及び「識格」はそれぞれ、格のはたらきのほか、仏教用語の「空」と「識」にも由来する。

「空格」から「活主間格」までは「真格（しんかく）」と呼ばれて「真格連続体」を形成し、SAJPCJP や SAECW の「主格」に対峙して使用される。

「真格（連続体）」は「阿頼耶（あらや）格（連続体）」とも呼ばれ、これも仏教用語の「阿頼耶識」に由来する。

格詞の前に置かれる最多の語である「ワ」は、「ワタシ（私）」や「ワレ（我）」の「ワ」であり、普通名詞内の我名詞扱いとする。人称代名詞は ISReJP に存在しない。

「ワ」の代わりに、「ボ」（「ボク」の省略）や「オ」（「オレ」の省略）などを用いてもよい。また、省略しなくともかまわない。

格詞は、我名詞以外のあらゆる語にも付されうる。

3.3 燈詞

ISReJP では、SAJPCJP の品詞に加えて「燈詞」と呼ばれる品詞が設けられ、属する単語には「ウ」「オ」「イ」「ア」「エ」の五母音がある。

これらは、自身の付される単語の最後の音節の子音を伴う。（「海」→「海め」など。）

ただし、母音の後では「ル」「ロ」「リ」「ラ」「レ」、ン」の後では「ヌ」「ノ」「ナ」「ニ」「ネ」となる。濁音の後もラ行となることが多い。

これらは、「N（「ワ」など）＋格詞」の後を最多として、その他のあらゆる語の後に付されうる。このとき、「～言（げん）～形（けい）」と呼ばれる。単に「言」と言った場合、「言」と「形」の両者を含む。

「我名詞＋格詞＋燈詞」のまとまりは、特に「我燈」と呼ばれる。或る体言について、こ

の我燈 A が文章中の或る箇所で宣言された場合（我燈宣言）、我燈 A から次の同一の体言に付く別の我燈 B が出現するまでの全ての語句と文が、我燈 A で示される「自我様態」によって発言されていることを示す。

例えば、「ワ」の能格は、以下のように燈詞を付して我燈を形成する。その意味については、次項で解説する。

ワノウ（能格基本形）

ワノウル、ワノウロ、ワノウリ、ワノウラ、ワノウレ

我燈の中には、省略形を持つものが存在する。（詳しくは我燈一覧表を参照。）

例：ワカツシュソ → ワカツソ

3.4 動詞・形容詞・形容動詞・助動詞

ISReJP の用言の未然・連用・終止・連体・仮定（已然）・命令の六つの活用それぞれが、さらに言（げん）に五段活用する。既存の全ての用言は、これらの活用を持つ。さらに、ISReJP の「ほとんどの段階」の動詞においては、自動詞と他動詞の区別が消滅する。

「触る」を例に取る。

（表記は、「サフル」でよいが、発音は主に「サファル」「サバル」として平安日本語に準ずる使用者もいる。）

順に、未然、連用、終止、連体、已然、命令形を表す。

(1) 常観言（じょうかんげん）

ISReJP における動詞の活用概念と同様である。

サワラ、サワリ、サフル、サワル、サワレ、サワレ

(2) 通観言（つうかんげん）・・・五種類に分類

これ以下は、MD・SD 者らが多用する活用。

(a) 心描言（しんぴょうげん）

PDD・MD・SD 者らは、この活用を用いて、「自らの解離症状などを良しとする」安堵の心の表現を許される。例えば、「サワレル・バ」で「今の解離状態で物を触るのは、なんだか心地よくて、今実際に触ったなら」を表現する。

サワラル、サワリル、サワルル、サワルル、サワレル、サワレル

(b) 抽化言 (ちゅうかげん)

心描言と抽出言の間の概念を表す。心描言を抽出言化しようとする精神的過程に伴う中程度の心労をこの言で表現しうる。例えば、「サワラリ・ナイ (否定)」で「ある程度頑張ってみれば、私には“触る”という行動はできるのだが、今はしない」を表現する。

(ア) 抽化言未然形

サワラロ、サワリロ、サワルロ、サワルロ、サワレロ、サワレロ

(イ) 抽化言已然形

サワラリ、サワリリ、サワルリ、サワルリ、サワレリ、サワレリ

(c) 抽出言 (ちゅうしゅつげん)

「触ることをする」「触るということをする」「接触なる行動をする」「五感のうちの触覚をおこなう」といった高度抽象概念に該当。

SAP(SAJPCJP)は、「触る」と「ということ」とを結び付けたり、音読み漢語「接触」を用いたりして、英語の touch を表現するが、重度の MD・SD 者らはこれが困難である。

そこで、そのような抽象概念のほうを特殊化して、この言で表す。例えば、「サワリラ・テ (接続助詞)」で「周囲の一般現代日本人の言う“接触”なる概念に当たる動きは、私にとっては頑張ってもできないことであるのに、今それを頑張ってしまうとしていて」を表現する。

(ア) 抽出言未然形

サワララ、サワリラ、サワルラ、サワルラ、サワレラ、サワレラ

(イ) 抽出言已然形

サワラレ、サワリレ、サワルレ、サワルレ、サワレレ、サワレレ

3.5 時制・相・法・態

ISReJP の時制・相・法は、各真我 (主我) によってその分化の程度が異なる。

また、能動態と受動態の区別が一度解体され、代わって中我態 (ちゅうがたい) が設けられる。例えば、「物を落とす。」を「物を落ちられる。」と言うなど、「レル」「ラレル」の使い分けが SAJPCJP に照らして不可解であることをもって、中我態の実現と見なす。

厳格な能動態と受動態の区別は主我 (「ワタシ」) 構文にのみ存する。

§ 4 我燈宣言規則

- (0~2) 空我者は空我宣言をおこない、空言語（空格言語）を使用することができる。
- (0) 前我者は前我宣言をおこない、前言語（前格言語）を使用することができる。
- (1) 擬我者は擬我宣言をおこない、擬音・擬態言語（擬格言語）を使用することができる。
- (2) 初我者は初我宣言をおこない、初言語（初格言語）を使用することができる。
- (3) 空識間我者は空識間我宣言をおこない、空識間格言語を使用することができる。
- (4) 識我者は識我宣言をおこない、識格言語を使用することができる。
- (5) 識具間我者は識具間我宣言をおこない、識具間格言語を使用することができる。
- (6) 具我者は具我宣言をおこない、具格言語を使用することができる。
- (7) 具及間我者は具及間我宣言をおこない、具及間格言語を使用することができる。
- (8) 及我者は及我宣言をおこない、及格言語を使用することができる。
- (9) 及希間我者は及希間我宣言をおこない、及希間格言語を使用することができる。
- (10) 希我者は希我宣言をおこない、希格言語を使用することができる。
- (11) 希能間我者は希能間我宣言をおこない、希能間格言語を使用することができる。
- (12) 能我者は能我宣言をおこない、能格言語を使用することができる。
- (13) 能意間我者は能意間我宣言をおこない、能意間格言語を使用することができる。
- (14) 意我者は意我宣言をおこない、意格言語を使用することができる。
- (15) 意活間我者は意活間我宣言をおこない、意活間格言語を使用することができる。
- (16) 活我者は活我宣言をおこない、活格言語を使用することができる。
- (17) 活主間我者は活主間我宣言をおこない、活主間格言語を使用することができる。
- (18) 主我一者は主我一宣言をおこない、主格言語一を使用することができる。
- (19) 主我二者は主我二宣言をおこない、主格言語二を使用することができる。
- (20) 主我三者は主我三宣言をおこない、主格言語三を使用することができる。
- (21) 主我四者は主我四宣言をおこない、主格言語四を使用することができる。
- (22) 主我五者は主我五宣言をおこない、主格言語五を使用することができる。
- （主我六以降も同様。）

§5 解離性障害者等の世界認識

以下、ISReJP の文法構築の手法を解説する。解説の読解のためには、先述した精神疾患分類についての知識を有していることが望ましく、随時 ICD や DSM などの疾病分類を参照されたい。

ここに、括弧内に任意の C-JPa を記入するよう要求する検証実験がある。これを、まずは PDD 男性 K 及び DD 女性 E に対しておこなった。

風（ ）扉（ ）ひらく。

私（ ）扉（ ）ひらく。

「ひらく」は「～がひらく (Vint)」と「～をひらく (Vt)」とで形が変わらない。このような V は「能格動詞(Ve)」と呼ばれている。「～があく」と「～をあける」ならば、形が違うので、そうは呼ばれない。つまり、「ひらく」ならば、直前の（ ）には「が」も「を」も入りうる。

この実験を数十人の一般定型発達者・精神疾患未罹患者(SAP)に試したところ、以下のような回答であった。

「風で扉がひらく」「風が扉をひらく」「風は扉をひらく」

「私が扉をひらく」「私は扉をひらく」

ところが、K と E の回答では、SAP の回答に加えて次の三つが加わった。

「風で扉をひらく」

「私で扉をひらく」「私で扉がひらく」

すなわち、K と E は、S が「風」か「私」かに関係なく C-JPa を全て統一する。

E は、罹患直後、SAJPCJP や日本の古語は理解できるのに英語が理解できない状態となったが、これが偶然ではないことが分かる。英語では、「I open～」と言うときの「I」のシニフィエは、「私が」と「が」までを含んでおり、「私が好きな花」「私の好きな花」といった、日本語では許される C-JPa の入れ替えは、ただちに文法違反となる。

例えば、英語圏の子どもは、「I love you.」を「My love your.」などと誤る時期を通過して育つが、ISReJP ではこのような誤りを誤りと見なさず、幼児期に普遍の外界解釈であると見なして許容する立場に立つ。

すなわち、PDD や DD を有する日本人の外界解釈は、それだけですでに非英語的である。「風で扉を」とは、自ら風を操ったり風になりきっているかのようであるし（心的外傷を

負った自己を大自然に没入・希釈させる)、「私で扉を」とは、まるで自分を傍観したような言い方である(心的外傷を負った自己を傍観する)。このことは CVD 患者でも起こるが(失文法)、今一度このような検証実験を、以下に解説するように何十個も用意した。

「私」と「風」のそれぞれを主体とする文の統語上の区別を文法上でも付けない言語は、比較的先進国と言える国では、グルジア語やバスク語など先住民の言語にしか残っていない。

「心的外傷を負った日本人の脳は、心的外傷を軽減しようと壮絶な努力を払うあまり、原始的な自然言語や PDD 者・小児の言語の認識世界に前戻る」ということが、以下の検証実験によって見出されることになる。

普段、我々はどうして「風で扉が」、「私が扉を」と言い分けることができるか。「風」が生命体ではなく、「私」は生命体である、という判断を無意識におこなって、これを格の使用に反映させる、「すでに或る一定の立場の統語論者」であるからに他ならない。

世界の自然言語の文法分析によって、近現代西洋的な「自我」が成立したこと、自然物を生物と無生物に分けるようになったこと、V に Vint と Vt の区別が導入されたことは、トートロジーであることが導き出される。

時制や態といった概念も同様である。すなわち、幼児期の解離感が蘇るほどの精神的な裂傷を経験した日本人失語症者の言語認識は、SAECW の文法記述によっては説明できない。ところが、そういった者への精神科医や言語聴覚士などによるカウンセリングやリハビリは、SAECW の文法で記述される SAJPCJP によっておこなわれる。

私は先述の K と E に、「現行の助詞の使い方などにかまわず、思うことを名詞と述語だけで話してくればよい」と助言した。「私、扉、ひらく。私、買い物、好き」などである。「私が買い物キョ好き」でも良いわけである。

近世以前の日本語においては、「花咲く」「風吹く」などと C-JPa を抜くのが一般的であった。また、これから解説する手法によって、これらが「花が咲く」「風が吹く」の省略ではないことが導出される。

現在の CVD の主要なリハビリにおいては、「扉を」と話しかけては「扉を」と発話させ、「ひらく」と話しかけては「ひらく」と発話させるなど、患者にリピートさせるのみで、統語上の違和感には特に言及されない。

これについて、ISReJP は、「C-JPa 機能(格機能)の原始性を文法違反としない」という逆手の統語規則を規定する。

これらの手法を何度も E に繰り返した結果、精神科・心理カウンセラーにかかっても軽減されなかった心的外傷も、次第に収まり、現在では元の日本語能力をも取り戻した。むしろ、K は依然として SD(SAJPCJP)を有し、ISReJP 体系の中にとどまっている。

§6 世界認識の連続体性

脳血管障害(CVD)なる病名については人口に膾炙しているが、CVD でいかなる SD が発生するかについてはそうとは言えない現状がある。そして、それと同様の SD が DD 者でも起こることを概説しておく。以下は、私が実際に耳にすることのできた会話である。

「今日、私が外を歩いているとき、強い風が吹いてきた」

「今日、私の外で歩いているとき、強い風で吹いてきた」(*)

「今日、私がそちゅ、そき、そぐ、そとを歩いているとき、強いかちよ、かぶ、かぜが吹いてきた」(*)

「何の花が好きかと聞かれても、すぐには答えられないですよ」

「何に花の好きかと聞かれても、すぐには答えられないですよ」(*)

「今日は久々に母と A さんと外食して、電車で帰ってきました」

「今日は久々に母、A さん、外食、で、電車、帰ってきました」(*)

これら(*)のうち、最初の文は DD 女性、下の二文は CVD 患者が発した口語文である。

運動性失語・伝道失語と呼ばれる症状では単語（特に N）自体が発話できなくなる。これは、ほとんど CVD 患者ばかりに起こるが、重度の DD 者や SCH 者でも頻繁に起こるのであり、虐待・暴力被害者女性でもよく起こる。

ここから、まず、「DD 者や SCH 者らは、すでに日常的に、CVD 患者や虐待・暴力被害者の言語認知・世界認識を生きている可能性がある」と仮定することができる。DD や SCH については、幼児期、あるいは原始人類や巫女・シャーマンの自我変容様態との関連性が指摘されている。

これらが正しいとすれば、「CVD 患者らは、まずは、より新しく高次な言語機能から失われ、古形言語に前戻る形で SD を呈する」、あるいは「DD 者らは、心的外傷の衝撃のあまりに、幼年期・若年期の言語認知を遡及する」などの可能性があることになる。

今一度概説すれば、DD 者・CVD 患者などには、JPa の使い方がまるで変わってしまう症状が見られる。これを失文法と呼んでいる。

「今日、私が外を歩いているとき、強い風が吹いてきた」

「今日、私の外で歩いているとき、強い風で吹いてきた」

ただし、この症状は「失文法」ではなく「文法の原始退行」にすぎないという再解釈を受けることが可能であるということである。

単語 (特に N) 自体が言えなくなる症状についても、DD 者らには頻繁に起こる。これは、いわゆる「吃音・どもり」とは異なる。

「今日、私がそちゅ、そき、そぐ、そとを歩いているとき、強いかちよ、かぶ、かぜが吹いてきた。」

ISReJP の語彙は SAJPCJP の語彙に頼っているので、この症状を持つ者には ISReJP はあまり効果がないとも言える。

それにしても、言語というのはそもそも何であろうか。この問いについては、ISReJP は、「言語とは、第一に文法（統語規則）である」という立場を取っていると言えるかもしれない。次の文章を読んで、英単語の割合が高いからと言って英語だと判断する日本人が多数を占めるならば、「言語とは、第一に語（語彙論）である」ことになる。

「カーレースのフォーミュラ・ワンにエントリーするには、ドライバーはスーパーライセンスを持っていなければならない」

例えば、「もの」「おひさま」という単語の音声（シニフィアン）の意味（シニフィエ）を原始日本まで遡ることには意義があるが、「ぶったい」「たいよう」という単語の音声のシニフィエを原始日本まで遡ることには意義がない。それらは原始漢民族に尋ねるべきことである。

明治以降に有識者が漢語由来の音を組み合わせて産出した「物体」「太陽」などの語を発音できないことは、日本の MD 者や SD 者の世界認識の方法の変容（文法の退行）とは関係がない。心的損傷を負って N そのものが発音できなくなるケースよりも、JPa の使い方が突如としておかしくなるケースが多いのは、偶然ではないだろう。

現在は、いわゆる自然言語は主格言語や能格言語に収束させて説明するのが一般的で、ただし、最近は新たに活格言語という解釈も出てきた（後述）。ただし、それらはあくまでも人類が言語というものを持ってから今日までの、ある時代を共時的に抽出してその言語を解釈したときの、文法の統語論的記述である。

それを ISReJP は通時的連続体としてとらえて、「格という概念は常にとどまることがない」ということを述べている。今見たように、「風、吹く」という語が与えられたとき、SAP は古語を模倣して「風吹く」「風ぞ吹く」と言ったり、現在の格解釈で「風が吹く」と解釈したりする。

ところが、重度の DD 者などには、実際に「風で吹く」という SAJPCJP に近い感覚として認識されていることを、ISReJP は検証する。これに従えば、例えば藤原定家の次の歌について、

「白妙の袖の別れに露落ちて身に染む色の秋風ぞ吹く」(藤原定家)

の歌のシニフィアン(記述された文字)のシニフィエ(意味内容)は、

「白妙の袖の別れに露で落ちて身に染みる色の秋風こそ吹くのであるよ」

という変則 SAJPCJP に近い、との解釈が成立する。すなわち、「露落ちて」のように何の格標識もないところは、単なる三十一文字の字数合わせではなく、「の」や「ぞ」よりも非主格的・遠主格的・傍観的に詠まれている、という解釈を下すのである。詠み手の「自我」と自然物である「露」との間には、主客関係ではなく、不可分な一体性が自覚されている。

ところで、「私が扉を」「風で扉が」と言い分けられないグルジア語やバスク語の話者は、「私」が生命体で「風」は生命体ではないことを認識しないのか、という問いは、必ず SAP の自我から出てくる。

これは、軽度の離人症者のみならず、重度の DD 者らにさえ、生命体と非生命体との区別を「理解・認識・思惟」しないけれども外界を「感覚・知覚」していて正確に社会生活ができる現実検討能力保持者がいる、ということによって説明が付くと考えられる。

生命体と非生命体の厳格な区別がなければ人間の思惟や社会生活は生じないとの、いわば「曲解された言語的相対論」は、主格言語化した SAE による統語観によって発生したものであるだろう。

重度 DD 者には、「物体の境界線」が分からない者も存在する。例えば、机の上に本が置いてある。一般の者は、「机」と「本」という名前をそれぞれに与える。それがいわゆる N の始まりである。

ところが、これら一部の DD 者の中には、例えば、机のうちの横に平らな上部(天板)と本とをまとめて「A」、机の残りの脚部分を「B」と名付ける者がいる。好きなように物体を区切るよう指示すれば、そのような分け方をする者がいる。

このような者で、自力で社会生活を送れる人はほとんどいないが、女性ならば、全体として PDD 者が少ないために、自らの言葉で特殊な外界分節法を発話できる場合がある。

このように、「物体の境界線が、全く無いか、別の方法で引かれている状態(前言語時代・幼児期)に戻る」、「自我と他の物体との境界線が分からない」といった MD 者や SD 者も、「風、吹く」という言葉が与えられると、実際に「風が吹く」だけでなく、「風で吹く」「風を吹く」と答える場合がある。

むろん、JPa の「誤り」の頻度は、自己解離や自己統合失調の程度におおまかに比例する。それを詳細に調べ上げた結果が、この後に解説する別添資料(6)である。彼ら=Umt(ISReJP)の使う「で」や「を」は、むろん普通の周囲の SAP に合わせた生活で用いている SAJPCJP から来ている。

上代日本語には、「い」という格標識らしきものがあり、「風い吹く」とも言えるはずだ

が、Umt(ISReJP)がそう言わないことは、「い」を周囲の SAP(SAJPCJP)が使わないからということのみに起因している。また、「ぼ」や「ち」などといった自作の JPa も使わない。すなわち、「風で吹く」は、主格のニュアンスで「で」と言ったのではなく、実際に「風」に、周りの SAP(SAJPCJP)が使っている具格・処格に当たる音声を付けるべきだと即断して「で」と言ったのだということが分かる。

ISReJP は、SAJPCJP の統語規則を忘却しかけた日本の DD 者らの世界認識を実際に写し取ったらどうなるかということ、統語規則によって語ろうとしている。

例えば、後述する KI-L から NO-L への移行は、おそらくは幼児や原始人が、「自ら希求したこと」が「人為的に可能になる」ような自我状況・文明を迎えたときに起こった変化であろうと推測することができる。

これによって、従来の能格=ERG という概念、または Umt(ERG-L)の世界認識・自己意識は、ISReJP で言う KI という概念、または動作主である「自己」に KI を付けようとする（「希望」しない動作をする「自己」には格を付けない）重度の DD 者の世界認識のあとに生じたものであろうことが推測できる。

現在でも ERG 構造を潜在的に有する日本語を実質的な公用語とする日本で、なぜ精神医学が発達せず、巫女やシャーマン女性の解離症状（巫病）が長らく「病理」と扱われなかったかが説明できる。

今後、我々の SAJPCJP も変化して SAECW 文法に接近し、その SAECW もさらに厳格な主格主語 NOM-S を持った疑似孤立語的屈折語に変化していくことが考えられる。

§ 7 現行の言語学の格解釈の再考

一般に「格(case)」とは、N や NPh が文 Se の中でいかなる関係性を持つかについての標識であると説明される。格標識の形だけで見れば、SAJPCJP が主格・対格言語 NOM-ACC-L (略して主格言語 NOM-L) であることは疑いようもない。

EgoMA(NOM-L, NOM-L, SAJPCJP)

SAJPCJP $\in$ NOM-L

[NPh : N-NOM [VPh : Vint]] 名詞 (主) + 自動詞。(例 : 春が来る。)

[NPh : N-NOM [[NPh : N-ACC] VPh : Vt]] 名詞 (主) + 名詞 (対) + 他動詞。(例 : 私が花を見る。)

NOM-L においては、Vint の S と Vt の A とが同じ格標識 NOM で、Vt の O が別の格標識 ACC で表される。SAJPCJP において、ほぼ「が」は NOM、「を」は ACC である。

SAECW においては S の存在は明白であるから、この NOM-L の定義は疑われようがなく、むしろこの説明に合うように人為的に文法が構築されているとさえ言えようが、日本語において果たして V の自他(Vint or Vt)の区別の前提、S の存在の前提が正しいかどうかについて、三上章をはじめとして多くの議論がなされてきた。

三上は、V に関しては所動詞と能動詞の分類を立てたが⁷、のちに破棄した。以来、日本語に S はあるのか、V にいかなる分類があるのか、あるいはないのか、諸説乱立で結論は出ていない。

NOM-L とは異なる文法を持つ言語があることは古くから知られたが、今日ではほとんどが能格言語と呼ばれている。

EgoMA(NOM-L, NOM-L, ERG-L)

[NPh : N-ABS [VPh : Vint]] 名詞 (絶) + 自動詞。(例 : 春 β 来る。)

[NPh : N-ERG [[NPh : N-ABS] VPh : Vt]] 名詞 (能) + 名詞 (絶) + 他動詞。(例 : 私 α 花 β 見る。)

ERG-L においては、Vint の S と Vt の O が同じ格標識 ABS で表され、Vt の A が別の格標識 ERG で表されると説明される。ABS は多くの場合、無標 ϕ (何も書かない・言わない) である。ERG-L で特に知られているのは、グルジア語及びバスク語である。

グルジア語では以下の通りである。

EgoMA(NOM-L, NOM-L, Georgian Language)

⁷ 三上章 (1963) 『日本語の論理』『日本語の構文』 くろしお出版

k'ar-i da-i-nur-a. 「扉が閉じた」

扉-ABS-閉じる-PST

k'ac-ma k'ar-i da-nur-a. 「男が扉を閉じた」

男-ERG 扉-ABS-閉じる-PST

このとき、S としてはたらいっているのは、ABS のほうであるということに注意しなければならない。全ての言語に S が存在するとの説を支持しない場合は、「Vint の主体と Vt の客体と同じ格標識 ABS になる」との説明になるし、Vint と Vt の分類を支持しない場合は、「ある分類に属する V の S は、別の分類に属する V の O と同じ格標識 ABS になる」との説明になる。

ERG-L の母語話者がいかなる世界認識を持っているかを SAP(SAJPCJP)が知るには、次の文を参考にするとよい。

風 () 扉 () 閉じる。

男 () 扉 () 閉じる。

SAP(SAJPCJP)はこれらの文を見たとき、後述するように、まず瞬時に「有生物」と「無生物」という、NOM-L 話者に特徴的な世界認識によって主体を外界から峻別し、V もそれに合わせて、「風で扉が (は) 閉じる」と「男が (は) 扉を閉じる」というように、前者の「閉じる」を Vint、後者のそれを Vt に無意識のうちに分け、「風」を INS「で」で標識する。あるいは、「風が扉を」とすることはありえても、「男で扉が」とはしない。

ところが、ERG-L 話者や日本の DD 罹患者には、これらの「風」と「男」、二つの「閉じる」に文法上の区別はない。どちらの N にも「で」と「が」が付きうるし、どちらの V も Vint と Vt でありうる。

そして、実際には現存する多くの ERG-L が、ある時制、ある相などにおいては必ずしも ERG-L の性質を示さず、ABS が Vt の主体を標識したり、ERG が Vint の主体に波及したりする。

例えば、グルジア語では、Vint であつても ERG を取ることがある。⁸

「男が働く」(FUT) . . . NOM

「男が働いている」(PROG) . . . NOM

「男が働いた」(PST) . . . ERG

「男が働いた」(PERF) . . . DAT

また、どのような Vint が ERG を取るのかを以下に示す。

⁸ 児島康宏 (2007)「グルジア語の能格」 麗澤大学言語研究センター

【Arg(ERG)を取る Vint】

pikr-ob-s 考える
lap'arak'-ob-s 話す
sauzm-ob-s 朝食をとる
i-cin-i-s 笑う
nerviul-ob-s 心配する
locul-ob-s 祈る
cnovr-ob-s 住む
cek'v-av-s 踊る
cura-ob-s 泳ぐ
t'ir-i-s 泣く

【Arg(ERG)を取らない Vint】

k'vd-eb-a 死ぬ
nd-eb-a …になる
t'q'd-eb-a 割れる
e-lod-eb-a …を待つ
e-nmar-eba …を手伝う、助ける
vard-eb-a 落ちる
dg-eb-a 立つ
i-zrd-eb-a 育つ
jd-eb-a 坐る
tb-eb-a 温まる
mi-d-i-s 行く
i-k'arg-eb-a 失くなる
ar-i-s …である、いる、ある

意志的・能動的な行為を表す Vint は ERG を取りやすいことが分かる。このように、ERG-L 性が或る条件において成り立たない現象を、類型論上は「分裂能格性」と呼んでいる。(ISReJP では SepERG と表記。)

さらに近年、特にクリモフらの内容的類型学では、これまで ERG-L の一種とされてきたアメリカ原住民の言語などが別の類型に属するとされており⁹、日本では活格言語と訳されている。(ここでは、ACT-L と表記。)

⁹ Klimov, G. A. (1974) On the character of languages of active typology. *Linguistics* 131: 11-25.

ACT-L では、Vint が主に二つの分類 (Vina と Vine) を受け、Vine の S が ACT を取る
とされる。

EgoMA(NOM-L, NOM-L, ACT-L)

[NPh : N-STA [VPh : Vint]] 名詞 (不活) + 自動詞。(例 : 春 β 来る。)

[NPh : N-ACT [VPh : Vine]] 名詞 (活) + 非能格動詞。(例 : 鳥 α 飛ぶ。)

[NPh : N-ACT [[NPh : N-STA] VPh : Vt]] 名詞 (活) + 名詞 (不活) + 他動詞。(例 :
私 α 花 β 見る。)

ERG-L と ACT-L が NOM-L よりも古形であって、現在の少数民族言語に偏って見られ、
絶滅または激減し始めていることは研究者には共通して把握されているようであるが、そ
のものを除いては、言語学者によって解釈が千差万別である。

「あらゆる人類の自然言語は、ERG-L $\rightarrow$ ACT-L $\rightarrow$ NOM-L と変化する」と主張する者もい
れば、「ACT-L $\rightarrow$ ERG-L $\rightarrow$ NOM-L と変化する」と主張する者もいて、定まらない。ISReJP
は、前者の説を概ね支持しつつも、これまでに挙げてきた「NOM-L」「ACT-L」「ERG-L」
といった類型論、あるいは Vint と Vt、Vina と Vine といた分類に疑念を呈し、一旦解体
するものである。

それらは全て NOM-L 母語話者による他言語解釈 EgoMA(NOM-L, NOM-L, 13)でしかなく、
これに対して EgoMA($\neg$ NOM-L, $\neg$ NOM-L, 13)を満たす類型論を構築する必要がある。

§ 8 解離性障害者等への検証実験

現代の SAP(SAJPCJP)の男女と、先述の DD 罹患者らとの外界解釈の差異を調べるため、いくつかの検証実験を行った。一つを以下に挙げる。

次の各文の () 内に、「は・が・の・を・に・へ・で」の中から自由に選んで、(a)と(b)に記入し、文を完成させて下さい。

「何も入れない」との回答も可能とします。また、上記のうち使わない語があっても構いません。これまでに獲得した母語に照らして違和感を覚えない範囲内で、自由にご回答下さい。

(実際の実験では、以下の文を不規則・順不同に出題した。各文の番号は、この文法解説のために実験後に付加したもの。)

(1-1) 私 (a) 移住する。

(1-2) 私 (a) 結婚する。

(1-3) 私 (a) 動揺する。

(1-4) 私 (a) 振り返る。

(1-5) 私 (a) 泣く。

(1-6) 私 (a) 転ぶ。

(1-7) 私 (a) 座っている。

(1-8) 家 (a) 建つ。

(1-9) 時間 (a) 残る。

(2-1) 私 (a) 扉 (b) 作る。

(2-2) 私 (a) 扉 (b) 閉める。

(2-3) 私 (a) 海 (b) 好む。

(2-4) 私 (a) 海 (b) 見る。

(2-5) 私 (a) 元気 (b) 出す。

(2-6) 私 (a) くしゃみ (b) する。

(2-7) 私 (a) 声 (b) 出している。

(2-8) 木 (a) 花 (b) 咲かせる。

(2-9) 風 (a) 花の香 (b) 運ぶ。

(3-1) 私 (a) 糸 (b) 張る。

(3-2) 私 (a) 犬 (b) 伴う。

(3-3) 私 (a) 悲しさ (b) 増す。

(3-4) 私 (a) 髪 (b) 巻く。

(3-5) 私 (a) 目 (b) 閉じる。

(3-6) 私 (a) 着物 (b) はだける。

(3-7) 私 (a) 紐 (b) 結んである。

(3-8) 梅 (a) 実 (b) 結ぶ。

(3-9) 寒さ (a) 厳しさ (b) 増す。

この実験により、SAP(SAJPCJP)と DD 罹患者らそれぞれにおいて、ある一定の傾向が見受けられることが分かった。得られた回答を別添資料(6)に示した。

質問には、「これまでに獲得した母語に照らして違和感を覚えない範囲内で」との条件を付けており、また、「私の泣く (時)」(「時」が付いた場合、「が」ではなく「の」でも自然に感じるが、付かなければ「の」は不自然である) などの曖昧な修飾関係を含む文は質問に含まれないため、資料の回答は単文における現代日本人の JPa の使い方の典型例であると言える。

SAP(SAJPCJP)の傾向は明確である。ほとんど例外なく NOM が「が」と「は」、ACC が「を」と認識されていることが分かる。(「は」は副助詞または係助詞とされるが、ほとんどの SAP(SAJPCJP)には格機能と認識されていることが分かる。)

多くの場合、(b)が ACC を取るのはいわゆる Se(Vt)すなわち(2-1)~(2-9)であると認識されているが(N)、およそ半数の SAP(SAJPCJP) (特に女性)が(3-1)~(3-9)の(b)にも「が(は)」を入れている(M)。このとき、(3-1)~(3-9)の(a)はほぼ例外なく「の」であった。従って、(1-1)~(1-9)の V と(3-1)~(3-9)の V が共に Vint であると判断されていることになる。

(3-1)~(3-9)の V は、(b)が「が(は)」の場合は Vint、(b)が「を」の場合は Vt である。このように、Vint としても Vt としても形が変わらない V を、ここで ISReJP は原動詞 Vb(basic verb)と名付けることとする。SAJPCJP では、ここに挙げた「張る」「はだける」「結ぶ」など、数が少なくなっている。

ここでの Vb は、通常は言語学において能格動詞 (ISReJP では Ve と表示) と呼ばれるが、この概念に ISReJP は疑問を投げかける。

(3-1)~(3-9)は、その V が従来の解釈での Ve であるがために、(M)の回答者は、それを Vint か Vt のどちらかに振り分け、(a)の部分も「私は」「私の」などと巧みに調整している。

こうして、現代の SAP(SAJPCJP)においては、もし NOM が「が(は)」ではなく「 α 」、対格が「を」ではなく「 β 」という JPa であったとしても、「時間 α 残る」「私 α 海 β 見る」という文法を免れる外界解釈を持つことはなくなったという仮説が成り立つ。

EgoMA(SAJPCJP, SAJPCJP, SAJPCJP)

SAJPCJP $\in$ NOM-L

[NP : N-NOM [VP : Vint]] N (主) + Vint。(例 : 春が来る。)

[NP : N-NOM [[NP : N-ACC] VP : Vt]] N (主) + N (対) + Vt。(例 : 私が花を見る。)

今日では、このように、Vint と Vt の S が NOM で、Vt の O が ACC で標識される言語を、主格・対格言語または主格言語 (ISReJP では NOM-ACC-L または NOM-L) と呼んでいることを先に示した。

SAJPCJP は基本的には NOM-L であると言われるが、それは実験が示した現代の SAP(SAJPCJP)の世界認識においてこそ、そうであると言える。

現代のほとんどの SAP(SAJPCJP)には、(1-1)~(2-9)において、GEN 標識とされる「の」(「私の手」など)を用いる箇所、(1-1)~(3-9)の全ての文において DAT 標識とされる「に」や「へ」(「あなたに」「図書館へ」など)及び INS 標識とされる「で」(「電車で」など)を用いる箇所は一か所もないと判断されていることが分かる。一部、「寒さの厳しさが増す。」などの回答があったのみである。

§9 真格（阿頼耶格）の構築

これに対して、PDD・MD・SD 者の回答を見ていく。→別添資料(6)

9.1 空我（無我）

(A)から順を追って詳細を見ていく。SAP(SAJPCJP)の世界認識と最も対極にあるのは、むろん、検証実験文そのものが理解できない障害段階にいる者、重度の言語障害を持ち、生活する上で必ず他者の介助を必要とする者の世界認識である。

回答が得られなかったのだから、JPa の使い方によってこれらの人々の世界認識を分類することはできないが、おおまかに見て、次の三段階に分けられる。すなわち、

- (A)言語らしき言語を全く発すること、解することのできない者
- (B)擬音語・擬態語に当たる言葉のみを発する者
- (C)他者の名前や物体の名称を話すが、まだ N や V といった品詞の区別は認識されない者

である。これらはこの文法解説のための便宜上の分類であって、(A)～(C)は連続的であり、この段階に属する人々は、N や V といった品詞分類が認識されていない点で共通している。

この(A)～(C)の段階の自己を、それぞれ(A)「前我」=Ga(ZEN)、(B)「擬我」=Ga(GI)、(C)「初我」=Ga(SHO)と名付け、この三者をまとめて「空我（無我）」=Ga(KU)と名付けることとする。それぞれが話す言語様態は、「前言語」=ZEN・L、「擬音・擬態言語」=GI・L、「初言語」=SHO・L で表し、これらをまとめて「空格言語」=KU・L で表す。

(A)は、今の我々が「言語」と呼ぶような言語を持つ以前の動物的段階であるという意味で、「前我」とした。

(B)は、いわゆるオノマトペと呼ばれる音声語（「ブーブー」など）や「あ〜」や「う〜」といった音声のみが見られる乳幼児や言語障害者の世界認識の段階である。

(C)は、周囲の同民族・同国民が話す母語の音韻組織（日本語なら清音や濁音、朝鮮語なら平音・激音・濃音、欧州語なら有気音・無気音など）に基づく単語を話してはいるが、「文法」なる概念によって単語どうしが結び付いていない幼児や言語障害者の世界認識の段階である。

9.2 識我

さて、(D)以降になると、検証実験文の意味を理解し、自由に JPa を当てはめていく意志が共通して見受けられるようになるのであるが、JPa の当てはめ方について、この(D)以降に興味深い傾向が現れる。

まず、文全体や V がいかなる意味を持とうとも、ここに属する MD・SD 者らは全ての文の主体と客体に、あらゆる JPa を与えているか、全く与えていないか、規則性なしに与えている。換言すれば、「の」や「で」が、それぞれ GEN や INS などといった意味を持たず、ただ単語どうしをつなげる役割を果たすものと認識されていることが分かる。

そして、(D)のような回答を示したのは、男性・女性とも、質問の意味は理解できるが独力で外出がままならない重度の MD・SD 者であった。レット症候群・コタール症候群・カプグラ症候群の女性も、この(D)の回答を示した。

そこで、こういった MD・SD 者の言語認識世界における日本語の「 ϕ 」「の」「で」「を」「が」など、「つなぎ」の役割それ自体を、今、仮に「絶対格」=ZETTAI と名付けることとする。

また、このように単語を ZETTAI で接着剤のように膠着させていくだけの言語、すなわち(D)の段階の人々の自己を「識我」=Ga(SHIKI)と名付けることにする。なぜならば、MD・SD が重度であっても、質問文の意味に対するある程度の理解、そして、「単語」やここでの ZETTAI とそれ以外の音声（鳥の鳴き声などの自然音）とが異なるものであるとの認識は、本人たちに存するからである。

Ga(SHIKI)が話す識格言語は、SHIKI-L で表す。以下、同様である。

9.3 具我

次に(E)であるが、この段階には、文(n-1)の主体のみに、「の」や「で」などの特別な格標識を付した回答者を分類した。この特別な格を含む文の V を見てみると、人体以外の何らかの道具や手段を用いて行う行為を表していることが分かる。

現代の一般的な生活から考えて、「扉を作る」「移住する」行為は、道具や交通手段を用いて行う人為的行為であり、対象そのものが変化をこうむるか、別の対象を指すようになる（木材が扉に変化する、場所が別の地点に変わる、など）。しかし、「扉を閉める」「結婚する」場合、対象である他者や物体自体に何らかの大規模な物理的・化学的变化が起こるわけではない。

そして、このような回答を示した MD 者を調べると、女性の場合、独力で社会生活が可能な女性がいたのに対し、男性の場合、社会生活における支障の程度が(A)～(D)の男性とほとんど変わらなかった。

そういった道具や手段を用いて対象に変化を与える行為の主体を、これらの MD 者は、主格であるはずの「が」や「は」だけでなく、「の」や「で」など、実に様々な JPa で標識した。

これらの人々の世界認識においては、(n-1)のような行動をとるときの主体である「私」のみを、(n-2)～(n-9)の行動をとる「私」と区別することが目的であって、「私 α 」「私 ρ 」などという格標識でもよいことになる。「で」「が」「を」など、何か「工具や交通機関や文

明の利器を使って他者や対象物や自然環境を改変している、この私」という標識さえあれば、JPaは何でもよいと認識されている。

そこで、このような(n-1)の「私」を、そうでない「私」や「動植物」や「物体」から区別するJPaを「具格」=GUと呼び、この文法を持つ言語段階の自己を「具我」=Ga(GU)、その言語を「具格言語」=GU-Lと呼ぶことにする。さらに、Ga(SHIKI)とGa(GU)の間の自己を「識具間我」=Ga(SHIKI-GU)と呼び、その言語を「識具間格言語」=SHIKI-GU-Lと呼ぶことにする。

以下、同様に記号と概念を形成していく。

9.4 及我

次に(F)であるが、この言語段階では、(n-1)だけでなく(n-2)の主体である「私」にも特殊な格標識をしようという意志が見受けられた。ここでは、人工的な道具や手段の使用・不使用にかかわらず、他者や対象物に直接的に変化・影響を及ぼす行為を行う主体「私」に、格が与えられることになる。

そして、ここに属するMD者も、女性の場合のみ、疾患の程度が(E)よりは軽く、ある程度の現代的な社会生活が可能であることが分かる。男性は、いまだ全員が知的障害を持っている。

そこで、このような自己を「及我」=Ga(KYU)と名付ける。ここでもZETTAIには、「で」や「が」など、どんなJPaでも入り得る他、無標識であってもよいことになる。及格言語はKYU-Lである。

現在の言語学の世界には、「具格」(=INS)という用語は存在し、またそれはSAJPCJPにおいては「で」とほぼ一致するが、「及格」なる用語はなく、また、今回のKYUの概念を表す適切なJPa一文字も見当たらない。しかし、NOM-LであるSAJPCJPを母語としていても、世界認識はこのKYU-L段階を保っているMD者がおり、そのうち知的障害がない人は女性に圧倒的に多いであろうという現状、そしてそのような女性がArg(KYU)を一般的なGEN「の」やINS「で」を借りて表現しようとする意志は、回答の分布によく見てとれる。

9.5 希我

(G)では、「作る」「閉める」「好む」ときの「私」は格標識されるが、「見る」「泣く」ときなどの「私」は標識されず、未だZETTAIで示される。すなわち、行為に利益や被害、好悪や希望・非希望の感情が伴うか否かで「私」が分けられる。

この段階になると、女性では半数が言語生活に支障がないのに対し、男性ではなお、ほとんどが言語障害者や自閉症者であることに注目すべきである。

この段階の自己を「希我」=Ga(KI)と呼ぶこととする。この言語段階の「私」についても、SAJPCJP の JPa 一つでうまく表せないが、強いて言うなら「から進んで」であろう。それを、SAJPCJP の「の」「で」「を」に託して表現しようと腐心する様子が、回答からうかがえる。

9.6 能我

(H)のように(n-1)~(n-4)の主体に特別な格を付けるということは、すなわち、「他者や対象に向かって可能な行為」に格標識が付くということである。自らが希求・要望せずとも可能である行為をも含む。

「好む」ことは自ら望んで行うことであるが、「見る」行為は、視覚としての「見る」能力がある限り、希求する心の有無には関係がない。このように、道具や、他への直接的影響や、希求する心を伴わなくとも、対象となる他者や物体が存在する限り可能であるような、いわゆる「五感動詞」が指す行動は全てここに含まれると考えてよい。一方、「笑う」や「泣く」など、O を伴わない V は、いまだ格標識を受けない。

この言語段階のように(n-1)~(n-4)の「私」に格標識を付けた女性になると、ほぼ社会生活に大きな支障がないことが分かる。一方、男性では未だに社会生活に大きな支障が見られた。

そして、この段階の自己を「能我」=Ga(NO)と名付けることとするが、類型論上、「能格」も「能格言語」も既存の言葉であり、少し異なった意味に使われている。(ISReJP では、それぞれ「ERG」と「ERG-L」で表す。)

NOM-L や ACT-L に当てはまらない言語を、全て ERG-L とするのが、現在の言語学の主流であるが、それらの定義の妥当性は甚だ疑問である。(ERG-L は、「Vint の S と Vt の O を ABS、Vt の S を ERG で標識する言語」と定義されている。)

ISReJP の場合、MD・SD 者たちの回答データを用いて、ERG-L を通時的に細分化したと見て差し支えないだろう。ERG-L と NOM-L とを共時態差と見る一般的な見解に対して、ISReJP では、この後 NO-L が SHUn-L までさらなる「真格進化」=Evo(SHIN)を遂げると見ることになる。

9.7 意我

(I)の段階では、(n-1)~(n-4)の V 群だけでなく、「笑う」「泣く」「叫ぶ」などの、主体のみで行う再帰的な V が加わった V 群、すなわち、まとめて意志動詞と呼ぶことができる V の主体に格標識が付くことが分かる。「～を見る」「～を聞く」「～を嗅ぐ」といった五感動詞で示されるような、O を伴う人類の能力 (いつでも発揮できる知覚能力) のみならず、「笑う」「泣く」といった Vint の、自己の身体に向かう再帰的な行為や状態の主体にも格標識が

付される。

この段階の回答を示した MD 女性では、話し言葉を聞いている限りでは、世界認識が一般の一MD 女性と異なっていることは全く分からないと言ってよい。さらに、大勢の人前で発言や公的な場での活動・近代的集団行動が可能な女性が、この段階から現れる。男性においてはなお、言語コミュニケーション上の問題があるため、外見上からも分かるほどである。

この意志動詞の主体を格標識する自己段階を「意我」=Ga(I)と呼ぶこととする。あえて SAJPCJP の JP_a に当てはめるなら、「から」であろう。

9.8 活我

(J)では、(I)に属する V 群に加えて、非意志的な Vint の主体も特別に格標識されるようになっている。非意志動詞・不随意動詞で示される行為が追加されるのである。

「作る」「閉める」「好む」「見る」「笑う」などは、意志的に行うことができるが、「転ぶ」ことは、意志とは無関係に起こることであって、その場合の主体は未だ ZETTAI 標識に終始するのである。「座る」であれば、随意的に可能な行為であるから、(J)の段階で特別な格標識を受けるのであるが、「座っている」は状態であり、(K)の段階で初めて特別な格標識を受ける。

すなわち、主体が活動体であるか、または活動的な行為を行う場合にのみ、新たな格を表す接尾語ないし JP_a で標識されるのである。

この段階になると、軽度 MD 女性に加えて一般の女性の回答も見られ、両者の世界認識に大きな差は見られなくなる。この段階においてもなお言語に支障のある男性とは、対照的な結果である。そして、この自己段階を「活我」=Ga(KATSU)と呼ぶことにする。

「活格」と「活格言語」という用語も、言語学の類型論において存在するが (ISReJP では、それぞれ「ACT」、「ACT-L」と表す)、これについても、その問題点をのちに検証する。

ただし、主体が ACT をとる場合、対象がとる格は「不活格」=STA と呼ばれることが多い。従って、これまで絶対格 ZETTAI と書いてきた機能を、便宜上、ISReJP においても「不活格」(ISReJP では FUKATSU) と呼ぶことにする。

活動体と不活動体は、一見、有生物と無生物（植物と抽象概念を含む）との対立のように感じられるが、(J)ではまだ、不活動の有生物、すなわち状態動詞（「座っている」など）の主体は、FUKATSU をとる。

9.9 主我 1

(K)ではさらに、「座って・いる」「立って・いる」などの状態動詞・非行為動詞（日本語ではこのように複合動詞となることが多い）までが特別に格標識され、主体に立つか立た

ないかが、明確に人間及び有生物か無生物かで区別されるようになる。そして、これら(n-1)～(n-7)の主体が取る格こそ、「主格」=NOM と呼ばれるものであって、一方で(J)で STA と呼ばれた格は、ここで「対格」=ACC と呼ばれるものになる。ここにおいて、一応の「主我」=Ga(NOM)が完成するのである。

そして、女性では、MD 者だけでなく一般の女性の回答が見られ、SD 者が現在のところ見当たらないが、男性においては、未だ SD 者率がゼロになる見込みはないのである。

この初期段階の SHU・L は、「家」や「時間」といった無生物や抽象概念が Arg(NOM)よりも Arg(ACC)をとりやすく、「家が建つ」とはほとんど言わず、「家を建てる」が主流であるため、「主格言語 1」=SHU1・L としておく。主我 1、主格 1、対格 1 も、それぞれ Ga(SHU1)、SHU1、TAI1 とする。

この言語段階で何よりも重要なのは、Vint と Vt という概念が初めて成立することである。Arg を一つだけ持つ（すなわち S のみを伴う）V が Vint、Arg を複数持つ（例えば、S と O）のが Vt である。この段階に至って初めて、例えば「残」というシニフィエが「残る」と「残す」とに厳格に分化するのである。

ただし、「建つ」（現代では「建つ」と「建てる」）のように、日本語は、近世までは未だ Vint と Vt の終止形が同形である V が多く、江戸時代後半までは SHU1・L に成り切っていなかったと言える。

9.10 主我 2

(K)の段階と比べて、有形（または可視的）無生物が SHU として扱われるようになった段階が(L)である。ここには、無生物を S にとる V が含まれる。

「建つ」は、「家」「建物」「小屋」などの無生物名詞を S にとる。「壊れる」「光る」「よどむ」などもここに含まれる。しかし、抽象概念が SHU をとることは、まだほとんどない。

抽象概念語彙の発達には、当然、その言語話者が属する社会の、SAE 先進文明との接触の程度と関係するから、日本では江戸時代末期までは、この(L)の段階に達しようがないと言える。

この段階の言語認識を示す MD 者女性は少ない。また、初めて一般男性の中から、この段階に属する者が現れる。

この自己段階を「主我 2」=Ga(SHU2)と名付けるとする。SAJPCJP は、主体の性質に関係なく、あらゆる N が S に立って NOM をとり得るし、V もほぼ Vint と Vt との対立構造となっているため、次の(M)や(N)に属するとしてしまってもよいのであるが、明治期の日本語では、「時間」や「会議」などという抽象概念が S に立つことが現在よりも少なかった。

例えば、現在は「私が笑う」も「家が壊れる」も「時間が過ぎる」も同様に使う SAP(SAJPCJP)であるが、「私」「家」といった人体や具体物に比べて、「時間」「原因」「競争」「会議」などといった抽象概念は、本来は日本語では S に立ちにくい。

このことは、明治・大正期の新聞を見ても一目瞭然である。「会議が終わる」などは、SAEの翻訳によって夏目漱石や福沢諭吉ら知識人の手で生まれた文体であって、近代初期までは「会議を終える」と言うのが普通であった。

近代日本語はSAJPCJPに比べて、(n-1)~(n-8)に該当するNはNOMをとり、(n-9)のNは未だACCをとりやすい段階にあったと言えることになる。従って、(L)の段階は、明治・大正・昭和日本語が辿ってきた過渡期の段階と言える。

9.11 主我 3

(M)の段階では、もはや(a)のJPaは「が」「は」「の」、(b)のJPaは「を」「は」「が」のみであり、また全ての(a)がSHUをとりうる（抽象概念もSHUをとりうる）ようになっている。

この段階に属するMD者は少なく、残るは一般の男女ばかりである。この自己段階を「主我 3」=Ga(SHU3)とする。

9.12 主我 4

(N)の段階に至って、NOM=「が・は」、ACC=「を」という厳格なNOM-ACC-Lの文法構造が成立する。残る一般の男女の全員が、この(N)に含まれる。ここに、SHU4=NOM、TAI4=ACCの関係が成立する。この自己段階を「主我 4」=Ga(SHU4)とする。

SAJPCJPにおいては「私」「扉」はN、「が」や「は」や「を」はJPaという別分類であって、このSHU4-Lではその意識が保たれているが、「私が」「私は」「扉を」は、ひと固まりの厳格な構造であって、「私で」「私に」などをとるMD・SD者の世界認識の反映を許さない文法となっており、ほとんどSAECWの「I open the door.」の「I」「the door」の機能との一致を示している。

9.13 主我 5

今回のSAP(SAJPCJP)による回答とは関係がないが、(N)の段階からさらに、SHU=「が」、TAI=「を」というように、格機能とJPaとが一对一で対応する規則が強固になった場合、どのような文法構造が成立するかを考えてみる。すると、SAEのように、「私」を「が」とつなげて、一単語としてしまうことが考えられる。もっとも、このような傾向は、すでにSHU2-Lの段階から見られ始める。

SHU5-Lでは、SHUとしては「が」以外の格標識の使用は文法違反・言語障害であると見なされるし、そもそもSHUに「が」以外の格標識を使いようがない。このことこそ、日本よりもSAE圏で先に「言語障害」なる概念が現れた要因であろう。

例えば、英語の「I」は、「私」ではなく「主体である私が」であるし、「my」も、「私」ではなく「所有者である私の」である。「I love you.」を「My love your.」と言うと誤りであることになる。N と格機能は強固に結び付いており、逆にそれらを別々に使うことがないがゆえに、そのような文法が可能となる。

SAE 圏の幼児は、「My love your.」などの「誤り」を通過して育つことが知られる。このようなことは、すでに欧米の言語学者によって指摘されている現状を見るまでもなく、日本人（特に MD 者ら）にとっては平常のことであると言える。

換言すれば、日本の MD 者（特に女性）の世界認識を正確に表現し得る格体系は、SAECW には存在しないと言ってよい。SA(EN)では特に、語順の固定が NOM-L 性と同義である。

「flowers」は「花」であるが、「Flowers produce seeds.」（花は種子を生じる。）では、「Flowers」は「花は（花が）」であって、同形であっても機能が異なっている点で、日本語における C-JPa は存在せず、単語に組み込まれていることが分かる。この「Flowers」は無標の ABS ではない。（「現代英語はやがて中国語のような孤立語に達し、言語の類型は循環する」という、イエスペルセンをはじめとする言語学者らによって主張された言語タイプの循環説では、ABS についての分析が著しく欠落しており、かつ ABS ではない格を ABS と分析している場合が見られる。）

実際はその反対に、この文の「Flowers」は厳格な主格であって、N と主格性とを一体化して、その厳格さを極度にまで高めたものである。今日では、先の「孤立語」に対し、格機能が単語の一部（変化または無変化）として組み込まれているこのような言語を「屈折語」と呼んでおり、格機能が単語として独立している日本語のような「膠着語」とは区別される。

「屈折語」は、SAE 圏あるいは SAP(SAJPCJP)の世界認識を反映した言語であって、少なくとも Ga(ZEN)から Ga(KATSU)あたりまでの MD・SD 者の世界認識を忠実に反映する文法構造を持たない。

その点、日本語では「私が好きな花」「私の好きな花」の両方が許され、N と格機能との結び付きが緩やかであるため、日本語は SHU5-L 段階には達していないと言えるのである。

「私で扉の閉じる」などという言い回しをする MD・SD 者が日本社会でも文法違反であると認識されつつあり、必ずしも日本語の方言や和歌や古語の教養経験のない精神科医・言語聴覚士・作業療法士・臨床心理士らの手に MD・SD 者が委ねられている現状は、むしろ SAP(SAJPCJP)の世界認識が日本語の特質を失って SAECW 化しつつあることの証左であるだろう。

日本人・欧米人共に、幼児期や、脳に何らかの支障が出た老齢期に、ZEN-L から KATSU-L あたりまでのような言い回しが増えるのであるが、SAECW では明らかな文法違反と見なされる。

次に、各言語段階において実際に回答に使われた JPa そのものについて、日本の古語と照らし合わせながら検証する。

§ 10 格標識の分析

10.1 無標 (φ) の使われ方

まずは、無標についてである。N と V のあとに JPa に当たるものを何も入れないという、MD・SD 者が多く示した構文は、上古代日本語においては最も一般的なものであったことは言うまでもない。「花無し」「雪降る」などである。

SAJPCJP でも、話し言葉で JPa を省いて、「私、泣いてしまった」「私、扉閉めたよ」「あそこに家建ったね」のように話す傾向は、MD・SD 者に限らず、日常的である。にもかかわらず、「JPa を何も入れない」という回答が、SAP(SAJPCJP)が圧倒的多数を占める SHU4-L に向かうにつれて減少することは、SAP(SAPCJP)においては、JPa を省いて会話する場合でも、実際にはあくまでも「が」や「を」の省略であって、NOM-ACC の厳格な対立構造が日常的に認識されていることを示すであろう。

「雪降る」は、SAP(SAJPCJP)にとっては「雪 (が NOM) 降る」であって、MD・SD 者にとっては「雪 (無標の ZETTAI) 降る」と認識されていることになる。すなわち、のちに「雪を降る」という ACC 標識を得ることになる構文である。

さらに、Ga(SHIKI)に陥った重度 DD 女性において、「私で扉で閉める」「私の花の好む」といった連続同一の JPa 表現が全て「私、扉、作る」といった無標の文表現と平等に認識されていることは、「で」や「の」を、C-JPa ではなく、ただ単語どうしの「つなぎの役割」と認識していることを示している。

現在でも「一の二の三の・・・」などと数える人がいるが、日本語のあらゆる JPa は、元はこのような「つなぎ」「口調を整える音」「音楽表現」であったという感覚を懐古することは、ISReJP 理解の一助となるであろう。

換言すると、その「ある“つなぎ”の機能」さえ示すことができれば、「が」という形でも「ピ」という形でも、「α」という形でもよいことになる。重度の MD・SD 者は、いわば日本語の黎明期と同じ言語認識世界にいと推定できる。

そして、GU-L、KYU-L と順に主体が格標識を得ていくのであるが、のちに FUKATSU や TAI に発展する(b)の箇所は、「を」が初めて最多の地位に立つまでは、無標「φ」が最多の地位であり続けるのである。むろん、上古代から江戸時代までの日本語の変遷過程と合致するものである。

10.2 「が」の使われ方

SAP(SAJPCJP)には、もっぱら NOM を標識すると認識されている「が」であるが、重度の MD・SD 者ほど、ACC でさえも、「を」に頓着せず、むしろどちらも「が」で標識することに違和感がない傾向があった。すなわち、「私が扉が閉める」「私に扉が閉める」と

いった回答である。

重度の MD・SD 者は、「閉める」「作る」といった行為を表す V の O も「が」で標識していることが分かる。S を標識する JPa と O を標識する JPa とが、別物であると認識されていない。言い換えれば、主体と客体なる概念自体がその世界認識の中に存在しない。

そして、「 ϕ 」「の」「で」「を」などの使用頻度が SHU4-L に近づくにつれて減少するのに対し、この「が」は使用頻度が増して、SHU4-L ではもっぱら(a)すなわち NOM 標識に特化される。それに伴って、MD・SD 者の急激な減少と SAP(SAJPCJP)の急激な増加が見られる。

あらゆる日本人が ACC に「が」を用いていた時代があったのであるが、SAJPCJP にもその名残がないわけではない。以下の各文について、一般の男女にどの文を自然と感じるかを尋ねる追加実験をおこなった結果、以下のようになった。

(n-3-1) 私 (が・は) 花 (を) 好む。

(n-3-2) 私 (が・は) 花 (が) 好む。

(n-7-1) 私が花が好きだ。

(n-7-2) 私は花が好きだ。

(n-7-3) 私が花が好きな理由は、～

(n-7-4) 私は花が好きな理由は、～

(n-4-1) 私 (が・は) 海 (を) 見る。

(n-4-2) 私 (が・は) 海 (が) 見る。

(n-7-5) 私が花が見たい。

(n-7-6) 私は花が見たい。

(n-7-7) 私が花が見たい理由は、～

(n-7-8) 私は花が見たい理由は、～

SAP(SAJPCJP)は、(n-3-2)と(n-4-2)は不自然な言い回しだと感じている。ところが、「好む」を「好きだ」、「見る」を「見たい」とするだけで、自然な言い回しになったと感じる、驚くべき「変質的な」外界認識を持っている。

さらに、(n-7-1)と(n-7-5)をより不自然な言い回し、(n-7-2)と(n-7-6)をより自然な言い回しと感覚するのである。ところが逆に、「理由は～」をうしろに付けると、(n-7-3)と(n-7-7)を自然、(n-7-4)と(n-7-8)を不自然と感じるようになる。

重度の MD・SD 者女性は、これに対し、ここに挙げた例文のどれもが自然であると回答した。

SAJPCJP においても、格標識がいかに不安定なものであるかということ、またその不安定さは、「が」や「は」それ自体ではなく、「私」「花」「理由」「見るのか見たいのか、見た

のか、見るだろうなのか」といった N や V の意味内容、すなわち、文法用語で時制や相や法と呼ばれるものの自体が決定するものであることを、これらの例は示している。

日本語においては現在でも、NOM-ACC 関係、自我・他我関係、語と語の厳格なつながりよりも、語の意味内容・話題性が優越している構文が生き残っていることが分かる。「が」が NOM、「を」が ACC、といった分類は、実際は不可能・不適切であり、むしろ話題や場や文脈といったものが「が」や「を」の意味を決めていると言える。

SAJPCJP にこのような傾向が生き残っていることは、日本語にもかつて、NOM や ACC、ひいては GEN や INS などをも明確に区別しなかった時代があったことを物語っている。

「水が飲みたい」(願望)、「本が売ってある」(状態)、「字が読める」(可能)、「その絵が気に入った」(嗜好)、これらは全て、SAP(SAJPCJP)であっても、「を」の代わりに「が」を日常的に用いている例である。重度の MD・SD 者には、これらの V・P だけでなく、全ての V・P に対して、O の格が「が」や「を」に限らず、その他の何でも良いという認識が、現在も残っている。

「が」は、「の」との関連においても不安定であり、「私が好む人」「私の好きな人」「私の好む人」は自然であって、「が」も「の」も NOM 標識と認識されるが、「私が好きな人」では「私(のことが)好きな人」とも取れ、現代でも一部の口語文においては「が」が ACC となりがちである。

そうであるにもかかわらず、先のような検証実験に際しては、ほとんどの SAP(SAJPCJP)が、NOM が「が(は)」、ACC が「を」であるかのように答えるのは、世界認識それ自体は SAECW のそれに移行しているからに他ならないであろう。

10.3 「は」の使われ方

「は」を「が」と同様の NOM 標識である、かつ「私は」を「私が」と同様に S であると認識するのは、SAECW の厳格な NOM-L 性の影響を受けた SAJPCJP の特質であって、「は」が NOM 標識でないことは、既に膨大な先行研究によって示されてきた。

有名な「象は鼻が長い」もその一例に過ぎない。「は」は、場合によって話題格や主題格などと呼ばれ (ISReJP では TOP)、「象は鼻が長い」は、「鼻が長い」ことが象において成り立つことを示している。

SAJPCJP では、「は」は副助詞(Adv-JPa)に分類されている。むろん、「の」「で」「を」「が」などは格助詞(C-JPa)に分類されている。ただし、C-JPa と Adv-JPa の境界も、また曖昧なのである。

そこで、重度の MD・SD 者の回答(D)を見てみると、先述したように、この段階では男女とも JPa を「つなぎ」としてしか使っていないのだから、「が」が NOM で「は」が TOP であるとの認識もなく、「象は鼻が長い」でも「象の鼻が長い」でも「象を鼻で長い」でも「象、鼻、長い」でも、全て同じと認識される。むしろ、この「は」こそ、ABS に近いニ

ュアンスを持つものであって、「私は扉は作る」などと単語どうしを全て「は」でつなぐと、重度の MD・SD 者の世界認識に近づく。

現代の SAP(SAJPCJP)でも、次の文を読んで理解することはできるものである。しかし、これは SAECW には翻訳できない文である。

「私は今日は編み物はしないとはあなたには二度は言っはいないとは自分では気づきはしなかった」

しかし、日常生活において同様に「が」と「は」を混用しているとは言っても、現代の重度の MD・SD 者と SAP(SAJPCJP)とでは、その認識の仕方が異なると言ってもよいであろう。正確には、「は」のはたらきが C-JPa とは異なるものであるとの認識は、明治の近代化・西洋化の過程でなされるのであって、上古代では「の」も「で」も「に」も、全ての JPa が「は」の TOP 性を持っていた。

SAP(SAJPCJP)は、NOM=S との認識を、「が」のみならず「は」にまで波及させる形で「が」と「は」とを混同していると言える。その混同の仕方は、重度の MD・SD 者とはほとんど対極にある可能性もある。

10.4 「の」の使われ方

「の」は、(a)において、いくつかの段階で使用頻度が最も高かった JPa である。すなわち、SAP(SAJPCJP)が「が」や「は」を入れた箇所である。重度の MD・SD 者、特に女性ほど、GEN とされる「の」を NOM に当たる位置に使っていることが分かる。

しかし、このような言語認識が決して反日本語的なものでないことは、例えば先の「私が好む人」「私の好きな人」のように、SAJPCJP でも、ある種の P を用いた場合に NOM に「の」を用いること、何より上古代日本語においては、「の」は「が」以上に NOM に当たる標識として一般的であった事実をもって自明であろう。

例えば、次の二つの「の」を、前者が GEN、後者が NOM であると峻別して翻訳するのは SAP(SAJPCJP)の視点であって、実際には GEN と NOM とが分化していない使い方である。

「また家のうちなる男君の来ずなりぬる、いとすさまじ」(『枕草子』)

SAJPCJP では、「の」は、先の「私の好きな人」のような例のほかは、GEN (英語で言う所有格)にほぼ特化されている。(「私の好きな人」の「の」を「人」に掛かっていると見れば、GEN となる。)

反対に、「が」は、「我が心」のように現在でも GEN に用いる場合があるが、上古代語に

おいては、「の」も「が」も、格機能と言うよりは、NやVといった単語どうしをつなげる「つなぎ」の役割としか認識されていなかったことが見受けられ、「私が扉の閉める」「私が花の見る」などのように、「の」をACCとして用いた回答が多かったことから、そのことが見てとれる。

このような回答もまた、MD・SD者女性に圧倒的であり、にもかかわらず、このような言語認識をしていながら、男性の自我が生み出したと考えられる「が・は」と「を」との対立が厳格なSAJPCJPを意識的に操って、普段は社会生活を難なく送れるのも、女性が圧倒的に多かった。そして、SHU4・Lに近づくほど「の」の使用頻度は少なく、最後は「が・は」と「を」とに立場を譲って消滅してしまう。

10.5 「で」の使われ方

SAP(SAJPCJP)にとって「が」や「は」で表されるようなSを現在のINSやPLAの「で」で表そうとする重度のMD・SD者の世界認識は、あらゆる回答の中でも、SAP(SAJPCJP)にはとりわけ理解しがたい例と考えられる。「私で扉作る」「私で座っている」などがそれである。

「で」は「にて」の変化であり、SAJPCJPではほとんどINS・PLAに特化されている。そこで、SAP(SAJPCJP)も含め、補助的に以下の質問を行った。その結果、全てのSAP(SAJPCJP)が、「風で扉が(は)」「風が(は)扉を」と「私が(は)扉を」と回答したのに対し、重度のMD・SD者では、両方のJPaをそろえようとする意志が強うかがわれ、それらに加えて「風で扉を・私で扉が(は)・私で扉を」という回答を見ることができた。

風() 扉() ひらく。

私() 扉() ひらく。

(「ひらく」は、「～が(を) ひらく」「～が(を) 閉じる」「～が(を) 伴う」など、同形のままでVintとしてもVtとしても使えるVの一種であるから、Ve、すなわちISReJPのVbである。)

この「ひらく」をVbでない「あける」にすると、途端にSAP(SAJPCJP)の男女はSOV関係の変更を行って、「風が扉を」と「私が扉を」と回答する。ところが、重度のMD・SD者は、「風で扉が(を) あける」「私で扉が(を) あける」とも答える。

風() 扉() あける。

私() 扉() あける。

従って、問題文に対し、重度の MD・SD 者は、「NOM や ACC を標識する JPa は何か」、「使われている V が Vint か Vt か」を考えたのではなく、「自らの世界認識を、SAECW 化している SAJPCJP で使われている JPa に仕方なく当てはめると、どの JPa に近いかな」を無意識に考えて回答したと言える。それが、GU-L や KYU-L の段階における「で」の優勢の理由である。

むろん、他の JPa も同様である。重度の MD・SD 者は、SAJPCJP を母語とする SAP が周囲にいる状況で成育しているがために、「で」が「道具で」「駅で」など INS・PLA 標識らしいことはすでに分かっており、それに影響を受けて、性的被害などによって崩壊した自己意識の表出として「私で」と回答したにすぎない。

従って、「で」という回答が多いからと言って、それが SAP(SAJPCJP)と全く同じ「で」の意味内容を指していると考えすることはできない。SAJPCJP の「で」に近いであろうことが推定できるのみである。この実験は、SAP(SAJPCJP)が「で」を SA(EN)の「by」や「with」や「at」などと同格と見て、それを日本語に逆輸入・再転用していることを示す良い例である。

いずれにせよ、SAP(SAJPCJP)が、重度の MD・SD 者らの回答について、「私は、私という手段で扉を作る」、「私は、私という人間において扉を作る」というニュアンスを想定することは誤りではなく、ここでは、「風」に対するのと同じように「私」自身が傍観されている。

「で」が「φ（無標）」や「の」など他の JPa との役割の上での区別がない SHIKI-L の段階はもちろんであるが、「木で扉を作る」「電車で移動する」の「木」や「電車」と同様に「私」を扱う点は、人間と自然、有生物と無生物とを文法でも分けようとししない「拡散した自己による強い意志」が表明されていることを示す。

これら MD・SD 者らの回答を見る限りでも、「主格・対格言語」なるカテゴリーが普遍的なものではないことが暗示される。

10.6 「を」の使われ方

MD・SD 者が示した NOM 標識としての「を」も、SAP(SAJPCJP)には理解しがたい例であろう。これらの MD・SD 者においては、一般的には ACC の標識と思われている「を」を NOM「が・は」の代わりに用いることに抵抗がない傾向にあることが見てとれる。

だが、これについても、特に上古代の和歌では「を」が S となる N に付く例は多いことが知られる。例えば、

「女郎花多かる野辺に宿りせばあやなくあだの名をや立ちなむ」

では、「を」は S の「名」に付いている。また、

「瀬をはやみ岩にせかる滝川のわれても末に逢はむとぞ思ふ」

においても、「瀬の流れが速いので」と S「瀬」を擬似主体化している。「を」が Vt の ACC と分析されるべきは、近代化以降である。

SAJPCJP では、例えば「家を」の場合、Vt「建てる」をつなげるのが自然であるため、「家を建つ」「名を立つ」という MD・SD 者の世界認識は、いっそう SAP(SAJPCJP)には不自然と感じられようが、古語においては Vint も Vt も Mo-pre は「たつ」であり(むしろ、V の自他の概念がなかった。非 Mo-pre における活用の区別は、Vint と Vt による区別ではない)、「家を建つ」としてもおかしくはない。

ただし、「家を建つ」では、「家が建つ」のか「家を建てる」のかが判別できないことになるが、換言すれば、前近代日本人にとっては、「(誰かによって) 家が建つ」(家が建つことに焦点) ことと、「(誰かが) 家を建てる」(家を建てる人の自己意識に焦点) ことについて、Mo-pre においては文法的に区別がなくとも困らなかったのである。

この ISReJP における動詞論の根拠の第一は、平安時代末期までは V が Mo-pre である場合には主体が格標識を受けることがほとんどなかったことである。むしろ、S は無標であることが基本である。MD・SD 者が S 標識は「が」「は」「を」などのいずれでもよいと感じていることは、決して奇妙なことではない。

「を」は近代化以降、ACC の標識となっていくのであるが、抽象概念や無生物を NOM に立てることは戦前日本語までは少なく、「時間が残る」「会議が終わる」といった言い方は、少なくとも明治以降の翻訳文体である。

社会生活に支障が出るほどの重度の MD・SD 者は、「が」と「を」の区別さえ曖昧なのに対し、言語に支障のない軽微な MD・SD 者は、「を」をほぼ ACC ととらえ、SAP(SAJPCJP)と同じ世界認識を持ちつつある過渡期にいたることが分かる。

10.7 「に」の使われ方

「に」は、現在では DAT や PLA、さらに ALL や ARR として用いられることの多い JPa であるが、古語においては現在のように確定的な意味として用いられたものではなかった。

「水に洗ひてたのしびとせんよりは、・・・」

この場合の「に」は、現在の INS「で」に近い。すなわち、ほとんど GU や KYU や KI と言ってよいものである。重度の MD・SD 者ほど、「で」に次いで「に」を主体に付した(「私に扉を作る」、「私に結婚する」など)のは、「で」「に」が上古代語と同様に認識されているからに他ならないであろう。

「春の野に若菜つまむと来しものを散りかふ花に道はまどひぬ」

「花に」の「に」は、「花によって」という原因・理由を表しており、MD・SD 者の「私に（よって）扉を作る」との表現が、上古代語においては決して不自然なものでなかったことが理解できよう。

10.8 「へ」の使われ方

「へ」は、現在では ALL や ARR として用いられることが多く、古語においても大方そうであったが、「に」と「へ」の意味の差は、近世まではほとんどなかった。「京へ筑紫に坂東さ」の格言が示すとおり、「に」と「へ」と「さ」の差異は、意味によるものでなく方言差であって、これは重度の MD・SD 者が示した「主体の格標識は何でもよい」とする傾向を思わせる。

もっとも、上代においては「へ」の使用例は少なく、古代以降に増えてゆくのであるが、注目すべきは、MD・SD 者の回答でも SHIKI-L から順に「へ」が増加傾向を見せることである。

10.9 真我進化と真我遡及

さて、ここまで、検証実験の回答に見られた JPa について一通り見てきた。このたびの実験で明らかとなったことを、今一度総括しておきたい。

まず、PDD や DD や SD などの精神・行動・言語障害者の男女と現代の一般の男女 SAP(SAJPCJP)の回答の差異を、V の意味（道具の有無、他への影響の有無、希求性の有無、能力の有無、意志の有無、活動性の有無、生命性の有無、主格性の有無）に重点を置いて追ってきた。

KU-L(ZEN-L→GI-L→SHO-L)→SHIKI-L→GU-L→KYU-L→KI-L→NO-L→I-L→KATSU-L→SHU1-L→SHU2-L→SHU3-L→SHU4-L→SHU5-L がつながり、ZEN-L から SHIKI-L の段階が、社会生活が困難になるほどの最も重度の MD・SD に生きる人の言語認識世界であり、順に障害や疾患の程度が軽減されていき、SHU2-L から SHU3-L においてほぼ SAJPCJP の表面上の文法構造との一致、SHU4-L においてほぼ SAP(SAJPCJP)の実際の世界認識との一致が見られることが示された。

SHIKI-ZETTAI-L から SHU5-TAI5-L に変遷する過程は、「SAP の自我が行うこと」「SAP が人為的に行うこと」が次第に増大して、最後には SAP 自身の NOM-ACC-L で記述された超越的理念を SAP が外界（対象物・自然）に上意下達し、それを文法にも反映させようとする Evo(SHIN)の過程である。

JPa については、「単語どうしをつなげるはたらきをするもの」と認識する段階に始まり、やがて「人間の生活に最低限必要な意味合いを単語どうしの関係に与えたり、口調を整えたりする、原始的な GEN や INS」との認識を経て、「厳格な NOM-L を象徴するはたらきをするもの」と認識するに至るまでの、様々な段階に区分できる。それはまさに、日本語が上古代日本語から SAJPCJP に至るまでに辿ってきた変遷過程と同一である。

そして、回答者の分布で言えば、「各々の JPa の役割を断定的に見ず、語と語のつながりの役割であるとする世界認識」、「明らかに人為的な行動以外は、単なる無標 ϕ や『の』や『で』などの絶対格として放任しておく世界認識」、「前近代日本語的な世界認識」は、重度の MD・SD 者の男女に見られ、また現代の社会生活を送れる者は女性に多い。

一方、「一助詞一格という厳格な世界認識」、「全ての N に NOM を取らせる世界認識」、「SAJPCJP・SAECW 的な世界認識」は、ほとんどの一般の男女に見られ、また男性に多く見られる。

そして、全体として同じ言語段階にいる男女を比べた場合、男性のほうが何らかの言語障害・社会生活での支障を伴いやすいがために、独力で自らの世界認識を言語化できず、それが「解離性障害や統合失調症を告白するケースは女性に多い」、「発達障害は男性に多い」という「一見するとデータに基づく正確な」結果につながっているものと考えられる。

文法が混乱するこういった現象を専門家は「失文法」や「錯文法」と呼んでいるが、SHIKI-L における「 ϕ 」や全ての JPa は ZETTAI、GU-L の(n-1)の JPa は GU でそれ以外は ZETTAI、KYU-L の(n-1)と(n-2)は KYU でそれ以外は ZETTAI、などと順に見ていけば、整然と説明できるのであって、ある一時代の共時態のみを見て文法認識の正誤を判断することがいかに危ういことかを、これらの回答は物語っているであろう。

日本語を覚えてたての幼児や、CVD で言語生活に支障のある高齢者に限らず、重度の DD 者女性でさえ、文法を「失って」はいない。文法なる概念がなかったり、その認識の仕方が異なったりしているのみである。実際に、Ga(SHIKI)や Ga(GU)の段階の回答を示した女性も、ジェスチャーにおいては SAJPCJP の「私が花を見る」が指す内容を正しく示す。

ただし、そのジェスチャーを「NOM-ACC 文法」だと解釈することに、ISReJP は与しない。少なくとも、それは「失文法」「錯文法」ではなく、「異文法」とすべきである。そして日本人 MD・SD 者においては、日本語母語話者として最も新しく身に付けた SAE の文法や世界認識から順に失っていく点に注目すべきである。

すなわち、日本人 MD・SD 者の世界認識は、MD・SD の程度が重いほど、時代を遡及している、すなわち Ret(SHIN)を起こしている、という点に注目すべきなのである。

§ 11 既存の類型論に対する格分類の再編

SA(EN)をはじめとする SAECW や、SAJPCJP などの NOM-L と異なる文法を持つ自然言語は、今日の言語学では能格言語や活格言語と呼ばれている。先の識格言語 SHIKI-L や及格言語 KYU-L といった呼称は、ISReJP による、DD をはじめとする MD 者の世界認識を精査した結果を用いての、新たな類型論の提案と言うこともできる。

今一度、現在の言語学における ERG-L、ACT-L、NOM-L の定義について概観しておく。

ERG-L

[NPh : N-ABS [VPh : Vint]] (例：春 β 来る。)

[NPh : N-ERG [[NPh : N-ABS] VPh : Vt]] (例：私 α 花 β 見る。)

ACT-L

[NPh : N-STA [VPh : Vina]] (例：春 β 来る。)

[NPh : N-ACT [VPh : Vine]] (例：鳥 α 飛ぶ。)

[NPh : N-ACT [[NPh : N-STA] VPh : Vt]] (例：私 α 花 β 見る。)

NOM-L

[NPh : N-NOM [VPh : Vint]] (例：春が来る。)

[NPh : N-NOM [[NPh : N-ACC] VPh : Vt]] (例：私が花を見る。)

ERG-L とは、Vint の主体 S と Vt の対象・目的物 O が同じ格標識 ABS を受け、Vt の主体 A がそれらとは異なる格標識 ERG を受ける言語であるとされる。ABS はほとんどの場合、無標である。ERG-L 時代の日本語も例外ではない。（「花無し」「雪降る」など。）

先の考察で、「風で」のみならず「私で」という言い方が日本の重度の MD・SD 者に多く見られたのは、その世界認識が ERG-L 話者と同様であるからに他ならない。また、グルジア語に関しては、意志的・随意的な行為を表す V 文は、もはや ERG-L の段階にないのだから、グルジア語は I-L であるという分析ができる。

「分裂能格性」なる概念は、あくまでも Umt(NOM-L)（すなわち、V を自他に分けたり、森羅万象を主体と対象物、人間と有生物と無生物とに分けたり、時間を直線と見なして過去と現在と未来とに分けたりする世界認識を持つ SAP)からの ERG-L に対する分析であって、Umt(ERG-L)にはそのような認識はなく、それが一つの言語体系であって、「分裂」でさえないだろう。

多くの言語学者が存在を主張する ERG-L と ACT-L は、ISReJP における SHIKI-L から KATSU-SHU-L までの、いずれかの言語を指していると考えられる。

ISReJP に類似した類型論として、「言語類型は ERG-L→ACT-L→NOM-L の順に変遷す

る」との主張が、近藤健二ら一部の言語学者によってなされており、MD・SD 者に対する ISReJP の検証結果にほとんど合致する見事な見解であるが、これは ACT-L の定義が KATSU-L とほぼ同等であるからに他ならない。

すなわち、ERG-L は、「意志的・随意的な行為」にも ERG を当てていき、「活動するもの」と「活動しないもの、活動していない有生物」との間に線が引ける段階で ACT-L と称されることになる。

そこからさらに、全ての N にも ACT が波及して NOM となり、その言語体系は NOM-L と称されるようになる。ISReJP の場合、ERG から ACT に至るまでに追加される「意志的な行為」を、「泣く」や「笑う」のような感情的行為と、「転ぶ」や「落ちる」のような純然たる不随意行為とに分けている点で、より細かな基準を設けたと言える。

一方、「言語類型は ACT-L→ERG-L→NOM-L の順に進化する」との主張であるが、これはクリモフらによって展開され、日本の言語学者の多くはこちらに賛同してきた。しかしこの主張は、ACT-L の定義が全く異なるというだけでなく、そもそも人類の言語の変遷過程を見誤っていると考えられ、先の近藤をはじめごく少数の学者によってそのことが指摘されたのであったが、このたびの ISReJP の実験結果によっても誤りである可能性が示されたのではなかろうか。

ACT-L の定義であるが、Umt(ACT-L) (例えば、グアラニー語など) は、行為と状態すなわち「動くこと」と「動かないこと」とを区別しているのみであるのに、クリモフ及びクリモフ型類型論を支持する言語学者らは、それを有生物と無生物の対立であるとしており、ERG-L では有生物性と無生物性の対立はもっと厳しく、それが弱まって成立したのが ACT-L であると結論している。

近代生物学的な生命性の有無によって N を分類するのは、NOM-L の発想であって、そのような文法はアメリカ原住民語には存在していないと考えられる。

ここでクリモフらが言う活格言語(ACT-L)とは、ISReJP で言えば SHIKI-L から KI-L のいずれかに相当するのであろうが、「人類の言語の変遷過程は、有生物と無生物の対立がなくなって自然と一体化していく過程であり、その最先端に欧米の主格言語文法がある」という認識は、言語類型史観として大きく誤っていると考えられる。

それにしても、日本の言語学者の間でも、NOM-L に対立する言語が、ISReJP の言う KYU-L や KI-L や I-L ではなく、ERG-L であると認識され、様々な議論が ERG-L を中心に行われるのはなぜであろうか。

ここで、先ほどの検証実験質問文を別添資料(7)のように並べ替えてみる。

GU-L から KI-L までの文のうち主体が GU から KI までのいずれかをとる Vint 文、I-L から KATSU-L までの文のうち主体が I から KATSU までのいずれかをとる Vt 文を見つければ、とすると、非常に少ないことが分かる。

例えば、GU-L の Vint 文（もっとも、ISReJP の用語では「具動詞文」=Se(Vgu)) を作るならば、「O を取らない行為のうち、人工的な道具や手段を用いる行為」を表さなければ

ならないが、O を取らない文を作ること自体が難しい。

例文の「移住する」は、Vint でありながら、常識的に考えて大がかりな作業と移動とを伴うことから、条件を満たす文の一つではある。しかし、「移住する」を和語に直すと「住む所を移す」となり、「を」(ACC)が現れる。

すなわち、GU-L 段階において、主体が格標識を取るということは、同時に Vt ないし Vt 的な意味を暗示させる表面上の Vint が P となる、ということに等しい。(そのために、日本語においては O をも同時に表現してしまう漢字熟語が多くなってしまうのである。)

反対に、例えば KATSU-L において、Vint 文「私が転ぶ」に対応する Vt 文、すなわち「行為の対象がありながら、不随意的に起こる行為」を表す文を作ろうと思えば、結果として、主体自身の身体の生理現象など、再帰的な行為が中心となる。

これと同様に文を作っていくと、ちょうど NO-L の段階で、NO 主体に続く V と、ZETTAI 主体に続く V との区切りが、ほぼ Vint と Vt との区切りに一致することが分かる。これが原因で、「NO-L は、Vint と Vt とで、その主体の格標識が異なる言語である」との誤った解釈を言語学者が与えてしまったというのが、ISReJP の見解である。

実際は、「NO-L ないし一部の ERG-L は、対象となる他者や物体や概念に対して実現可能となる行為を表す V と、主体自身のみで実現可能な行為を表す V とで、その主体の格標識が異なる言語」である。

現行の言語学が追究している Umt(ERG-L)の世界認識は、ISReJP の言う SHIKI-L から KATSU-L (あるいは KATSU-SHU-L) までの通時態のどこかに位置するのであって、彼ら話者は V の自他など考えてもいないだろう。むしろ、あらゆる V が Ve として認識されているのであろう。

そうなると、V の自他という概念がいかに NOM-L のみに適用可能なものであるかがよく分かる。先の模式的類型は、ISReJP においては以下のように書き変える。

NO-L

[NPh : N-ZETTAI [VPh : Vzetai]] (非能動詞) (例：春 β 来る。)

[NPh : N-NO [[NPh : N-ZETTAI] VPh : Vno]] (能動詞) (例：私 α 花 β 見る。)

KATSU-L

[NPh : N-FUKATSU [VPh : Vfukatsu]] (非活動詞) (例：春 β 来る。)

[NPh : N-KATSU [[NPh : N-FUKATSU] VPh : Vkatsu]] (活動詞) (例：鳥 α 飛ぶ。
私 α 花 β 見る。)

SHUn-L

[NPh : N-SHUn [VPh : Vint]] (自動詞) (例：春が来る。)

[NPh : N-SHUn [[NPh : N-TAIIn] VPh : Vt]] (他動詞) (例：私が花を見る。)

ここにおいて、ACT-Lに見られた、不自然に鼎立した構文は、二構文に収束され、GU-LからSHUn-Lに至るSHIN-Conの或る一段階に位置付けられる。

ISReJPが今回の実験においてVint・Vt・Veの全てを出題した理由は、ここに来て明白となるだろう。

例えば、SAP(SAJPCJP)には、「増す」がVintかVtかに振り分けられるべきVeと認識される以上、「私は悲しさが増す」(Vintとして使用)と「私は悲しさを増す」(Vtとして使用)は自然な表現と感じられるが、「私は扉を作る」と「私は扉を作る」では後者のみが自然であると感じられる。

もし重度のDD者がそれと同じ世界認識を持っているならば、(1-1)～(1-9)、(2-1)～(2-9)、(3-1)～(3-9)のそれぞれで異なるJPaが回答に現れたはずである。ところが、実際にはそのような差が出なかった。このようなDD者は、VにVint・Vtという二分類があるという認識自体がない。

いかなる形のVで実験を行ってもJPaの使い方にそのような差が出なかったことは、重度のMD・SD者らの世界認識が極めて上古代的事実であることを証左であろう。

§ 12 幼児の言語獲得過程及び社会的少数者の世界認識

ここまでは、日本の MD・SD 者の現在の世界認識が、日本語が辿ってきた変遷過程の途上（上古代・中世日本語や近世日本語）にとどまっていることについて述べてきた。

ここからは、一個人が成長過程で言語を獲得するに当たってどのような変遷過程を辿るかを簡単に紹介し、その過程もまた、日本語の歴史的な変遷過程におおまかに合致することを示す。さらに、MD・SD 者では、その幼児記憶が SAP(SAJPCJP)よりも鮮明であることの意味についても考察したい。

一個人が母語を獲得する際にどのような過程を辿るか、従来の研究で分かっていることをいくつか示しておく。むろん、これらは全て、SAP や幼児記憶のない研究者による研究結果であるが、一個人の母語獲得過程と類型史とのおおまかな合致を示すものである。

幼児の SAJPCJP の獲得過程では、主体について、最初から大人のように「が」を用いるのではなく、まず無標が基本であって、やがて「の」が GEN・INS らしきものとして現れ、それが ERG を表すようになり、そこに「が」が重なって、最後は「が」が NOM に落ち着くという、上古代日本語から SAJPCJP に至る主格成立の変遷と全く同じ過程を辿ること、その変遷の途中で ERG-L (ISReJP では、Pre-KATSU-SHU1-L の段階) の世界認識を経験することについては、すでに先行研究がある¹⁰。

むろん、幼児は実際の日本語の変遷過程に関する知識があるわけではなく、周囲の Umt(SAJPCJP)の JPa の使い方から影響を受けるのみであり、その中で上古代日本語から順に JPa の変遷過程を辿るのである。これと同様の結果は、レット症候群女児の母語獲得過程や、重度の DD かつ SD 者女性の SAJPCJP 再獲得過程においても得られた。

また、手話に接したことの無い先天聾の幼児（民族・国籍問わず）のジェスチャーが、ERG-L の特徴を示し、NOM-L に移行せずに手前の段階にとどまることが知られている。

どんなに高度な NOM-L に達している言語圏であっても、先天聾の子どもは必ず、人類の言語獲得過程と同じ変遷を最初から経験し、かつ SAE の文法 (ISReJP の SHU1~5) には達しないことが明らかになっている。これは、先天聾の幼児の親の母語や、幼児が属する国の公用語や民族言語がもはや NOM-L である場合であっても関係なく、「ERG-L 性は人類にとって生得的・普遍的である」との仮説が得られている¹¹。

さらに、ISReJP 考案者である私のような共感覚者の例であるが、SAECW を母語とし、操っている共感覚者であっても、その母語の文法構造にしばしば違和感を覚え、創作言語を生み出すことが知られ、SHU4 や SHU5 の構造を回避して、SHU1~3、時に NO-L 周辺の文法に前戻った言語を作る者がいる。例えば、英国の共感覚者ダニエル・タメットの創

¹⁰ 鈴木猛 (2006) 「日本語の獲得過程で現れる S 標識の分裂」 東京学芸大学紀要人文社会科学系. I Vol.58

¹¹ 櫻井彰人 & 酒井邦嘉 (2000) 「言語獲得のモデル」 数理科学「脳情報数理科学の発展」—21 世紀に広がる脳科学の新しい胎動—, サイエンス社

作言語 Manti は、膠着語であり、本人の母語である英語の文法を持たず、フィンランド語やエストニア語、日本語に近似した類型を持つ。

別添資料(8)に、どの言語段階にどの年齢層の MD・SD 者が分布しているかを、その平均年齢によって示した。

MD・SD の程度と年齢とにほぼ関連はないが、多少、年齢が高いほど、あとの段階の言語、特に SHUn-L が認識できるようになっていることが分かる。

重度 DD 者・強度共感覚者一個人の成長過程での言語の変遷を調べるため、特に上古代日本語的な世界認識を強く示す重度 DD 者女性・強度共感覚者女性における言語獲得に関する幼児記憶を聞き取ったところ、Pre-SHU1-L の段階、特に Pre-NO-L の段階にとどまっている女性の場合、幼児期に母語を獲得する際に、自らの世界認識にどのような変化が起こっているかを、かなりの程度記憶しているらしいことが分かった。

どの言語段階をどの年齢のときに通過したかを観察した結果、言語活動・社会生活に支障がない、より軽度の MD・SD 者女性ほど速く SHUn-L の段階に達している。例えば、NO-L 的な検証実験回答を示した 24 歳女性（解離性遁走などを抱える）は、現在の段階に達するまでに 0 歳～およそ 7 歳までの 7 年かかっており、かつその後はその段階にとどまり、SAJPCJP が属する SHUn-L の段階に達していないと思われるのに対し、一般の社会生活を送ることができている 26 歳の SAP(SAJPCJP)女性は、5 歳頃にすでに SHU1 の段階に達し、その後、SA(EN)の文法も高度に習得している。

このようにして、SAP(SAJPCJP)の成長過程をも、別添資料(8)に描き込んだ。一般の男女は、初めて喃語を発し、初語をしゃべって以降、たった 5 年弱ほどで SAJPCJP のあらゆる文法を獲得して SHU1 に達し、生活に必要な一通りの言葉を小学校入学までに獲得、最終的にはほとんど SAECW の文法と同じ世界認識に達する。女兒においても、一般に男児よりも多少遅れるという以外は、SHU1 に達するのに 5 年しかかからない。

さらに重要なことは、ほとんどの SAP(SAJPCJP)は、Pre-SHUn-L について一切記憶しておらず、0 歳から 3・4 歳までに起こった統語上の成長過程を自ら説明できない点、4・5 歳頃を過ぎると、成人に至るまで、自らが話している言語の文法に関する何の変化も意識上では経験していない点である。

一部の性的被害による DD 者の女性においては、被害前の彼女を含めた SAP(SAJPCJP)において物心付く以前に展開した言語獲得過程が、再び意識上で展開されており、なおかつ、自己自体は今も Ga(NO)にとどまっており、その世界認識に SAJPCJP の文法が合致していないことを常に意識しつつ SAJPCJP を母語として生活していかなければならない事態となっている。

検証実験文に対する SAP(SAJPCJP)の回答が(M)や(N)のようになり、そこからほとんど外れなかったのは、ほぼ Ga(SHU3)や Ga(SHU4)によって回答がなされたためであると言えるであろう。

一方、特に PDD 者や DD 者において、普段の社会生活で用いている SAJPCJP とは異な

る自然な回答が得られたことは、これらの者は MD・SD の程度が著しい場合ほど、普段から何らかの発話上の大幅な調整・制御を行って周囲の SAP の SAJPCJP に合わせて生活していることを物語るであろう。そして、男性の場合は自ら言語をコントロールできず、結果として障害者と名指しされることが多いのであろう。

このように、DD 者女性や極めて限られた一部の男性が現在とどまっている言語段階は、SAP(SAJPCJP)の男女が幼児期において無意識に経験したことの途上にあつて、長い時間をかけてもその初期段階にとどまっている者ほど、解離的・共感覚的知覚世界を強度に残しており、言語にも何らかのいわゆる障害が出やすく、また一般の社会生活も困難であることが分かる。

さらに、日本語に加えて SAECW を同等に解し、流暢に話すことのできる SAP(SAJPCJP)で、Pre-KATSU-SHU-L の回答を示した者は、一人も見当たらなかった。

日本の MD・SD 者の中で、表面上の文法よりはずっと SAE 的な世界認識にある SAP(SAJPCJP)の日本語に違和感を覚えて自ら創作言語を生み出す人を、数人観察してきたが、その創作言語の文法は、奈良・平安日本語や江戸日本語の特徴を呈していることがある。以下に一例を示す。

23 歳の DD 者女性（かつ、アスペルガー症候群を持つ）は、所有している人形に幼い頃より創作言語を語らせて遊んでいた上、成長した現在でも軽度の SD を抱えるが、彼女の創作言語は I-L 的な構造を有していることが分かった。

Sara na suyasuya shiteimasu. （サラは眠っています。）

Sara no shaberimasu. （サラはしゃべります。）

Sara no pera na shaberimasu. （サラは言葉をしゃべります。）

（状態を表す「眠っている」の主体と意志的・能動的行為を表す「しゃべる」の対象が、同じ格標識 na となっている。）

また、少女期・思春期または成人を迎えた直後に虐待・性暴力被害を受けて解離した女性たちの場合、しばしば自我の確立がそこで止まり、文法構造も近世以前の日本語の段階にとどまることがある。表面的には SAJPCJP で話し、文章を書いている、先の検証実験では、JPa の使い方がほとんど平安時代女性のそれに一致していた。

この言語変遷過程表において、例えば、平安時代女性の世界認識にとどまっている DD 者女性について考えると、平安時代の「が」はまだ SHU ではなく、NO であるから、たとえ現在、この女性が「私が」などと「が」を使って日常会話をおこなってはいても、それを他の SAP(SAJPCJP)の用いている「が」と同一視してはならないことになる。

また、この女性の世界認識が平安時代女性とほぼ同等の段階にとどまっていることは、この女性が「が」を抽象概念主体や状態主体には付けないことから、明らかである。

以上、一個人の母語獲得過程が人類の自然言語の変遷過程に合致することが、PDD 者・

DD 者・共感覚者などにおいても例外ではない上に、一般の男女よりも文法の変遷や成長が遅く、さらに成人後も、厳格な SHU-L の段階に達しないか、これを拒否するため、母語獲得過程についての記憶も正確であることが示されたと考える。

また、重度 MD 者女性や性的被害者女性では、しばしばそれまでの SAJPCJP 獲得過程の逆を辿る形でこれを失うことも示した。

同じ SAJPCJP を母語として用いてはいても、これら MD・SD の日本人と一般日本人とは実際の世界認識が大きく異なることが浮き彫りとなったのではなかろうか。

次に、現在の言語学の言う ERG-L や ACT-L の全ての話者の世界認識、すなわち ZEN-L から KATSU-SHU-L までの段階の話者の世界認識と、NOM-L 話者の世界認識との違いを詳しく見ていく。それはすなわち、先の検証実験から言えば、現代日本の重度の MD・SD 者らの世界認識と、SAP(SAJPCJP)のそれとの違いでもあることになる。

まず、全ての基本となる、SAE 公用語圏における真格言語話者 Umt(SHIN-L)と主格言語話者 Umt(SHUN-L)の人間観・自然観の相違を模式的に示す。Umt(SHIN-L)とは、ZEN-L から KATSU-SHU-L までの Umt(→SHUN-L)のことである。

SAE 圏においては、NOM-L ないし SHU-L の話者であることは、言語史観以上に文明史観に関わることであって、イエス・ペルセンやソシュールやチョムスキーらの目の前にもこの現実が立ち上がることとなった。すなわち、「自分たち先進キリスト教文明圏が前近代的野蛮文明圏、多神教文化圏と呼んできた国内外地域に非主格言語が多いのはなぜか」ということこそ、SAE 圏言語学の最大の謎であった。

Ga(SHIN-L)は、人類を自然の一部と見なし、近現代的な「個」「自我」の概念を持たなかった頃の自己意識を表していると考えられる。これに対して、Ga(SHU-L)は、確固たる個人の存在が脳に自己言及的に認識されており、自己と他者、人類と自然の関係は、すなわち主体と客体との対立的関係であって、とりわけ SAE 圏では人類が自然の上位に、神が人類の上位に置かれる。

NOM-L(SHU-L)が一神教、特にキリスト教文明圏において主要な言語となっていることは、偶然ではあり得ない。あるいは、このような分析は、言語学と言わずとも哲学・宗教学などの諸分野でも、もはやありふれたものであろう。

【Umt(SHIN-L)、江戸時代や戦前までの日本人、近現代日本の重度の DD 者、仏教文化圏の世界認識】

自然・自己・他者・動植物・神々

【Umt(SHU-L)、SAP(SAE)圏の世界認識】

超越理念（「神」「アイデア」「純粹形相」など）

↓

人間 —————→ 自然

自己（自我）

他者（他我）

§ 13 解離性障害者等の擬音語・擬態語

今の目的は、SHIN-L と SHU-L との違いを見ることであるから、SHU-L 以外は全て一括りにして語るべきであるし、実際にそれも可能であるが、まず、最初の三つの時代について見ておく。ZEN-L、GI-L、SHO-L の時代である。

以下は、PDD 者や DD 者から得られた、擬音語・擬態語表現である。

「昨日は、景色がボラボラして悲しかったです」
「ハムスターの表情がソセソセしていて可愛かった」
「花の表情がリセ、リセ、リセという感じでした」
「体がヌンヌンする」
「モユモユした曇り空のような感じ」
「ゾネゾネしてしんどい」

以下は、幼児の発言である。

「ママ、レンジでチンするの？」
「ブーブー来たね」
「紐がクルクルだ」

我々の言語は、まずは泣き声や笑い声、唸り声やささやき声で始まる。そしてある程度整った擬音語・擬態語が見られるようになる。やがて、簡単な単語の羅列の時代を迎える。これこそが、日本語史や世界の言語史、一般の幼児の言語獲得過程、MD・SD 者の記憶と体験という三つ巴の研究から見出されるべき普遍の法則なのだろう。

人類が初めて使った言語がいかなるものであったか、それを寸分の狂いもなく再現することは不可能だが、いわゆる「擬音語・擬態語」を中心とするものであったろうことまでは、誰でも予想が付く。

また、これは幼児が言語を獲得する過程（「ブーブー」→「くるま」、「ワンちゃん」→「いぬ」など）の最初の段階にも重ねることができるだろうという点についても、簡単に予想が付く。

これらのことから、普遍的な音象徴（鶏の鳴き声には、「コケコッコー」「コッカドゥー」「ドゥルドゥー」のように必ず「k」音や「d」音が入るのではないか、など）を想定する向きもある。また、特に擬態語についても、星の光（視覚）を「キラキラ」（聴覚）と言うなどは、古代や幼児期の共感覚の名残であると見る向きがある。

ただし、まずはこういった普遍的な音象徴を（言語学者のみならず）我々がぼんやりと

意識している心理状態が本当に時代を問わず変化しないものであったかについて、若干の反駁を加えたい。擬音語や擬態語を今日ではまとめてオノマトペと呼んでおり、ここでもそれに従う。

先の「ヌンヌン」などのオノマトペを見て、「そのようなオノマトペは聞いたことがない」と言う SAP(SAJPCJP)がいたならば、その者にとってのオノマトペとは、重度 MD・SD 者らから見れば、すでに「SAJPCJP 的」、「SAECW 的」であるのだろう。

DD 者や共感覚者の中には、症状や感覚が強い日には SAP(SAJPCJP)の会話の意味内容がうまく聞き取れない人がある。このとき、「オノマトペとそれ以外の語彙の区別がなくなって感じられる」という事態が多々見られる。我々人類の祖先の原初の言語にはオノマトペしかなかったという説が正しいとしても、それがオノマトペであるということ自体も、彼らは認識不可能であっただろう。

(私を含めた) 共感覚者が訴える「共感覚」と、言語学で言う「共感覚」とは、かなり様相が異なっている。ISReJP の ZEN-L や GI-L において ISReJP が最も大きく話題に上らせたい「共感覚」は、「輝く星を見てキラキラという感じがする」ということとは、実はあまり関係がない。

むしろ、それよりももっと手前の原初的な感覚である。むしろ、多くの共感覚者も星を見て「キラキラ」とは感じるけれども「ニョロニョロ」とは感じない、という言い回しは誤謬ではないが、これは Umt(ZEN-L)や Umt(GI-L)にとって、「共感覚」と違って後天的・社会的な単語学習だと感じられている。

ある PDD 男児は、「コンコン」の「コ」と、「怖い」の「コ」との区別自体ができなくなるときがある。オノマトペとそれ以外の語の峻別自体が、本当に我々の感覚世界の記述として正当であるかどうか、「オノマトペという概念の是非から問い直す」のが、ISReJP の言語学的立場である。

オノマトペとそれ以外の語が別範疇と認識されるようになったこと自体が、人類が SHIKI-L を獲得した根本原因であるとも言える。

オノマトペは、その他の語よりも世界的に普遍性があるのではないかと考えることは無謀ではないが、各民族語間の壁は厚く、突き詰めていくと、「涙がポロポロこぼれる」のニュアンスが伝達可能なのは「ポロポロ」というオノマトペを共有している日本人であるからだ、というトートロジーになってしまう。

母語の中に「ポロポロ」という語があって、その中で育つがために「ポロポロ」と感じられる「ようになる」という後天的なトートロジーの現実を無視するのは、危険である。ただし、涙自体が「ポロポロ」という性質を持っているからだ、と答えることもできない。

日本の幼児は、「くるま」なる N を覚える前に「ブーブー」というオノマトペを発するが、この「ブーブー」自体が、すでに多分に物心付く前の環境、周囲の SAP(SAJPCJP)に束縛された音象徴である。

むしろ、車のエンジン音を聞いて、「ブーブー」や「バーバー」、あるいは「トンギンガ

ー」や「クジャンララー」などと発した PDD の幼児や若年者こそ、環境的要因を排除した人類普遍の音象徴を示しているとも言える。

ある車種のエンジン音は「ゾンゾー」だが、別の車種のエンジン音は「ケンゲー」だと言う幼児もいる。そういった幼児から見れば、自らの母親や周囲の母親の多くが教える「ブーブー」なるオノマトペ自体が、すでにオノマトペではなく「N」である。事実、母子の会話では、「ブーブー “が” 道 “を” 走ってるね」といった厳格な SHU-L によって会話が繰り広げられるのだから。

PDD の子どもにとっては、自らが「ゾンゾー」を発語したときには、周囲の子どもはすでに「ブーブー」を発話し、自らが「ブーブー」を発語したときには、周囲の子どもはすでに「くるま」なる単語を発話している。

ましてや、「レンジでチン」の「チン」が「客観的・普遍的」な音象徴であると心理学者や言語学者が分析して、子育て中の主婦に「擬音語を大切にしましょう」と教えている現状が正しいと言える根拠は、どこにあるだろうか。SAP(SAJPCJP)にしか通用しないのではないか。こういった連続体的観点こそ、PDD 者や DD 者の本能的な洞察であると思われる。

例に挙げた「ボラボラ」や「ヌンヌン」のほうが特定の PDD 者や DD 者のみに当てはまる個体的感覚で、「(体が) ゾクゾク」や「(お腹が) キリキリ」などの一般的なオノマトペのほう日本人に普遍のオノマトペであると言ってよい根拠は、おそらくない。昔、日本の犬は我々の耳に「びよ」と鳴いていた¹²。「ボラボラ」や「ヌンヌン」といった自由なオノマトペが、ISReJP では許される。

むしろ、日本語の恐るべき特徴は、オノマトペにそのまま「する」を付けて V にしてしまふところで、「キラキラした星」「鼻でクンクンする」などと言ってしまう。ISReJP では、いかなるオノマトペについてもこのような言い方を許している。

この感覚に似たものは、かつての日本にもあって、「枕詞」と言われるものがそれに当たると、ISReJP は考える。「白妙の (シロタヘノ)」と言いつつ時点で、「袖」や「雪」にかかることは互いに了解されていた。「シロ」や「タエ」という語自体が、いわば現在の「シンシン」以上に『万葉集』時代の我々に共通のオノマトペと認識されていたであろう。

これはほとんど呪文と言ってもよいものであろう。幸田露伴は、「風 (カゼ)」の種類を「嵐 (アラシ)」や「東風 (コチ)」などと言うように、「風」に当たるものを我々日本人はかつて「thi」のような音で呼んでいて、それが「ゼ」「チ」「シ」などに分化したのだと述べている¹³。

そうだとすれば、言語学、特に音韻論・形態論は、「カゼ」なる単語と「ビュービュー」なるオノマトペとが別々の文法範疇に感じられている SAP(SAJPCJP)の脳機能の特異性の

¹² 山口仲美 (2002)『犬は「びよ」と鳴いていた—日本語は擬音語・擬態語が面白い』 光文社新書

¹³ 幸田露伴 (1947)『音幻論』 洗心書林

ほうを問題にすべきなのだろう。

どこの国・民族でも、日常で使用する語を調べると、オノマトペの使用量は女性が圧倒しているようである。「景色がボラボラ」、「花の表情がリセ、リセ、リセ」などという非日常的オノマトペ表現は、今のところ確かに PDD や DD の女性に多い。だが、こういった世界認識が、あくまで「個人的・主観的」であって「普遍的・客観的」でない理由は、おそらく見当たらないだろう。

乳幼児が「ブーブー」と発語したからと言って、これを「初語」だと喜んでいる母親は、乳幼児の初語が ZEN-L 段階の「エーン」という産声、そして、GI-L 段階の「ズーズー」や「トンギンガー」といった非日常的オノマトペであったことを知らないのだろう。

乳幼児の「言語」と「世界認識」は受精卵のときから存在するのである。ISReJP は、このことについての確信と情熱とを持っている。これまでに日本や世界で為されてきたオノマトペ研究は、言語の古い姿の研究と言うよりは、人類の言語獲得過程の或る程度進展した段階の研究であるかもしれない。

換言すれば、ISReJP は、オノマトペとそれ以外の N や V といった品詞との境界の設定は、Ga(Post-SHIKI-L)にのみ可能な技術であって、しかし、この技術によって日本の古語の全てを語ろうとすることは避けるべきなのだ、と考える。

§ 14 生命性解釈の再編（有生物と無生物の対立の有無）

さて、SHIN-L の中でも最初の三期、すなわちまとめて KU-L に特徴的な「擬音語・擬態語」を取り出して述べてきたが、結局はこれらの三期と、それ以降の SHIKI-L から KATSU-SHU-L までは、一貫して先の自然観に乗った連続的な変化なのである。

KU-L のあと、今度は単語どうしの関係を認識しながら言語を話す時代となる。単語どうしの関係を認識するということは、生物や物体の名称とその動作や状態を表す語、すなわち、N と V・Adj 程度の区別が生じるということである。

例えば、「私、石器、落ちる」に当たる三単語と「石器、落ちる」に当たる二単語が発せられた場合、当然ここで言う「私」は対自然としての「自我」Ga(NOM-L)ではなく、「自然・動物の一種としての私」であるから、どちらも自然（人類を含めた）が行った行為と認識されるが、「私」があることで、「私が石器を落とす」という、より複雑な現象を指しているとは認識される。

このとき、「私」「石器」のあとに、無標の格表示 ZETTAI があると考えて、これを ISReJP は SHIKI-L と名付けたのであった。「私」「石器」と言った瞬間に、意識がそれらに向かって収束するというに加えて、「私」「石器」「落ちる」という語どうしの関係が表されるという点で、SHO-L における単なる単語の羅列とは違う。

こうして、自分たちが他の動植物や物質と異なる意識を持って言語を主体的に操る存在であることがようやく認識される。ただし、それぞれの単語自体は、現代から見ると、ほぼ全てオノマトペ的に聞こえるものであったに違いない。

さて、重度の PDD 者や DD 者らが有生物 N と無生物 N を区別していないことは、Ve(Vb)を用いた次の検証実験によって明らかとなる。

風（ ）扉（ ）ひらく。
皆（ ）扉（ ）ひらく。
二人（ ）扉（ ）ひらく。
彼（ ）扉（ ）ひらく。
私（ ）扉（ ）ひらく。

「風」「皆」「二人」のみならず、「彼」「私」のあとにも「で」を付して、「彼で扉がひらく」「私で扉がひらく」と答えてしまうのが重度の PDD 者や DD 者の特徴である。

一NOM-L の特徴として、人間を中心とする有生物と、植物・無生物・抽象概念との文法上の峻別がないことが挙げられる。NOM-L は、これらを峻別する言語である。N の性（文法性）が消滅した SA(EN)では特に、人間と人間以外の動物との境界も明確であって、it(=PN)の使用領域の甚大さがそれを示している。

そもそも、NにGG（最初は、男性・女性・中性の三種あった上、アメリカ先住民語では五〜数十種もあった）が生じたのは、あらゆる自然物・物体にNOMを取らせる、すなわちPNで受けることを可能にするための人為的措置であって、いわゆるPIEは紀元前にすでにその段階に達していた。現在では、この三性全てを残しているLF(IE)のほうが珍しく（サンスクリット・ギリシャ語・ラテン語・ドイツ語など）、多くのSAEで男性と女性のみ（フランス語など）、通性と中性のみ（オランダ語など）に整理・統合されており、SA(EN)に至っては、性が消滅し、全ての自然物や抽象概念がPNになることができ、人間と同様にNOMを取りうるようになっている。

例えば、近藤健二は、PIEにおいては、有生物と無生物の対立が厳しくなったその時期に、すでにNの男性・女性・中性の区別が生じ始めていたと推定している¹⁴。

ちなみに、ISReJPにおけるGU-LやKYU-Lに属する先住民の言語では、Nを数十にも分類する言語があるが、これが有生物と無生物の対立を意味するものでは全くないことを指摘しておきたい。クリモフらは、こういった言語を類別言語として、「ここから有生物と無生物の厳格な対立が失われたのがACT-Lで、そこからさらにERG-LとNOM-Lとが生まれる」と説いているが、重大な誤りであるだろう。

人類の言語の黎明期には、そのような対立はないだろう。先のように、「石器が私を落とす」のではないこと、「私」が「石器」とは異なる存在であることが認識されているのみである。

そこから文明段階を経るに従って、一般に「私、他の人間、動物、植物、無生物、抽象概念」の順に、Sの位置に立つようになっていくのである。その間、人間と動物一般の全てがSに立つようになった時期に、初めて動的な「人間や動物」と静的な「植物や無生物」との区別が生まれ、しかも人間が動物の上に立つとの認識が生じたのである。PIEはこの時期を紀元前にすでに通過しているが、日本語は江戸時代末期まではそのような世界認識を持たなかった。

KATSU-L(ACT-L)の時代について付け加えておくと、この時代には、行為の主体になるか状態の主体になるかでNが分けられる。有生物か無生物かで分けているというのがクリモフらの説であるが、有生物は行為の主体になりやすく、無生物は状態でありやすい、ということにすぎない。人間視点からの生命性の有無で主体を分類するのはSHU-L以降であって、KATSU-L圏の民族はそうには認識していない。

TpLでは、無生物や抽象名詞はSに立たない傾向がある。日本語でも、「会議が開かれた」などは翻訳体として生まれた文体だが、現在では普通に使う。その意味では、SAJPCJPは、本来は西洋の抽象概念名詞が全くうまく乗らない文法に、それらのNを強引に組み込んだ結果できた、世界でも極めて異質な言語である。

SAJPCJPの文法がSHU2-LやSHU3-Lあたりでありながら、そのほとんどの

¹⁴ 近藤健二（1994～2002）「能格的なものの発展をめぐって(1)～(10)」 *Studies in language and culture*

SAP(SAJPCJP)の意識が Ga(SHU4)や Ga(SHU5)であることは、先の実験と解説で示した。もっとも、SAP(SAJPCJP)は、自然に対して人間の西洋近代的「個」としての自己意識 Ga(SHU4 or SHU5)の実在性を疑う機会などほとんど持たずに生活しているのだから、SAJPCJP の異質さに気づいて不平を表明することもほとんどないと言える。

このように、人類の言語の SHU-L 化の過程は、人間のみを自然から取り出して上位に立たせ、自然を人間の世界認識に PN という技術を用いて組み込んでいき、自然に人間と同じ格標識を与えて文の S に立たせることで、「人間中心主義」を徹底させる過程である。

§ 15 動詞の自他の不問

重度 MD・SD 者が Vint と Vt の区別をしていないことは、先の検証実験によって示された通りである。

「作る」は、SAP(SAJPCJP)にとっては、「～を作る」という Vt である。ところが、DD の著しい女性では特に、本来なら「私が扉を作る」と Vt で言うか、「私によって扉が作られる」と受動態で言うところを、「私で扉が作る」と言い、Vint のように扱う。

こういった MD・SD 者らは、一通りの社会生活を送ることができる場合は、単語羅列の SHO-L しか解さない最重度 SD 者に比べれば N と V の区別は付いているが、V をただ「動作・行為を表す」とのみ認識していて、それを自他の二種類に分類するということがない。

むしろ、SHU-L に近い KATSU-L や I-L 段階の者であれば、「私が扉、作る」「私、扉を作る」などと、比較的回答が絞られてくる上、症状も軽度の者が増えてくるのであるが、SHIKI-L や GU-L 段階の者では、様々な JPa が同等に扱われ、V の形には全く影響されない。

ISReJP は、このような構文、Vint と Vt の区別という概念が理解できない重度 MD・SD 者の世界認識を、許容する。特に、ある一つの動作や行為を表す V の Mo-pre は、本来は一つの形しか持たないと解釈する。

V の自他なる概念が SHU-L になって初めて生じたものであることは、すでに述べた。生物や物体に名称を付けるだけでなく、それがいかなる動作をしているかということまでも言語化するようになった時代、すなわち N と V の区別が初めて付いた時代は、SHIKI-L の時代なのであるが、この時代においては未だ全ての V が「ある・なる」型として使われる。すなわち、人間が自然に対して「する」随意的行為や随意的状態が存在しない。

現在の Vint の主体、Vt の主体と被動者・対象者（物）が全て異なる格を取ろうとも、全て格を取らなくとも、構わない。人為的におこなったことが、全て自然の行いであると認識される時代である。自然を大幅に改変するような人為的行為自体が存在しない時代、あるいはそのような民族・地域には、このような文法を見出すことができる。

シベリアのハンティ人の話すハンティ語（特にヴァフ川方言）は、S、A、O が全て異なる格標識を受ける言語である。S は基本的に無標であり、絶対格(ABS)と呼ばれる。同じくオビ・ウゴル諸語に属するマンシ（ヴォグル）語も、PLA や ABL と並んで INS が S となり得る。

これらの言語は NOM-L とされることが多く、NOM が INS と区別され、後者が S のときに疑似 ERG-L となる分裂能格性を持つとされるが、これも、NOM-S を明確に認めたくなる SAP(SAECW)の Ga(SHU)による分析であろう。

マンシ語の NOM・ACC・GEN・INS とされる格は、オーストロネシア語族の焦点標識と同等である。その中で INS(GU)が特に強調される。「老人は斧で木を切った」、「女の子が着物を着た」、「私は老人と食卓についた」の「斧で」、「着物を」、「老人と」は全て INS(GU)

で標識される。

タジキスタンで話されているイラン語派のルシャン語では、S の標識が異なり、A と O の標識は同じである。日本の DD 者女性の中に、「私座っている」「私は扉が閉じる」と答えた者、「私の座っている」「私を扉を閉じる」と答えた者がいたが、それぞれ、ハンティ語とルシャン語の格標識法に類似していることが分かる。

日本語の V の分類も Vint と Vt という概念で説明できないことは、三上章をはじめ多くの言語学者によって指摘されてきた。これを発展させて、金谷武洋は、日本語における Vint と Vt の差は、自然がそう「ある」か、人間が自然に対して「する」のかの差である、と述べている¹⁵。

ISReJP の場合、Vint と Vt という語さえ廃して、V は元々全て「自然がそう“ある”ことを示す単語」であったと考えるため、ISReJP のほうが通時的観点を強調しているという点で、金谷氏と差があるが、SAE 的な V の分類法の日本語への適用を疑問視する態度は同じであろう。

ISReJP は、MD・SD 者の実際の回答を用いて通時的な日本語観を提案し、その変化を記述したということである。別添資料(8)の年表の「名詞・動詞の変遷」の右欄の V は「自然動詞」=Vs、左欄の V は「人為動詞」=Va とでも言えるだろう。

明治時代に SAE の文法理論を日本語に適用するようになって以来、反対に日本語のほうに変質し、V についても著しく変化した。漢語動詞に至っては、明治時代には、Vint としても Vt としても使えた V (「(～が・～を) 感動する」「(～が・～を) 変更する」など) が、現在は Vint 専用か Vt 専用に分裂していることが知られる¹⁶。

現在は、「感動する」は Vint 「～が感動する」として、「変更する」は Vt 「～を変更する」としてしか使えない。「～を感動する」とは言わず「～を感動させる」と言い、「～が変更する」とは言わず「～が変更される」と言う。しかし、少なくとも明治時代の終わりまでは、それぞれ「～を感動する」、「～が変更する」が一般的であった。かつての日本語に Vint と Vt の峻別が存在しなかったことを示す良い例である。

なお、自他両用の V から Vint 専用になった V には、「動揺する」「運動する」「影響する」など多々あるが、Vt 専用になった V は、「変更する」「隔離する」など、かなり少ないことが知られる。

これは例えば、「風が吹き、風車が回転する」という文の「回転する」を Vt として使うと、「風が吹き、風車を回転する」または「風が吹き、風車が回転される」となるが、後者の言い方では「誰によって」という行為者（「風」以外の「人物」）の存在を感じさせ、不自然となってしまう。従って、「変更する」「隔離する」など、明らかに人為的行為を表す V 以外は、基本的に漢語 V が Vt 専用になることはないのである。

¹⁵ 金谷武洋 (2002) 『日本語に主語はいらない』 講談社

¹⁶ 永澤済 (2007) 「漢語動詞の自他体系の近代から現代への変化」『日本語の研究』第 3 巻 4 号、『国語学』通巻 231 号

また、「風が吹き、」といったん区切って複文としたが、「風で風車が回転する」ではどうか。これを **Vt** として使うと、「風で風車を回転する」または「風で風車が回転される」となる。後者の受動態の説明はあとに譲るとして、「風で風車を回転する」なる構文は、先の検証実験における重度の **MD・SD** 者の世界認識に沿った言い方であることに気づくだろう。

そのような **MD・SD** 者の世界認識と江戸・明治・大正時代までの日本人全体の世界認識とが近いこと、**V** に関しては **Vint** と **Vt** なる区別もないことが、浮き彫りになるであろう。

Vint と **Vt** の区別が今でも曖昧な言語の例を示すのに、漢語を挙げないわけにはゆくまい。漢語は最も原始的な孤立語であって、**V** に活用がないのだから、全ての **V** が **Ve(Vb)** であると言える。もっとも、かつては漢語にも格標識や **V** の活用があったとされるが、おそらくは **ISReJP** の **SHIKI-L** を出るものではなく、**N** と **V** の違いが認識されている程度であって、語順は **SVO** を基準として自由であったろう。例えば、

他推窗戸。(彼は窓を押す。)

窗戸開。(窓が開く。)

の二つの文を合体させて、

他推開窗戸。(彼は窓を押し開ける。)

という文を作ることができる。漢民族には、上記の二つの文の **V** が、それぞれ **Vt**、**Vint** とは認識されない。このような漢語の特徴も、しばしば **V** の自他混用及び能格性といった概念で説明されるが、**S**、**A**、**O** の全てが無標の **ZETTAI** 標識を受けていると見なすべきであって、日本語訳としては、「彼で窓を押す」「窓で開く」などでもよいのである。

§ 16 能動・受動両態の区別の再考

さて、一NOM-L(SHIN-L)において、Vint と Vt の区別がないということは、態で言えば能動態(AV)と受動態(PV)の区別がないこととほとんど同義である。「甲が乙に動作を“する”」ことと、「乙が甲に動作を“される”」こととの間に、文法的に全く区別がない言語のことである。

「オーストロネシア語族（特に台湾、フィリピン、ポリネシア、インドネシアの原住民語など）に見られる、いわゆるフィリピン型格配列は、この語族が GU-L や KYU-L あたりの形態を未だ維持していることの証左であろう。

従来、「焦点」という概念が用いられ、NOM-L における AV と PV との区別に当てはめる作業が行われてきた。ISReJP の分析によれば、この「焦点」は、SHIN-L 時代の N の格標識である数々の ZETTAI の中の強調形であると説明することが可能となる。

例えば、台湾南部のパイワン語では、普通名詞に付く a、人名单数に付く ti、人名複数に付く tia は NOM とされているが、これこそ焦点と呼ぶべきものであり、ISReJP の格分析では ZETTAI から抽出されつつある GU や KYU（すなわち、有標の ZETTAI）の一種であるということになる。これを新たに「視点」と呼ぶ動きもある¹⁷。

日本語は、現在でも焦点または視点、あるいは ISReJP における有標 ZETTAI が残っている言語であると見ることができる。

私ね、花を見ているの。

私が、花を見ている。

現在では後者の「が」は NOM、「を」は ACC とされるところだが、前者の「ね」や「の」を有標 ZETTAI と見なせば、「が」や「を」でさえ、有標 ZETTAI と見なすことも可能である。

「私ね」について、「私が」から NOM の「が」が抜け落ちて、そこに「ね」が加わったと見なすのは、Ga(NOM)の発想であって、「私ね」と「私が」は、重度の MD・SD 者には同等であると認識されており、「ね」は特に女性強調形の有標 ZETTAI であると感じられている。

多くの DD 者、特に女性が、「私で花を見る」、「私を花見る」などと答えたのは、これら「 ϕ 」「で」「ね」「の」「が」「を」などを全て同じ「つながりの音」、「口調を整える音」、「特に単語を強調する音」程度の感覚で答えたからに他なるまい。

SAJPCJP、特に女性言葉に付けられる「ね」「の」「わ」「かしら」などと、オーストロネシア語族に残る焦点格ないし有標 ZETTAI とは、機能的に見て同等であり、同時にそれ

¹⁷ 近藤健二 (1999) 「能格的なものの発展をめぐって (7)」 *Studies in language and culture*

らは言語の原始的形態を残すものと見てよいであろう。もし ISReJP の検証実験文の中に、「ね」などが入っていたならば、むしろ多くの DD 者女性は、「私ね、扉、閉める」などと答えたであろう。

この傾向は、幼児の言語獲得過程にも現れる。

ねこがねずみにおいかけられました。(猫が鼠を追いかけた、の意で発言。)

花が雨に降っちゃった。(花が雨に降られた、の意で発言。)

幼児には、「猫、鼠、追いかける」、「花、雨、降る」の単語が含まれることが重要なのであり、またそれらの単語がありさえすれば文意は通じると考えているのであって、「猫が鼠を追いかけた」(AV)と「鼠が猫に追いかけられた」(PV)、「雨が花に降った」(AV)と「花が雨に降られた」(PV)とにも区別はない。

「Vint と Vt の区別がない言語であること」と「AV と PV の区別がない言語であること」とがほぼ同一の概念であることがよく分かる例である。

§ 17 中我態

AV と PV の区別、「自分が他者にはたらきかけること」と「他者が自分によってはたらきかけられること」との区別が、実際には NOM-L としての SAECW にのみ通用する概念である事実を観察するには、中間構文を語らねばならない。ここでは、次の二文を検証する。重度 PDD 者においてこれらの区別が付かないことは多いが、重度の DD 者女性・性的被害者女性でも、全く同様のことが見られる。

昨日ね、私は髪を切ったの。

今さっきね、私は目を閉じたの。

SAP(SAJPCJP)は、文法的には全く差異のないこの二文を読んだとき、前者を「私は美容師に髪を切られた」、後者を「私は自分で自分の目を閉じた」と、驚くべき解釈の仕方を呈する。すなわち、動作主の「自己」と「他者」の区別を無意識に行っているが、その区別が文法とは無関係であることが分かる。

前者では確かに、「髪を切られたい」と思った意志者は私、「髪を切った」行為者は美容師であり、後者では意志者（目を閉じたい）・行為者（目を閉じた）共に私である。

会話の当事者どうしでこのような抽象的思考と状況把握の合致が可能となるには、「髪は床屋や美容院で切ってもらうものである」、あるいは「自分の目を他人の指で閉じてもらう状況は、現代一般の生活ではまずあり得ない」といった社会通念が当事者どうしに共有されていることが必要となる。

SAP(SAJPCJP)の場合、この種の「文法への“高度な無頓着”」は、多分に「後天的・社会的に」身に付いたものであることが分かる。すなわち、日本人の文明生活と世界認識の驚異的な欧米化・NOM-L 化に、日本語の文法のほうが追い付いていない。

同様の例としては、「昨日、車を修理した」、「先日、足の手術をした」、「卒業式で集合写真を撮った」などがある。車を修理した人、手術をした人、写真の撮影者が、発話状況によっては話者本人でなく、修理工、医者、カメラマンや教員や友人や話者の家族であることは、聞き手に問題なく伝わる。

また、例えば「彼女は服を着た」の文について、この「彼女」が成人である場合には、「彼女は他人の手によって服を着せられた」の意に解する人は、ほぼいないだろう。もし「彼女は髪を切った」（背後に美容師の存在を想起させる）と同様に、「彼女に服を着せた人」の存在が想起されたとすれば、親が子に服を着せる、着付け師が女性に着物を着せるなど、特殊な状況で発話された場合であろう。あるいは、自分で服を着たのでない場合は、「服を着せてもらった」（「もらい」構文）、「服を着せられた」（受身構文・PV）などと、明示的に表現するだろう。

「私は着物屋さんで着物を着て記念写真を撮りました」の場合は「着物を自分に着せた」

のは着付け師、「私は制服を着て学校へ行った」の場合は「制服を自分に着せた」のが彼女自身であることは、SAP(SAJPCJP)には何の問題もなく理解されるだろう。

SAP(SAJPCJP)の脳がおこなうこのような超高度無頓着作業（世界認識と文法とが一致していないことに気づかない言語使用）は、重度の DD 者女性らからすれば、驚異的で不自然なことである。

SAP(SAJPCJP)にとっては、「服を着せる」行為が、親や他者にしてもらっていた時期を過ぎ、成長につれて自分自身でするようになるのと違って、「散髪」という行為が、成長過程あるいは時代を経ても、なお他人の手によってなされる行為であるがために、「私は美容師に髪を切ってもらったの」、「私の髪は美容師によって切られたの」などという言い方をせず、「私は髪を切ったの」だけでも、コミュニケーションに支障がないのである。

また、同様の差異は身体部位についても見られる。「彼女は爪を切った」の場合は、容易に「彼女自身が爪を切った」の意に解される。話者が行為を及ぼそうとする対象（ここでは彼女自身の爪という身体部位）が話者自身の物理的な身体能力の（話者自身の手の届く）範囲内にあり、かつ「爪を切る」行為が話者自身の年齢において可能な行為の範囲内にあるためである。

髪を切ることや手術をすることは、たとえ大人であっても、この限りではない。また、「少女は爪を切ってから、外で元気に遊びました」のような場合は、背後に「その子を外に出す前にその子の爪を切ったお母さん」の存在が想起されるために、「爪を切ってから」の箇所は、事実上「爪を切ってもらってから」、「爪を切られてから」と解されうる。

SAP(SAJPCJP)は、このような複雑な SAE 的世界認識を、本当はなお SHU2-L あたりをさまよっている SAJPCJP において、瞬時のうちにおこなって文明生活を営んでいる。言い換えれば、口から発せられるセンテンス（文）は、日本語古来の構文（受身を能動文で表現する）に近い構文を保っているながら、実際の世界認識は日本語の文法よりも SAE 的なそれそのものと言える。

むしろ、自民族古来の言語の基礎文法をほとんど変えずに SAE 文明に親和できた民族は、まことに稀有である。あるいは日本人しかいないと言って過言ではないだろう。

ところが、重度の PDD 者や DD 者などには、先の二文の違いが分からない。分からないほうが当たり前である。分からないと言うよりは、脳と身体が日本語の文法に忠実であると言える。日本語の文法は、まだ潜在的にはこういった人々の世界認識を適切に表現し得る力を何とか残しているのである。

世界の少数先住民族や東南アジアの言語は別にして、いわゆる先進国の言語でありながらこのような文法構造を残している国語は、日本語において他にはなく、SAECW においては、古典ギリシア語まで遡らなければ、SAJPCJP と同じような中間構文的な世界認識が見当たらない。

古典ギリシア語では、受身的な意味を能動文で表現するこの構文を「中動態」(ISReJP では MC)と呼び、AV や PV と区別している。一般には「中間構文」「能動受動態」などと

呼ぶ。

新訳聖書では「福音を述べ伝える」意の V「エヴァンゲリゾー」が MC で多用される。すなわち、自己が他者に一方的に伝えるのでも、他者によって一方的に伝えられるのでもなく、自他が福音を共有することに重点が置かれる。

現代において MC を残している言語は、例外なく AV と PV の厳しい対立を持つ言語に移行しつつあり、SAE と同様の道を辿っている。最近まで PV をほとんど用いなかったハンガリー語でさえ、SAECW に引き寄せられて AV と PV の対立が厳格になりつつある。

日本語は元々この MC を持つ言語であり、日本人の世界認識もそうであったが、AV と PV の区別しかない SAE 圏で発達した「自我」や「個人」=Ga(SHU)といった概念を急速に輸入したために、「言語」と「世界認識」とが今でも乖離している。

SA(EN)では、「I cut my hair.」と言って「私は美容師に髪を切ってもらった」を意味することはできない。SA(EN)の「I」は「私」ではなく、S と NOM と動作主体とが一致することを示す人称 PN である。「I had my hair cut.」すなわち「私は、美容師から髪を切られた、という状態を所有している」と、自我と他我との区別を文法上でも明確に表明する。

日本の重度の DD 者らからすれば、SAP(SAJPCJP)も本当はそういう日本語を発話してくれるべきなのかもしれない。そうしてくれない限り、事態把握が困難であるだろう。

「This book sells well.」(この本はよく売れる)や「This knife cuts well.」(このナイフはよく切れる)など、SA(EN)にも MC に似た構文があるかのように、言語学者でさえ誤解している場合が見受けられるが、本を買う不特定多数の人々やナイフを使う人が誰かということは重要ではなく、SA(EN)では多くは無生物が S に立つのであり、日本語の MC 表現とは全く異なる。「昨日、私は髪を切った」に該当する SA(EN)の構文は存在しない。

「I had my hair cut.」の S は確固たる個としての「我」Ga(SHU)を持つ「I」であり、「私は髪を切った」の S は「場としての我」Ga(TOP)でしかない。

SD 者の中にも、「彼女は髪を切った」と「彼女は目を閉じた」の文の意味上の動作主が異なることが全く理解できない者がいる。彼らには、SAP(SAJPCJP)が SAE 的に前者を事実上の PV 文、後者を AV 文と瞬時に理解していることが理解されない。「髪を切った」のが自分であるのか他者であるのか、「目を閉じた」のが自分であるのか他者であるのかの問いが、世界認識の中心にない。

こういった世界認識の仕方では、地域社会が一定の伝統や風習を守っている状況では支障がないが、「個人」対「個人」が通貨の価値を媒介して厳しく対立する分業化社会では、独力で生活を送ることは難しい。

彼らに「私は髪を切った」、「私は目を閉じた」とだけ言うと、「髪を切られたい」、「目を閉じたい」と思った意志者が「私」であることまでは理解できても、前者の行為者を美容師に、後者の行為者を「私」自身に収束させることができない。その中で、明治以降ないし戦後の SAE 的世界認識に立脚した SAJPCJP を母語として生活することを余儀なくされる。

こういった古来の日本語的な世界認識を残していることが原因で公的な場においてパニックに陥るケース（人前で話せない、電車に乗れない、など）が、特に重度の PDD・MD・SD 者に多い。

男性の場合、このような世界認識を持つ者は、ほぼ必ず SD を伴っているようで、元よりほとんど社会に出ていないと思われる。その結果、「対人恐怖症」や「社交不安障害」や「鬱病」など MD に関するレッテルが女性に対して多く貼られる一方で、「自閉症」や「言語障害」など脳と身体そのものの器質的障害に関するレッテルは男性に対して多く貼られる現状があるのであろう。

MC 的な世界認識を現在でも有する言語の一例として、マレー語を挙げておく。むろん、このような言語圏においては、PDD や DD なる概念自体の登場が遅れた。

Saya membaca buku itu. （私・読む・本・その）

Buku itu saya baca. （本・その・私・読む）

SAP(SAJPCJP)ならば、前者を「私はその本を読む」、後者を「その本は私によって読まれる」と訳したくなるところだが、マレー民族の世界認識には AV や PV という区別がない。

SAE 圏の言語学者は、常に AV と PV、自我と他我との区別によって世界の言語を解釈してきたが、Umt(SAJPCJP)である言語学者も、マレー語に類似する統語法が古代日本語にもあったとの見解は取っていない。

このマレー語についても、「me(m)」が、能動行為を表すときに付くのか、行為動詞には全て付くのか、それ以外の理由で付くのか、現在の言語学は結論できないでいる。「AV か PV か」という問い自体が Ga(SHU)から出たものであることに、気づきにくいからであると考えられる。

ただし、SAJPCJP でも、口語では「私、本読む」などと言う。「私は本を読む」と S や O を明示しなくとも、あるいは「本、私読む」と語順を入れ替えてもコミュニケーションが可能であることは、日本人が今でも深層意識では AV と PV の区別を行っていないことを確かに暗示する。

先のマレー語の訳は、JPa を用いない「私、本読む」=ISReJP の Se(SHIKI-ZETTAI)に近いと言える。しかし、少なくとも日本の PDD・MD・SD 者の言語認識の特徴を見た上で SAP(SAJPCJP)の世界認識に立ち返る限り、SAP(SAJPCJP)は「私、本読む」において、S を「私」、O を「本」と認識していると言える。

しかしながら、SAJPCJP ではそういった世界認識が全く反映されないかと言えば、かろうじて反映できる方法が残っている。日本語においては、自発・可能・受身・尊敬の四つの意味が、JPaV「る」と「らる」によって表されるとされてきたが、これも SAE 圏の言語学的手法での分析の結果であって、上古代日本人はこれら四つの違いを認識していなかったと見るべきである。

次の SAJPCJP 文を見してみる。

「展示品をこのように並べたほうが、お客様にインパクトが与えられるでしょう」

これは、あるスーパーマーケットにおいて筆者が実際に耳にした言葉であるが、これを口語として聞いたとき、不自然であると感じる SAP(SAJPCJP)は現在でも少ないであろう。この例文は、次の例文の未分化型であると分析できる。

「お客様にインパクトが自然と与えられる（自発）」

「お客様にインパクトを与えることができる（可能）」

「お客様がインパクトを与えられる（受身）」

先の例文を話した店員は、これらの区別を全く考えずに言葉を発したはずである。なぜならば、これまでに見たように、P が可能表現であるときには ACC として「が」を使うこともある上、この文の JP_a の使い方では自発と受身の違いはそもそも明確でない。「に」を「お客様におかれましては」と取るならば、「尊敬」とも取れてしまう。

この例文は、現在でも SAP(SAJPCJP)は、「れる」「られる」を時に上古代的な「る」「らる」の世界認識のままで用いることがあることを示す良い例である。

事実、これら四つの意味の混合様態を、聞き手側もそのまま認識するのだから、コミュニケーションには何の支障もない。

態 Vo とは、自我と他我、自己と他者とが対立的に把握される世界認識と一体化して発達する文法範疇である。SAE が PIE の段階からそうであるのは言うまでもなく、日本語でも武家政権の誕生とともに文法が変化し、行為者標識の筆頭が「の」から「が」へと移り、受身表現が比較的明確になり始めたのは当然である。

しかし、それはあくまでも「受身」であって、SAE 的な PV ではあり得ない。SAE では、話し言葉と書き言葉とで、PV の使い方が変わらない。

「私は驚いた」

「私は驚かされた」

「I was surprized.」

SAJPCJP では、現在でも「私は驚かされた」を単文として話すことは少ないであろう。話すとしても、「お化け屋敷でお化けに驚かされたよ」など、「驚かせた」行為者を明示する場合のみである。

SA(EN)では、「I was surprized.」しかない。すなわち、自発的に驚くということではなく、驚くという心理状態は、必ず「～によって」という、自己を脅かす他者や対象物との対立

的・戦闘的關係を前提している。

もっとも、「る」「らる」は、最初は自発の意味として生じ、のちに可能・受身・尊敬の意味が加わったと説明されるのが一般的である。受身としては、無生物に用いられることは中世になるまでは少ないというのが通説である。しかし実際は、それまでも無生物主体の「る」「らる」表現は話し言葉を中心に見られるのであり、中世になると無生物においても「受身」の意味が独立してきたと見るべきである。

上古代にも無生物主体の受身的表現が多かったことは、文献の緻密な分析によって明らかになってきた¹⁸。

日本語においては、話し言葉での無生物主体文の P における「る」「らる」の使用頻度は上古代からあまり変わらず、書き言葉では独立した受身表現の使用頻度が高くなっていく。有対自動詞の存在と話し言葉でのその多用が、無生物主体の受身表現の使用頻度が少ない要因である、とする説があるが、これも、やむを得ず Vint と Vt との峻別を前提した Ga(SHU)による分析である¹⁹。

¹⁸ 宮地幸一 (1968)「非情の受身表現考」『近代語研究』第二集, 武蔵野書院

小杉商一 (1979)「非情の受身について」『田辺博士古稀記念国語助詞助動詞論叢』, 桜楓社
奥津敬一郎 (1983)「何故受身か?—<視点からのケース・スタディー>—」『国語学』132 集

¹⁹ 田中道治 (2002)「非情受身とその類似機能表現」 富山国際大学人文社会学部紀要 vol.2

§ 18 斜格主語の優越

あらゆる言語において、無標・ZETTAI の次に初めて明確な形で現れる格標識は、GU であると言って差し支えない。

現在では、GU は、英語では主に by、ラテン語では ABL 的な意味を持つ ab で表されるが、これは NOM-L の AV と PV の区別におけるはたらきであって、今 ISReJP の言う GU-L とは、のちの SHU の原点となる格が初めて ZETTAI と区別される形で現れた言語のことである。

今や GU ないし INS は、NOM や ACC などの文法格に比べて重視されない上、日本語や英語では S に立つこともなくなった。しかし、ISReJP では、GU が S になるなど、現在の斜格（主格以外の格）主語=OBL-S が NOM-S に対して優越する。

古形の GU 標識を現在でも残すウラル諸語を見してみる。ハンティ語においては、N の格と呼べるものは DAT の他には INS しかない。「私はあなたに魚を与える」、「犬があなたを噛む」において、「私は」と「犬が」が INS をとる点は、先の検証実験で MD・SD 者が示した結果と合致する。（「私で扉が作る」、「私で花が見る」など。）

INS が S に立つことは、その言語が ISReJP における GU-L である証拠だが、トゥルン語では、三人称を S とする Vt 文でのみ、S が INS と同形の ERG をとるとされる。だが、ERG と INS が同形であるのではなく、それはすなわち GU や KYU であって、トゥルン語が ISReJP における SHIKI-L と KYU-L との中間あたりに位置することを意味する。

次の ERG は、GU か KYU と見るべきである。

男・ERG 私 棒・INS(=GU) 打つ・3 単・1 単・PST

「男が私を棒で打った」

DD 者女性には「私で扉で作る」と答えた場合が多かったが、トゥルン語の世界認識とほぼ同等である。

彼女たちは「で」を ABS 的に把握しているため（「私で扉で作る」と答えた女性は、ほぼ必ず「私の扉の作る」なども併記した）、ISReJP はこれを SHIKI-L の結果に入れたわけだが、トゥルン語では ka は「～によって」に当たる意味に認識されており、ERG と言うよりは、ISReJP が GU-L と言うときの GU に近い。上の例文は、「男によって、私、棒によって、打つ」と翻訳すべきである。

中国雲南省・四川省・貴州省・広西チワン族自治区などに住む彝（イ）族が話すロロ語は、二人称単数以外は NOM・ACC・GEN が全て同形という特徴を持つ。しかし、ロロ語には INS・ERG 同形の接辞があることから、NOM・ACC・GEN は同形 ZETTAI や同形 GU と呼ぶべきものであることが分かる。

重度の DD 者女性の中に、検証実験文(n-1)の(a)のみを「で」とし、それ以外は無標か全

て同じ JPa を入れた者が多かったが、この口語も、いかに一個人の言語獲得過程の幼児期に該当する段階を呈しているかがよく分かる。

INS がのちの NOM の原点であった痕跡は、SAJPCJP にも残っていないわけではない。再び同じ例を出しておく。

風（ ）扉（ ）ひらく。
皆（ ）扉（ ）ひらく。
二人（ ）扉（ ）ひらく。
彼（ ）扉（ ）ひらく。
私（ ）扉（ ）ひらく。

重度の DD 者女性では、「彼（私）で扉が（は）」という回答が見られる。SAP(SAJPCJP) は、無意識のうちに確固たる自我と他我、単数と複数、有生物と無生物とを峻別するがために、「彼」と「私」にのみ INS 標識を付けないのであるが、しかしともかく、「風」「皆」「二人」には今でも「で」を付けるのである。「風で」の場合のみ、「扉」には「を」を付さず、「が」と「は」のみを付すのであるが。

上古代日本語に「私で」なる表現がなかったのは、むしろ無標も「の」も「が」も、元は ZETTAI、のちに GEN や GU のはたらきをする接辞であったからで（「我が袖」など）、近代において「が」が SHU に特化されたがゆえに、「にて」の転訛である「で」が GU となったのである。「私で扉が」と回答した DD 女性の世界認識は、前近代日本人のそれに合致している。

オビ・ウゴル諸語に属するマンシ（ヴォグル）語では、PLA や ABL と並んで INS が S となり得るが、これは ISReJP の KYU に近い。この言語は NOM-L とされるが、「NOM を INS と区別し、INS が S のときに ERG-L 的となる NOM-L である」との通説は、NOM-S を明確に認めたい Umt(SAE)の言語学者の願望の結末にすぎない、ということを今一度書いておきたい。

マンシ語の NOM・ACC・GEN・INS は、オーストロネシア語族の焦点標識と同等である。その中で、従来 INS 主体とされてきた主体が、特に強調されるのである。他者や対象物に変化・影響を与えるという点で、ISReJP における KYU とよく合致する。

§ 19 時間の非直線性

19.1 時制・相・法

言語において「時間」なる概念がどのように反映されているかを示す指標には、時制(Te)・相(As)・法(Mo)といった概念がある。

Te とは過去・現在・未来、As とは進行・完了、Mo とは直接法・接続法などを表す。しかし、これらに共通していることは、時間を「過去から未来に向かって直線的に流れるもの」と見なす SAE 圏でしか成立し得ない文法範疇であるということである。事実、Te・As・Mo の概念は、NOM-L 特有の文法範疇でしかない。

PIE では、すでに紀元前に Te・As・Mo は別々の概念としてほぼ独立しており、それはここ三千年を経て、SA(EN)のように時間を直交座標系的に分析する世界認識へと到達した。SA(EN)においては、Te・As・Mo が互いに混ざり合うことはほとんどなく、「do」から「will have been doing」まで、極めて分析的な時間感覚を持っている。

現代フランス語 SA(FR)のように、PRS と PROG とを文法上は区別しない SAE 系言語もあるが、むしろこれは、Te・As・Mo の区別が明確になったあとの時期に起こった変化であって、一NOM-L の時間感覚とは似て非なるものである。

一NOM-L の時間認識の特徴は、そもそも時間と空間とを別物と考えない相対論的な認識を持っていること、過去・現在・未来という概念がなく、過去と未来とは等しく「現在から見た距離感」でしかないこと、過去や未来という概念がないのだから、むしろ行為の進行性や完了性に優先的にこだわること、などが挙げられる。

19.2 現在時制、及び進行相・完了相

SAJPCJP では、「私は座っている」と言ったとき、「まさに座ろうとしているときの動作」ではなく、「座った状態にある」ことを意味する。明確に動作を表す V（走っている、食べている、など）では、「～ている」は進行を表すが、「座っている」では完了の継続を表し、辞書的には「存続」なる用語が当てられる。進行を表すには、「座ろうとしている最中である」などと言わねばならない。

しかし、こういった特徴は、英語・欧米語の時間感覚が輸入された明治時代以降にのみ見られるものである。本来、日本語は、過去から未来に至る直線的な時間認識を持たず、進行と完了とを優先的に区別する言語である。

現在でも西日本ではその残影が見られ、「座つとる」は完了・状態、「座りよおる」は進行・継続を表す。これは、「座り・て・居る」と「座り・居る」、すなわち Con-JPa 「て」の有無の違いによる。

岡山・広島では現在でも、南部の都市部であってもこれらを区別するほか、山陰や四国・

九州・北陸・東北の過疎地域でもこれらを区別している。

古語の「り」「たり」は、完了と進行を表すと言ってもよいが、厳密には「むらさきだちたる雲の細くたなびきたる」のように、まさに存続という概念がふさわしい。それだけ日本人の行動様式には、瞬時に大きな動きをするような「進行形」的な行為がなかったということになるだろうが、進行・存続・継続・完了といった概念は、元より人間も含めた自然現象（風雨・雪月花・男女関係の有りようなど）を写し取ったものであったと ISReJP は考える。

そうしたところに、漢文明を輸入したために、外界に急変を加える進行的な行為と穏やかに存続している状態とを区別する必要に迫られた。そのために、「座つとる」と「座りよおる」が生じ、それがしばらく続いたのであるが、さらに SAE 文明が流入し、As よりも Te を優先する SAE 文法の影響を最も強く受けた東京語が全国語となるにつれて、「座っている」の単一表現となった。

これこそ、現代フランス語 SA(FR)や現代ドイツ語 SA(GE)や現代イタリア語 SA(IT)や現代スペイン語 SA(SP)が PRS と PROG とをあまり区別しないのと同じ現象である。SA(EN)の「be ~ing」など、SAE の PROG は、そのさらにあとの時期、ISReJP の SHU-L の時期（SAE 圏では紀元 500 年前後）に生じた文法変化である。

日本語の「座つとる」と「座りよおる」の区別は、KATSU-L 時代までの特徴であって、「座っている」に一本化されたとき、日本語の時空観は SHU1-L に達したと言える。従って、SAJPCJP の「私は走っている」と「I'm running」とは、全く異なる時空観に基づいた表現である。日本語の PROG と英語の PROG が全く異なる時空観に基づいていることは、その成りたちを見れば判明する。

朝鮮語は、今でも半島全体を通じて PERF と PROG とを優先的に区別する言語である。これらの使い方は、先の西日本方言などに残る進行と完了の区別の仕方と同様の現象である。

中国語も PERF と PROG とを区別する言語である。進行は「在、正、正在」など、完了は「着」などで示される。朝鮮語も中国語も、SAE における PROG と PERF の区別とは異なる時空観に基づいている言語である。

一方で興味深い現象もあり、日本語は、SAE 圏文明の影響を受けやすい都市部から順にその文法も SAE 化していくのに対し、SAE 文明圏では反対に、農村部から順に、一SAE 的な特徴に後退する例が見受けられる。

例えば、SA(GE)においては、厳格な Te・As・Mo の区別を廃して、再び PROG と PERF とを KATSU-L 段階程度に区別しようとする動きが見られ、ラインラント地方にその傾向が大きいことから、ラインラント進行形(Rheinische Verlaufsform)なる表現が生じた。PROG を「sein+am または beim+Ger」とするもので、「私は読んでいる」の意味で"ich bin am Lesen"、"ich bin beim Lesen"などと表現する。

これは何よりも、SA(EN)のように直線的な時間認識の結果生じた PROG ではなく、む

しろ俗語的・反 SAECW 的な表現に前戻っている点で興味深いものである。

簡単ではあるが、PERF と PROG とを優先的に区別するということが、本来は KATSU-L 時代までの特徴であり、SA(EN)やその周辺の SAECW の PERF と PROG の区別が異なる段階（優先された Te 内での As の区別の段階）を進んでいるものであることは示されたであろうが、PERF と PROG の区別に優先的に重点があるのならば、その行為の主体の格標識にも区別があるはずである。

さらに、KATSU-L とは、主体の状態・存続については、未だ自然の成すことと認識され、主体が人間であつても格標識が付かない言語段階なのであるから、「私、座つとる」と、「私が座りよおる」及び「私が扉を作りよおる」との区別に該当する区別を持つ言語が、KATSU-L ということになる。

そして、そのような言語が現在でも存在するという例を挙げておこう。

wa-t' i (私は住む)

ma-sica (私は悪い)

ma-ya-k' te (私はあなたを殺す)

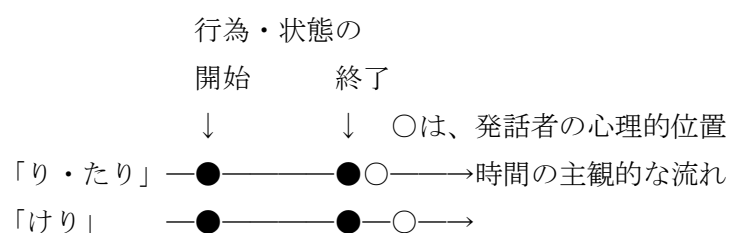
これは、スー語族に属するダコタ語の例である。自己を表す「wa」と「ma」に注目すると、他者に影響を与えない状態であるはずの「住む」と「悪い」とで、主体の格標識が変わっていることが分かる。

19.3 過去時制

かつての日本人の時間認識についてしばしば議論に上るものに、「き」と「けり」の違いがある。

「き」は経験過去で「けり」は伝聞過去であるとの説、または事実過去（過去の事実）と発見過去（あとからそうと気づいた過去）であるとの説、完了過去と存続過去であるとの説など、SAE 圏言語学の Te・As・Mo が複雑に混ざり合った多くの説が出されているが、その正誤を判定することは大変に困難な状況にある。

しかし、ISReJP が MD・SD 者に対して行った検証実験に基づいて作成した言語変遷過程表に従えば、整然と説明されうると考える。→別添資料(8)



「き」 —●—●—○→

「り」「たり」は一般に完了・存続と見なされているが、「き」「けり」の議論に重ね合わせて、これら三者は「行為・状態の完了した時点と発話者の現時点との主観的時空間的距離感」の差異と見なすことができる。

そうすれば、「り」「たり」は、必然的に存続・完了に多用され、「けり」は現在と心理的に密接に関係している過去として多用され、「き」はそれよりもさらに心理的に遠方の単純過去として多用される、という説明が可能になる。

現在では、「き」「けり」を **Te** の問題、「り」「たり」を **As** の問題と称して **SAE** の時空間認識に当てはめているから、説明が付かないのであって、**Te** と **As** とを未分化のものとする観点が必要であろう。

もっとも、**SAJPCJP** の **PST** 「た」は「たり」の変化したものであり、このように **PERF** の接辞が **PST** の接辞に転化していく傾向は **SAE** にも見られるとの見解があるが²⁰、完了・存続の「たり」が **PST** の「た」になった変化と同じ変化は、**PIE** においては紀元前の有史以前に終了した可能性がある。

日本語の **PST** 「た」の誕生とそれに伴う **Te** と **As** と **Mo** の分裂、**SAJPCJP** 性の確立は、**LF(IE)** 圏においては、**PIE**、少し遅く見てもラテン語やサンスクリットの成立の時期に当たる。**PIE** の、ゲルマン語やラテン語やインド・イラン語への分裂は全て、**Te・As・Mo** の分裂のもとに起こったものであるから、それらの言語に **Te・As・Mo** の分析をほぼ難なく適用することが可能なのは当然のことで、一種のトートロジーである。

もっとも、**LF(IE)** の仲間であるサンスクリットは、言語それ自体としては厳格な **Te・As・Mo** の時空構造を持っていながら、相対論的時空観を持つ仏教を記述した言語である。つまり、**Te・As・Mo** といった概念を全く放棄した空的世界認識「涅槃」を、**Te・As・Mo** といった概念を持つサンスクリットで記述することに、仏教者たちは成功している。これについては時期を改めて論じる。

現在の **LF(IE)** で、**Te** と **As** と **Mo** とが必ずしも独立的でないように見えるのは、我々が **Ga(SHU4)** によって **SHU4-L** にほど近い **SHU5-L** としての **LF(IE)** を見るからなのであって、「現在の結果や状態をもたらした行為は必ず過去に始まったことであるから、**Te** と **As** と **Mo** はお互いに密接に関係している」というのみである。

例えば、**SA(FR)** では、**PRS-PERF** が **PST** として日常的に使われ始め、単純過去は歴史的事実、普遍的事実などに限定されるようになったが、これはむしろ、**PST・PRS・FUT** を厳格に区別するようになって実生活にそぐわなくなってきたため、再び **PST** における **PERF** と **PROG** とを区別する方法を獲得しようとして生じた変化である。

これを、江戸日本語から明治日本語に至る、「たり」から「た」への変化と同等に扱うことはできない。もっとも、**SAJPCJP** も、「書く」と「書いた」、「走る」と「走った」を、

²⁰ 松本克己 (2006) 『世界言語への視座 歴史言語学と言語類型論』 三省堂

概ね PRS と PST として使い分けている点では、時間を「過去から未来へと直線的に流れるもの」と見なす NOM-L になったと言える。

19.4 未来時制

SAJPCJP で未来を表す表現は、「う」「よう」である。これらは、推量と意志のどちらにも使える。例えば、「書くだろう」は推量を表すが、断定の「だろ」を省いて、「書こう」とすると途端に意志的な表現となる。一方で、「あり得るだろう」とすると推量だが、「あり得よう」も同じ推量として使える。

このような一部の例を除き、Umt(SAJPCJP)の世界認識では、推量と意志とは互いにはば独立していて、主に前者は「だろう」、後者は「う・よう」で表される。

江戸時代中期頃までの日本人は、推量と意志との区別を認識しておらず、どちらも「む」で表し、区別しようという意識も見られない。

意志的に行う行為と非意志的な行為とが区別されるようになった時期とは、ISReJP の I-L の時期である。すなわち、NO-L の時代では、「笑う」「泣く」といった行為も、「転ぶ」「落ちる」などと同様に、未だ「自然現象」としてしか認識されていなかったが、それらが区別されるようになったのが I-L の時代である。

こういった分化は、LF(IE)では PIE の段階で起こったが、我が国では江戸時代に入ってもしくは「む」が推量と意志の両方を表していた。

ここで再び、SA(EN)の「will」と「shall」も未来と意志とを表すではないかとの見解があろうが、これも先の過去の説明と同様である。「will」と「shall」が表すのは、推量ではなく、直線的時間軸上の FUT である。古英語の時点で、神学者や言語学者らによって Te・As・Mo は分化した概念と分析されており、「will」は意志、「shall」(聖書に多用)は義務を表すというような役割分担もあった。これらがのちに FUT の意味を表すようになったのが、SA(EN)の「will」と「shall」である。

§ 20 証拠性と蓋然性の連続体性

一NOM-Lの今一つの特徴は、証拠性がNやVではなく接辞（日本語のJPaやJPaV）で表現されることである。

証拠性とは、Pにおける証拠の種類を表す概念であり、SAJPCJPでは「(だ) そうだ (伝聞)」「(し) そうだ (様態)」「ようだ (不確定断定)」「らしい (推定)」などがそれに当たる。日本語ではこのように、証拠性は基本的にJPaVで示される。

これらの多くは、NとVの区別もないSHO-LからSHIKI-LにかけてNやVといった区別がぼんやりと現れる中で、その中間的な品詞として生じた品詞（今のJPaV）に端を発すると見ることができる。

例えば、「石、落（おつ・おち）」という単語の羅列があったとして、それがSHIKI-L以降の時代に「石、落ちた」となる。このような生活の中で、時に「石、落ちた、ようだ」といった或る種の表現があり、これがJPaからもVからも区別されてJPaVという概念に至ったと考えられる。

漢語由来の「よう（様）だ」などは、中世に生じた語であるが、生じ方の原理は同様であった可能性がある。

一方、SA(EN)においては、証拠性表現は実に乏しい。証拠性をどうしても表現しようとするならば、「look、seem、sound、feel」といった感覚動詞を用いる以外にないことは周知の通りである。あるいは、大勢の人は認めるだろうという意味で仮想の大衆を想定して「They say～」と表現したり、「今にも～しそうだ」を「on the verge of doing」（～することの直前に位置している）と表現したりする。

このように、SAECWでは、証拠性はNやVの分析的な組み合わせによる表現となっている。SAJPCJPの「雨が降りそうだ」に該当する表現はなく、「この直後に雨が降る様子が現在観察される」、「雨が降るということの直前に我々は位置している」といった表現に該当する表現しかない。

証拠性と混同しやすい概念として、蓋然性がある。これは、Pの可能性を示すもので、「だろう」「かもしれない」「にちがいない」などに当たる。これらについては、SA(EN)でも「would」「might」「must」などのJPaVで表現される。

ところが、SAJPCJP、特に前近代日本語では、そもそも証拠性と蓋然性との区別がない。それらは全て、「む」「むず」「まし」「き」「けり」「つ」「ぬ」「たり」「り」「けむ」「べし」「らむ」「らし」「めり」などの使い分けで、連続的に認識されるものである。

なぜSAEで証拠性と蓋然性が区別されるに至ったかと考えるに、時間認識の仕方が先述のように直線的であるからに他ならないだろう。証拠性は、現時点でどのくらいのことを見聞きして知っているかということからPSTと関係し、蓋然性は、これから起こることがどのくらい確実かということからFUTに関係する。

「すでに客観的に実在する事態・現象・物体を主体がどのくらい知っているか」を表すの

が証拠性であり、「客観的に予測可能であるはずの未来が、現時点での文明技術の発展によって主体にどのくらい予測されているか」を表すのが蓋然性である。

そうであるから、SAE の文法は、事態を観測する主体の实在・非实在にかかわらず、常に事態の实在性と超越的理念（一神教的イデア・普遍言語イデア(IUL)）の正当性が揺るがないという前提に立っており、あるいはそのために言語の統語論というものが構築されている。

しかし、かつての日本語では、過去か未来かに関係なく、事態の判断は主観的・相対的であり、主体との心理的・時空的な距離感がそのまま事態の確実さになる。そうであるから、例えば、推量と意志とが混ざった心境を表す「む」が、自らが昔に経験したり伝聞したりしたことに向けて使われれば、「け・む」となる。この「けむ」には、すでに「過去推量」なる辞書的用語が与えられて普及している。

もっとも、SA(EN)でも、接続法(いわゆる仮定法)では、未来を表すにも「would」「should」などの過去形を使うのではないかという見解もありうる。確かに、SAECW の Te を意味する「tense」は、元々「緊張」の意味であり、現時点の主体の位置との心理的距離を表しているように見える。

そうすれば、仮定法の「If you would～」は、実現の可能性が低くとも仕方がないという相手との距離感を反映しているとの見方が可能となるし、「would you～」が「will you～」よりも丁寧なのは、相手と距離を置いているからだという説明が可能となる。

しかし、それは、Umt(SAECW)自身が主張する Te・As・Mo の概念の独立性を揺るがす力を持ちえないかもしれない。

SAECW の述べる Te とは、今なお時計の刻む等速的な絶対時間に基づく過去・現在・未来であるし、As とは、そのような時間認識に乗った完了と進行であり、Mo もまた、そういった時間認識の中で、実在するかどうかを本当は確認できない客観的事態・超越的理念に対して或る一定の時間をかけてはたらきかけた（はたらきかけるであろう）自己自身 Ga(NOM-L)に対する自己の既知度や満足度を表すのだろう。

§ 21 真格と動詞の関係

ここでは、SHIN(ZEN~KATSU-SHU1)と V の使い方を模式的に示す。「切る」という SAJPCJP の V と、それが表す意味について考えてみたい。

21.1 自ら木の枝を切った場合

「私は木の枝を切った」=SAP(SAJPCJP)の日本語 (TOP、TAI4、Vt、AV)

↓

SAP(SAJPCJP)には、「私」は Ga(SHU4)・自己の身体の範囲内に一致している。

↓

ある MD・SD 者には、「私」は Ga(SHU4)ではなく、Ga(ZEN)から Ga(KATSU-SHU)の連続体のいずれかと自覚されている。木の枝を切る行為は、道具を使って自然界に影響を与える行為で、このような行為がようやく自覚される DD 者にとっては Ga(GU)が最もふさわしかろう。

↓

「わぐるは木の枝切りるた」(具我心描言=GU・b、ZETTAI、具動詞終止形心描言=Vgu・b)

21.2 自ら爪を切った場合

「私は爪を切った」=SAP(SAJPCJP)の日本語 (TOP、TAI4、Vt、AV)

↓

ある MD・SD 者には、「私」は Ga(SHU4)ではなく、Ga(ZEN)から Ga(KATSU-SHU1)の連続体のいずれかと自覚されている。このままでは、誰が私の爪を切ったかが分からない。

↓

分からないという事態をそのまま記述して相手に伝達することを許すのが ISReJP である。

↓

「わきくは爪切りるた」(希我心描言=KI・b、ZETTAI、希動詞終止形心描言=Vki・b)

このように、Ga が希我 Ga(KI)のときは KI を用いる。Ga(KI)は、自身に利益が生じるようなときに意識される「我」である。例えば、貨幣による交易が開始された頃の時代と社会においては、これと全く同じ文法の言語が行われていた。インドネシア語・マレー語などは、現在でもその文法を残す稀有な言語である。

Saya membaca buku itu. (私、その本を読む。)

Buku itu saya baca. (その本、私は読む。)

この二文について、多くの言語学者は、どちらが NOM か ERG か、AV か PV かを議論しているが、NO または I による Se(AV)と Se(CHU)であろうと見なすのが、ISReJP の言語観である。

21.3 美容室で髪を切ってもらった場合

「私は髪を切った」=SAP(SAJPCJP)の日本語 (TOP、TAI4、Vt、MC)

↓

実際に頭の中で起こっている把握

「私は髪を切られた」(NOM、ACC、Vt、PV)

「私は髪を切ってもらった」(NOM、ACC、Vt、「もらい」構文)

↓

SAP(SAJPCJP)では、文法（古形を維持）と世界認識（ほとんど SAE 的）とが未だ乖離している。

↓

ある MD・SD 者は、「私、髪を切った」の行為者を「私、爪を切った」と同じく「私」とも「他人」ともとらえ、美容師という他我の存在を理解できず、「あなたが誰の髪を切ったの？」などと聞き返す傾向を示す。

↓

ISReJP では、世界認識が SAE 的で文法は古風な MC に代わって、世界認識を文法に一致させる「中我態」=CHU の概念を設け、MD・SD 者らに対して自我と他我の区別を要求しない。

「私は髪を切った」、「私は髪を切られた」、「私は髪を切ってもらった」は、例えば KI を使えば、全て「わきくは髪切りるた」に統一される。

この場合の「わきくは」は、Ga(SHUn)・自己の身体範囲とは無関係に自覚される、利益を感じる「自己意識」である。

↓

稀に、重度の MD・SD 者は、「私は爪を切った」も「私は木の枝を切った」も、「爪を切られた」や「木の枝を切られた」と解釈する場合があり、このとき、前者は「他人に切ってもらった」、後者は「自分に属する（自己が及んでいる）木の枝が切られて、痛い」と知覚・認識される。このような場合、ISReJP では、21 の 1～3 の文法上の区別がないだけで

なく、知覚・認識世界上の区別がないことを表明できることになる。

21.4 手紙の封を切った場合

「私は手紙の封を切った」=SAP(SAJPCJP)の日本語 (TOP、TAI4、Vt、AV)

↓

先の「木の枝」とは違って「手紙」という人工物であること、ここでのV「切る」は高度に比喩的で、ほとんど「開ける」の意味であることなどから、重度のMD・SD者らにとっては概念把握が難しい。

↓

このような場合は、KU から KATSU-SHU1 までを自由に使い分けられる。

「わぐるは手紙が封切りるた」(GU-b、ZETTAI、Vgu-b)

「初めてハサミという道具か自分の手を使って手紙を開けることができた」など、喜びに浸っている際の用法である。

「わいかつは手紙の封切りろた」(I-KATSU、ZETTAI、Vi-katsu-km)

「切る（開ける）ことは本当は少し苦しいのだけれど、切ろうという意志を持って切り、外界を改変した」という用法である。心描・抽化・抽出言の使い分けは自由である。

21.5 人との縁を切った場合

「私はAさんと縁を切った」=SAP(SAJPCJP)の日本語 (TOP、TAI4、Vt、AV)

↓

「切る」対象が目に見えない抽象概念であり、重度のMD・SD者には極めて理解困難である。

↓

「わくうしっきはAさん、縁、切りらた」(KU-SHIKI-ki、ZETTAI0-1、Vku-shiki-sm)

重度のMD・SD者は、この構文を使うことで、「自分には理解が難しい概念である」ことをSAP(SAJPCJP)に対して表明・主張することができる。

↓

「と」を入れてもよい。(日本人は、幼少期には「の」「が」の使い分けが曖昧だが、「も」「と」など、一部のC-JPaは幼少期においても「誤り」が少ないため。)

「わくうしっきはAさんと縁、切りらた」

↓

「切りらた」を「切った」とする場合、普通の SAJPCJP を使えているように SAP(SAJPCJP) に錯覚されないようにするため、ISReJP では「わくうしっき」などの Ga の宣言（我燈宣言）は必須である。

↓

ここで、次の二文を見てみる。

「私が A さんと縁を切る」(SHU4)

「私は A さんと縁を切る」(TOP)

SAJPCJP には、前者「が」のほうが「私こそが」との強調形と感じられるが、一部の重度の MD・SD 者には、どちらも TOP「は」のニュアンスと感じられており、使い分けてもほとんど意味がない。一部の重度の MD・SD 者は、「が」と「は」のどちらかを入れるよう要求する、学校文法に依拠した出題を理解できない。

換言すれば、SAP(SAJPCJP)にとっては、「が」のほうはほとんど英語の「I」である。ISReJP では、この区別は主我文 Se(SHUn)で行われればそれでよく、その他の構文では区別を問われない。

21.6 英語における文法ミス

以上の例文を、英語に翻訳する。

Umt{SA(EN)}及び Umt(SAJPCJP)の SA(EN)

I cut branches. (SHU5、ACC、Vt、AV) 「私は木の枝を切った」

I cut my nails. (SHU5、ACC、Vt、AV) 「私は爪を切った」

My hair was cut. (SHU5、Vt、PV) 「私は髪を切った」

I had my hair cut. (SHU5、ACC、Vt、AV) 「私は髪を切った」

I opened the letter. (SHU5、ACC、Vt、AV) 「私は手紙の封を切った」

I broke off relations with A. (SHU5、ACC、Vt、AV) 「私は A さんと縁を切った」

重度の MD・SD 者・SA(EN)圏の幼児に見られる文法ミスを挙げておく。

「私は髪を切った」

I cut my hair. (MC のつもり)

I was cut my hair. (PV のつもり)

I cut I hair. My cut me hair. Mine cut I hair. (PN の自由な変更)

My hair cut I. I my hair cut. (語順の自由な変更)

I cut me hair. My hair cut.

(AV と PV の区別なし=MC のつもり=語順の自由な変更。全て同義)

I am my hair was cut. （「髪を切られた状態に今ある」と腐心して言ったつもり）

ISReJP は、これらの文法ミスで文法ミスとせず、許容する構文を基本構文として持つ。

§ 22 自己意識の流動性

さらに新たな例文を考えてみたい。

- (1)「私はあなたを好く」(動的)
- (2)「私はあなたを好きだ」(静的)
- (3)「私はあなたが好く」(動的)
- (4)「私はあなたが好きだ」(静的)

SAP(SAJPCJP)は、(3)のみを不自然とし、(1)、(2)、(4)は文法的に自然で正しいと判断する変則的な感覚を有する。いずれは英語の対格の概念をもっぱら「を」が担い、(3)と(4)が消滅して、(1)と(2)のみが生き残るだろう。

しかし、重度の MD・SD 者は、(1)から(4)の全てを「自然で対等の表現」とであると判断する場合がある。

ここには留意すべき点が二点ある。幼児期には、「動的現象 (V など) と静的現象 (Adj や一部の Adv など) との間に区別がないこと」と、「格 (日本語では「が」や「を」といった JPa) どうしの区別がないこと」である。

ISReJP においてこれを見してみる。まず、項 Arg の要素のうち、一般的な意味での「格」に当たるものを取り去ってみる。

「私、あなた、好く (好きだ)」

(以下、当節における「格」とは ISReJP における「格 (格詞)」=KA である。)

ある Umt(ISReJP)の女性の例に従う。

「特定の人を好きになる」のは、「一定の主体性を持った自らが希求・願望して成し得る感情」で、彼女はこのような Ga をちょうど理解し始めている段階であったから、「わ」に KI 「き」を付けて「わき」とした。

確かに、「特定の人を特異点として好きになる」感情は、不特定多数の異性を性的対象とした (いわば全ての異性を好きであった) 原始人や、異性をあまり意識しない幼児期に起こることではないから、何とか日常生活のできている DD 者女性の場合、ISReJP における KU・SHIKI・GU・KYU あたりの格をここでの「わ」には付けない女性が多いだろう。

「わき、あなた、好く (好きだ)」

Ga が KI の「わき」(希我) =Ga(KI)として自己自身に認識されるとき、「好かれる人」に当たる「あなた」が ACC として認識されていないことは、これまでに示した通りである。

ここでは、「あなた」は ZETTAI なのであるから、標識は何も付けない。

「わき」の語で表された Ga は、西洋的な「自我」「個人」を意味しない。ISReJP における「わ」は、人称 PN ではあり得ない。

かろうじて人称 PN に近いはたらきをしているように見えるのは、I-L か KATSU-L の段階以降である。例えば、「社会通念」「契約」「貨幣価値」「駆け引き」などの近代的概念は理解できない適応障害を持つけれども「特定の異性を好きになる」感情は持っている PDD 者が、「わき、あなた、好き」と言った場合、すでにそれらの複雑な不安感と陶酔感とをこの一文が内包しており、SAP(SAJPCJP)の「私はあなたを好く」との差別化を図ることができる。

また、Ga(KI)の「わき」においては、「好く」という動作は確固たる「主我（自我）」=Ga(SHUn)の存立無しに起こる。Ga(KI)にとっては、次の(A-1)と(B-1)、(A-2)と(B-2)の対比よりも、むしろ(A-1)と(A-2)、(B-1)と(B-2)の対比こそ重要である。

(A-1)「わき、あなた、好くく」

(A-2)「わき、あなた、好くき」

(B-1)「わき、あなた、好きく」

(B-2)「わき、あなた、好きき」

ここで、P を「私があなたを抱きしめる」に変えると、どうなるであろうか。「抱きしめる」行為は、好き嫌いに関係なく可能な行為、あるいは意志があれば相手の承諾無しに実行しうる行為である。ここでは、NO と I を付けてみる。

「わのう、あなた、抱きしめるり」

「わい、あなたを抱きしめるら」

ISReJP では、「好く」「抱きしめる」といった P の指す概念が、ヒトの進化史上のどの段階で我々に認識されたか、ヒトの幼児はそれらをどのように認識して成長していくかを重視する。さらに、それを逆手に取って、原始退行・幼児退行を許容する。

ISReJP では、「V」という概念も、Ga(KU)から Ga(SHUn)に近づくにつれて、より独立的要素として認識されていく概念であるというにすぎない。従って、Ga(KI)が認識する V は Ga(NO)や Ga(I)が認識する V よりも「動静一体的」である。

Ga(ZEN)においては、N・V・Adj といった区別は完全に失われ、「私」「あなた」「好きであること（抱きしめること）」の三者は、具体的な生命体と抽象概念、実在と非実在の区別をも越えて、「色即是空」の「色」として取り出した概念にすぎない。これらの薄々とした区別は、Ga(SHIKI)において初めて表れる。

「わっしか、あなた、好くく」(SHIKI-sm、Vshiki-b)

これは、次のような翻訳となる。

「私は今、識我しか自覚し得ないほどの解離的状态にあつて、とても苦しいのだけれど、あなたを好きでいることはとても楽で嬉しい」

ISReJP においては、例えば動作主に KI を用いた場合、「want (欲する・望む・願う)」に当たる概念が、すでに格に含有され得る。なぜならば、「want」は、「can (できる)」ことや、「will・shall (意図する)」ことよりも先立って人間に自覚される精神作用だからである。

このように、SAE では、KU から SHUn に至るまでの ISReJP の「格」概念についての述語的記述 (P の記述) は、全く別の品詞 (V や JPaV) と文法範疇 (Te・As・Mo・Vo など) で表される。

ISReJP は、SAE における Te・As・Mo・Vo の概念を一旦解体して、代わりに「SAE 的自我」の芽生えの通時的過程をそのまま文法にし、なおかつ「SAE 的自我」の成立を使用者に要求しない。

§ 23 自己意識の話題格性

ISReJP の文法が、「我々人類の外界認識はそれを“観測”する際の我々の知覚が左右しているという視点」、すなわち「あらゆる自然的・人為的現象を相対化する視点」に立脚していることを、有名な TOP「は」によって説明する。ISReJP1～3 では「パ (pa)」または「ファ (ϕa)」と発音することがあったが、ISReJP4 ではほぼ「ワ (wa)」となっている。「私は男だ」の「は」が NOM-S でないことは、しばしば「象は鼻が長い」を例に説明される。日本語では主に、「は」が TOP、「が」が NOM を表してきたとされる。

しかし、ISReJP では、「象は鼻が長い」の「は」と「が」が TOP と NOM であるか、そうでないか、あるいはどちらも同じはたらきをしているか、といったことは、この文を発した話者の Ga のあり方によって変化する。

まず、ISReJP の Ga(SHUn)においては SAJPCJP と同じ構文を取り、むしろ「象は」が文全体の「場」として「鼻が長い」を包み込んでいます。

「象は鼻が長い」

一方、Ga(KU)から Ga(SHIKI-GU)、すなわち、重度の DD 者などが陥った「我」「私」のあり方においては、先の「私、あなた、好く」の三単語を用いる際、各項の格は基本的には無標で、そのまま「私、あなた、好く」＝「わしき、あなた、好く」などとなるのであった。

ここでは、「私があなたを好く」のか「あなたが私を好く」のかということさえ不明瞭であってかまわない。「そのことが不明瞭であるこの自己」を伝達するのが ISReJP の使命である。一部の DD 者、コタール症候群者、カプグラ症候群者、性的被害者などの女性においては、自他の「我」の区別がない症状が、なお SAJPCJP によるコミュニケーションを失っていない状態に出ることがある。

「私」と「あなた」との間に「好」という関係が存することだけを、「わしき、あなた、好く」は物語る。語順も問われない。「あなた、わしき、好く」でも可である。これによって、「私には Ga(NOM-L)が理解されない」ことを表明することができる。

従って、「象は鼻が長い」をこのような構文にした場合も、「象、鼻、長い」となるのである。ここでは、「象」「鼻」「長い」のどれが P であるか、TOP であるか、といったことは認識されない。全てが P であり、TOP である。「象の長い鼻」でも「鼻の長い象」でもありうる。

さて、Ga(GU)構文になるとどうか。

「象は鼻ぐ長い」

これは確かに「正しい」ISReJP 文であるが、「鼻」に GU「ぐ」が付くのは、「長い」という状態を実行するために「鼻」が一定以上の高度な道具・手段を用いなければならない場合である。しかし、「鼻が」「長い」ことは、象にとって生得的な特徴である。従って、「象は鼻長い」とするのが普通だということになる。

一方、「象は」であるが、この「象」も「鼻が」「長い」状態を実行するために道具を使うわけではなく、「長い」ことが「象の」「鼻」の属性であるのと同様、「鼻が」「長い」ことは「象」の属性である。従って、SAJPCJP の「象は鼻が長い」は、Ga(KU)から Ga(GU)あたりの Umt(ISReJP)においては、「象、鼻、長い」となることが多いのである。

「私はあなたを好く」（「私」の自覚する感情）

「象は鼻が長い」（「私」の自覚する象についての命題）

SAJPCJP において同じ TOP「は」で表されるこれらの内容が、例えば、Ga(KI)段階の Umt(ISReJP)ではこのようになりうる。

「わき、あなた、好くき」

「わき、象、鼻、長い（＋う・お・い・あ・え）」

なぜならば、ISReJP の文法は、SAJPCJP の TpL 性を以下のようにとらえ直すことによって成り立っているからである。→別添資料(9)参照

「私はあなたを好く」（私においては、あなたを好く。）

「（私は）象は鼻が長い」（私の認識能力の範囲内においては、象という動物においては鼻が長い。）

すなわち、ISReJP では、「象は鼻が長い」ことが客観的事実であるという前提に代えて、「私」の世界認識能力の属性と見るのである。ISReJP では、「象は鼻が長い」という SAJPCJP 文を、Ga(TOP)としての「私は」を省略したものと見なすのである。

「象は鼻が長い」、「鼻は象で長い」、「長いのは象の鼻」などは、ISReJP の Ga(Pre-GU-L)では、「わ、象、鼻、長い」とすることも許される。「象は鼻が長いこと」のほうが流動的であると見なされ、むしろ、重度の DD 者らの Ga(KU)をヒトの Ga として普遍視している。Ga(NOM)を客観的・普遍的実在と見なし、Ga(Pre-NOM)を言語知能遅滞と見なす SAECW・SAJPCJP 的文法観とは対照的であると言える。

このように見てくると、SAJPCJP の「は」は、SAECW のような厳格な NOM-S を有する言語に比べれば古形を保っているようでありながら、実は「は」が TOP で「が」が NOM であるとの解釈は、その解釈を下している多くの SAP(SAJPCJP)の NOM-L 的な世界認識

そのものが MD・SD 者らの Ga を取りこぼして成立しているおそれがあることが分かる。

すなわち、「は」と「が」がどちらも TOP 的に認識されているという自覚から逃れられない MD・SD 者らの世界認識を想定していないと考えられる。

ISReJP では、「は」は、SHIN に対して特権的ではなく、むしろ SHIN も TOP 的なふるまいをする。KU-L や SHIKI-L においては、TOP と SHIN との区別がほぼ消失して無標となり、N や P の羅列文となる。

このことの根底には、「あらゆる文の行われる“場”は“私自身の意識世界”である」との ISReJP の東洋的世界観がある。これは、かつての井筒俊彦の「言語アラヤ識」の構想²¹にも矛盾しないであろう。

Ga(KU)の段階では、「場」である「わ」は、ほぼ「自然界」に一体化している。NO-L や I-L の段階になって、ようやく TOP「は」と、NO「のう」や I「い」との間に、明確な差が現れるのである。

²¹ 井筒俊彦 (1983)『意識と本質』 岩波書店

§ 24 上古代日本語等の再解釈

ここでは、古語の「係り結び」やタガログ語のマーカーによる「フィリピン型格配列」についての ISReJP における再解釈について述べる。

ISReJP の格の使い分けは、SAP(SAJPCJP)からすれば、むしろ高度で複雑・難解なことに映り、とても PDD・MD・SD 者がおこなうこととは思えないかもしれないが、このような使い分けは、上古代日本人にとってもごく自然であったと思われる。

特に一部の重度の DD 者女性は、P の意味によって主体がとる格をほとんど本能的に変化させる。自己意識が ISReJP の Ga(GU)の段階にある、重度の SD を抱える或る男性の場合も、次の例文では、「私は絵を描く」の「は」のみを自然で適切であり、他の文の「は」と全ての「が」「を」を不自然で不要であると感じる。

私は背が低い。

ウサギは耳が長い。

私は絵を描く。

ウサギはカゴを壊す。

換言すれば、「絵を描く」という、自己自身による対自然界的な行為にのみ「は」なる標識が必要だと感じる。「描く」「壊す」という概念理解を失っていない状態でこのことが起こる。全ての Se(SAJPCJP)について日常的かつ無意識的にこのような判断を繰り返して生きているのが、重度の PDD・MD・SD 者であると思われる。

Ga(GU)の段階にいる者の世界認識は、ISReJP で以下のように記述される。「色鉛筆などの道具を使った自己」にのみ GU が付される。述語動詞 P-V に言(げん)を付してもよい。SAP(SAJPCJP)なら、全ての「私」「ウサギ」に「が(は)」を付けるところである。

わ、背、低い。

ウサギ、耳、長い。

わぐ(は) 絵、描く。

ウサギ、カゴ、壊す。

ISReJP では、特に GU や KYU までの段階を自己の基盤とする者の場合、主体が「わ」「あなた」「彼」などの人間でない限り、主体にはほとんどの場合は「格」が付かない。ただし、動物には付くことがあるが、「人間である自己」と「周囲の動物」とに区別が自覚されない重度の PDD・MD・SD 者たちほど、全ての Arg が無標(KU や SHIKI)である傾向が強いことになる。

これこそが、一般の ERG-L において分裂能格性(ISReJP では SepERG)と呼ばれる現

象である。「分裂している」との感覚は Umt(NOM-L)による解釈であって、これによれば、「わ」は NOM 主体、「ウサギ」は ERG 主体であると説明されるところが、ISReJP では、この話者は Ga(SHIN)-Con のどこかに位置しているという分析になる。

日本の古語でも同じことが起こってきた。日本語の格について、日本語学上で実証的に判明していることと、重度の PDD・MD・SD 者や日本の幼児の言語認識様態に基づく ISReJP との両方を統合した結果を、いくつか挙げてみたい。

(1) 上古代では、S と O は基本的に無標であり、時代が下るにつれて、一人称（我、余、私）から順に「の」「ぞ」「が」などが付いていく。二人称、人間全体、動物、植物、物体と順に広がっていき、最後に「会議が」「契約が」などの抽象概念の NOM-S 化が明治以降及び終戦後に起こる。

(2) 上古代では、「の」(GEN)と「が」(NOM)の区別が曖昧であり、さらに、有史以前の日本語では、それらは INS(GU)とも区別が無かった可能性がある。ISReJP の視点で言いかえると、上古代日本語では、「の」と「が」は、GEN でも NOM でもなかった。また、それよりも前では GU とも区別がなく、GU なる概念自体の自覚もなかった。

(3) その証左として、ISReJP の GU ないし KYU と全く同じ標識らしきものが上古代日本語にも見られる。次の「い」は、のちの「の」「ぞ」「が」よりも古くから日本語にあったものだと考えられる。

これは、NOM-S だと解釈されるのが一般的であるが、ISReJP で言う GU や KYU であると解釈すべきものではないか。すなわち、「天仰ぎ叫びおらび地に伏し牙噛み猛びて」「乱れ来む」「守れ」といった、強く自己意識を自覚させる行動が、話者（詠者）の心に（のちに SHU_n に発展してゆく）この格標識「い」を付けさせたと見るべきではないか。

打ち嘆き妹がゆければ茅渟壮士その夜夢に見取り続き追ひ行きければ後れたる菟原壮士
「い」天仰ぎ叫びおらび地に伏し牙噛み猛びて（『万葉集』巻 9、1809）

うらぶれてかれにし袖をまたまかば過ぎにし恋「い」乱れ来むかも（『万葉集』巻 12、2927）

筑波嶺のをてもこのものに守部すゑ母「い」守れども魂ぞ会ひにける（『万葉集』巻 14、3393）

我等四王と及無量百千の神と并せて国土を護る諸の旧の善神と「い」遠離して去らむ時には、是等の如き無量百千の安恠悪事を生ぜむ（西本願寺本『金光明最勝王経』平安初期点）

此を持つ「い」は称を致し、捨る「い」は謗を招きつ（『続紀宣命』）

此の経を一たび読まむ「い」は菩提の心を発して（『金剛般若経』）

(4) 「の」と「が」の使い分けは、主体の意味的要因（主体性の強さ）による。これは、ISReJP

における SHIN の使い分けに一致する。

(5) 係り結びは上古代ほど発達しており、中世に衰退する。ISReJP では、日本語に見られたこの「係り結び」という現象は、話者が主体性（「我」のあり方）の強弱の程度を表明する標識である、とする。

(6) その証左として、「の」や「が」が主体に付くことさえ、P-V や P-Adj が Mo-pre 以外の場合に限られる。Mo-pre の場合、その主体には長らく何の標識も付かなかった。

これを ISReJP では、終止形述語 Mo-pre-P を持つ主体は NOM-S ではなかった（確固たる自己意識を持たなかった）と分析する。つまり、話者が自ら道具を用いたり人為的行為を意図したりした際、その自己意識の強化を表明するために、主体に「の」や「が」を付け、P も Mo-pre にするのである。

この「の」や「が」こそ ISReJP の SHIKI-GU あたりから SHUn までに当たり、Mo-pre-P こそ ISReJP の Gb、Gk、Gs である。

このように、「ぞ」「なむ」「や」「か」+Mo-att、「こそ」+Mo-con、などの「係り結び」という現象も、そもそも「話者は、自己意識を強調する場合には主体と P に何らかの目印を設ける」という普遍的規則の一環に過ぎない。

そうであるから、ISReJP の「格」(SHIN)と「言 (げん)」(Gb, Gk, Gs)とは、全て上古代日本語の「係り結び」であるとさえ言える。

これと全く同じ手法でタガログ語を見ると、「タガログ語は ERG-L (ISReJP における KI-L や NO-L) 以前の段階にある」、または、「タガログ語母語話者の Ga は、現在でも Ga(KYU)・Ga(KI)ないし Ga(NO)であって、Ga(SHUn)的な自我ではない」という分析さえできる。

なぜならば、ほとんどの日本の言語学者によって、英語の「the」に相当する、あるいは日本語の TOP の「は」に相当する、と解釈されるマーカーについて、ISReJP の試みにおいては、ang 形が ABS (ISReJP の ZETTAI)、ng 形が ERG (ISReJP の SHIN) と見なされるからである。

そして、タガログ語母語話者が、ある特定の人物や物事について、それ以外の他者や物事と比べて「好きか嫌いか」、「話者自身に必要かどうか」、「希求しているかいないか」、「その人物や物事が話者自身に心の利益・恩恵をもたらすかどうか」に非常にこだわり、これによって文法が変化するからである。例えば、

Gutom ako. 「私はお腹がすいている」(ABS)

Gusto ko noon. 「私はあれが好きだ」(ERG≡ISReJP の KI)

Ayaw ko itong pabango. 「私はこの香水が嫌いだ」(ERG≡ISReJP の KI)

Kailangan ko ng mas malaking bahay. 「私にはもっと大きな家が必要だ」 (ERG⇌ISReJP の KI)

などである。ここでの「ako」は ISReJP の「わ」、「ko」は「わき」に近いと言える。すなわち、「お腹がすいている」ことを自覚している「私」は、確固たる自己意識のことではない。

タガログ語は現在でも、「文明の発展によって、ようやく自己と他者との関係が損得感情に左右され始めた時代の言語に見られた文法」を保っていると言える。

これと同じ内容の日本語文を、Ga(KI)段階にいると思われる日本の重度の DD 者に見せたところ、タガログ語に類似した文法を最も「自然に感じる」と答えた。

「私、お腹、すいている」

「私は（私の、私で、私が・・・など）あれ、好きだ」

「私は（私の、私で、私が・・・など）この香水、嫌いだ」

「私は（私の、私で、私が・・・など）もっと大きな家、必要だ」

このような「自己」しか自覚されていない段階に「少女返り」したこの DD 女性は、ISReJP においては、この「は（の、で、が・・・）」などの箇所「き」を入れて「わき」とすることを許されるのである。

§ 25 地方方言との類似性

ISReJP と類似した文法を持つ方言を日本国内で見出すことは、ほとんど不可能な時代となった。しかし、かろうじて ISReJP 的な文法が地方の老齢者の方言の中に残存している場合がある。ここではその例を一つ挙げて、精査してみたい。

茨城県常総市の南西部に、水海道（旧水海道市）という地域がある。ここでは、老齢者の間で古形日本語の面影を残す方言「水海道方言」が話されていることが知られる。

PDD・MD・SD 者らの格の使い分けがこの水海道方言に類似することを以下に示す。すなわち、これらの社会的少数者が、水海道のように日本古来の言語・方言が比較的后世まで保持された地域では、長らく「言語障害者」(SD)ではあり得なかった可能性を指摘したい。

さらに、ISReJP と水海道方言の格体系全般が同様に類似することを示す。水海道方言の専門の研究者も何人か現れている。ISReJP においても、「ERG」「NOM」「ACC」といった用語の従来の言語学上での定義を免れ、さらにはこれを一旦解体し、水海道方言が ISReJP によっていっそう整然と説明できる可能性を示す。

【SAP(SAJPCJP)にとって自然な SAJPCJP 文】

(必要性・能力を表す主体は DAT-S 「には」 のほうが自然とを感じる。)

犬（に） 触るな。

本（に） 触るな。

私（には・は）それがいない。

私（には・は）無理だな。

私（は）寒い。

私（は）若い。

私（は）年寄りだ。

【ISReJP における Ga(NO)あたりにいる重度の DD 者女性に、自由に JP_a を入れ替えてもらった文】

犬（の・に・へ・は）触るな。→「き」(KI)

本（で）触るな。→「きゅうき」(KYU-KI)

私（は）それがいない。→「のう」(NO)

私（は）無理だな。→「のう」(NO)

私（の・に・へ・は）寒い。→「き・きのう・のう」(KI~NO)

私若い。→「 ϕ 」(SHIKI ないし KU-SHIKI)

私年寄りだ。→「 ϕ 」(SHIKI ないし KU-SHIKI)

【水海道方言の JPa】(上掲 DD 者に類似した使い分けを呈する。)

犬(げ) 触るな。(えぬげさーんな。)

本(さ) 触るな。(ほんささーんな。)

私(がに) それがいらない。(おれがにそれがいらね。)

私(がに) 無理だな。(おれがにむりだな。)

私(げ・がに) 寒い。(おれげさみー・おれがにさみー。)

私若い。(おれわかえ。)

私年寄りだ。(おれとしょーりだ。)

この DD 女性と水海道方言話者の共通点をまとめておく。

- (1) 好悪・必要性・能力・経験の主体には格標識を付け、それ以外の主体には何も付けない。
- (2) 「犬」と「本」とでは、何としてでも格を使い分けようとする。どちらにも「に」を当てはめる SAP(SAJPCJP)の感覚が理解しがたい。
- (3) SAJPCJP における「犬に触るな」の「に」と「私は寒い」の「は」との区別が付いておらず、同じ格標識でなければならないとの本能を有する。

例えば、水海道方言の「がに」は、これが用いられるときの P の意味(希求・好悪・必要性・能力・経験)から、ISReJP で言う KI から NO ないし I に該当する格であると言えることができることになる。

さらなる例文である。以下のように、SAJPCJP では、全ての場合で主体と客体、自己と他者、人間と自然とが厳格に区別されて「に」に取り込まれるが、水海道方言では現在でも自然物や非活動体に対する非授受・非損得行為には、弱い「さ」が使われ、古形日本語から SAJPCJP への過渡期にあることが分かる。今後、「げ」の使用範囲が広がり、さらにそれが SAJPCJP の「に」に変わっていくと考えられる。

しかし、ISReJP では、このような調整を話者自身が自由に行える。また、GU 主体中心の文群を書いたとして、その中に例えば I 主体文 Se(I)を挿入することで、その文についてのみ自己意識の強化を表明することもできる。

すなわち、少なくとも理論上は、今後 SAJPCJP がいかなる変遷を辿ろうとも、地方の方言が消滅していこうとも、SAReJP はこの重度の MD・SD 者たちの生活の中に存在し続けることができる。

【SAJPCJP】

どこそこ（に）行く・・・移動 V（着点＝非活動体）

見（に）行く・・・目的の補文標識

服（に）触る・・・接触 V（対象＝非活動体）

バイク（に）乗る・・・動作 V（対象＝非活動体）

バス（に）乗る・・・動作 V（対象＝非活動体）

馬（に）乗る・・・動作 V（対象＝活動体）

犬（に）触る・・・接触 V（対象＝活動体）

風呂（に）入れる・・・授受 V（着点＝非活動体）

仏様（に）あげる・・・授受 V（着点＝霊的存在）

【水海道方言】

以下のように、どこかを境界として「さ」と「げ」とを使い分ける。数字は、「さ」を使えると答えた人の人数である。²²

どこそこ（さ）行く 21

見（さ）行く 19

服（さ）触る 19

バイク（さ）乗る 13

バス（さ）乗る 10

馬（さ）乗る 10

犬（げ）触る 8

風呂（げ）入れる 6

仏様（げ）あげる 5

【ISReJP を使用する DD 女性 T の回答】

以下のように、どこかを境界として無標と「に」とを使い分ける。この女性が ISReJP を用いると、無標は KYU もしくは無標=ZETTAI のまま、「に」はほぼ KI となる。「明らかに自らが欲した行為」と「それ以外の行為」とで格を使い分けているためである。

どこそこ行く

見行く

服触る

²² 佐々木冠 & ダニエラ・カルヤヌ (1999) 「水海道方言の四つの斜格」『一般言語学論叢』第 2 号, 筑波一般言語学研究会

バイク乗る
バス乗る
馬乗る
犬（に）触る
風呂（に）入れる
仏様（に）あげる

【ISReJP を使用する DD 女性 E の回答】

この女性が ISReJP を用いると、無標は KYU もしくは無標=ZETTAI のまま、「に」はほぼ I もしくは「に」のままとなる。この女性は、SAJPCJP での日常生活にもほとんど支障はない。

どこそこ行く
見（に）行く
服触る
バイク（に）乗る
バス（に）乗る
馬（に）乗る
犬（に）触る
風呂（に）入れる
仏様（に）あげる

もう一つ、例を示しておく。

私は、
孫に犬を触らせない。【SAJPCJP】
孫げ犬げ触らせない。【水海道方言】
孫で犬で触らせない。孫が犬が触らせない。【DD 女性 E の回答】
孫に服を買ってやる。【SAJPCJP】
孫げ服買ってやる。【水海道方言】
孫で服買ってやる。孫が服買ってやる。【DD 女性 E の回答】

水海道方言を使う高齢者と SAJPCJP 社会に置かれた若い DD 女性とが、実際には同じ世界認識を呈しており、多くの Umt(SAJPCJP)の世界認識とは異なっていることが分かる。

こうなる理由は、最後の例の最初の三文で言えば、「私」と「孫」、「私」と「犬」、「孫」と「犬」との距離感（直接性の強弱）による。もし以下のように言い換えたならば、

SAP(SAJPCJP)は、「私」と「犬」の距離感は遠ざかり、「私」の「孫」に対する強要性が高まったと感じるだろう。

孫を犬に触らせない。

このようにして、あらゆる格について調べていくと、ISReJP の格体系と水海道方言の格体系とが極めて類似していることが明らかとなる。→別添資料(10)参照

換言すれば、SAJPCJP を母語とせざるを得ない重度の PDD・MD・SD 者らが本来求めている「理想に近い言語の文法」、彼らが陥った「言語障害の様態」が、水海道地域の高齢者においては日常的に展開されていることになる。

ISReJP は、「あなたごど」と「あなたを」、「あなたげ」と「あなたに」など、水海道方言の格と SAJPCJP の格とを一対一で対応させることの危険性を指摘しようと思われる。

もっとも、例えば例文中で「KI」とした箇所でも、おおよそ ISReJP の「KI」を取り巻く位置にあるとの意味であって、「KYU-KI」から「KI-NO」までをも含んでいることはありうるのである。

さらに、Pre-SHUn-L に対する「生命体（ないし有生物）と非生命体（ないし無生物）を格で区別する言語」という解釈が Umt(SHUn)の世界認識からの誤った解釈であることは、すでに述べたが、水海道方言についても、少なくとも生命体と非生命体とを今の標準日本語話者のように格で区別しているわけではないだろう。

「ごど」と「φ」、「げ」と「さ、へ」、「が」と「の」と「な」の違いは、少なくとも行為と状態とを分類する KATSU-L 以前にとどまるものであって、生命体と非生命体の厳格な区別などという自然観は、京の都同様、水海道地域にも古来より無かったであろう。

ISReJP においては、言語障害なる概念は、それ自体として実在するものではなく、主格言語（特に SHU4-L～SHU5-L）社会が作り出した概念であると見るのである。

§ 26 格詞・燈詞・動詞・助詞・助動詞等についての留意点

ISReJP における SAJPCJP の JPa・JPaV の使用法を示す。

まず、Ga(SHU4)においては、ISReJP は SAJPCJP に一致する。自己意識が Ga(SHU3) から Ga(KU)に戻っていくに従って（すなわち、PDD・MD・SD の程度が重いほど）、使用可能な SAJPCJP の JPa・JPaV が少しずつ減っていく傾向にある。

これは、それら Jpa・JPaV の意味内容を理解できないのではなく、意味内容が未分化であり、ISReJP の格詞 KA が意味内容を内包していることによる。以下に、補足的説明を加える。

(1) ある Ga(x)においては x-L が用いられることになるが、x-L において、我燈を除く語（格詞・燈詞・用言など）について Pre-x-L や Post-x-L における使用法や活用がなされてもかまわない。これを「真格交替」=CS と呼ぶ。

例えば、NO-L 以降においてのみ主体に C-JPa が付くはずの V について、KYU-L においても主体に C-JPa が付くなど。

ISReJP において、CS は頻繁に起こると共に、使用者が自らの心理状況を表明したり、聞き手が使用者の心理状況を把握したりするために、極めて重要な要素である。

(2) Ga(KU)においては、主観と客観、時間と空間、過去と現在と未来、自己と他者、能動と受動、N や V や Adj などが基本的に全て未分化で、同一視され、Te・As・Mo・Vo といった文法範疇が存在しない。

(3) 例えば、「読む」行為が「近い未来の仮定」であるとき、「読めば (yom・e・ba)」となるが、この「e」は、本来は ISReJP の言 G のはたらきと同じであるという解釈を ISReJP では行う。

そしてこの解釈は、これまで説明したように、重度の PDD・MD・SD 者らによる V の活用への理解の失い方から見て、真であるだろう。すなわち、「V の活用」とは、「行為の焦点性」である。

(4) Te の「PST・PRS・FUT」の絶対時間的直線性は、厳密には Ga(SHUn)段階まで存在しない。

現在の PST「た」は、SHIN-L 段階でも使えるが、SHIN-L 段階の Te は As の「たり」「けり」「き」「つ」「ぬ」などで表してもよく、それらは「即然（そくぜん・すなはちしかり）」が「已然（すでにしかり）」と「未然（いまだしからず）」、さらに「過去」と「現在」と「未来」とに分化するまでの連続的变化に従う。

ISReJP では、「けり」「き」も Te と As の未分化語であると見て、「PST」とは見ない。

(5) 極性 Po (肯定形 Af と否定形 Ne) については、「ない」「なし」「ず」などがいずれも使えるが、Ga(KU)では、ごくまれに Po が消失する場合がある。

すなわち、肯定文 Se(Af)と否定文 Se(Ne)とが同形(「即非文」=Se(SokuHi))でも許される。「即非」とは、鈴木大拙の「即非の論理」からの用語でもあり²³、「A は非 A である。よって、A」を表す。

実際に、幼児や重度の DD 者では、否定表現の分化が見られないことがある。西田幾多郎の用語に従えば、自己が絶対矛盾的に同一している。ISReJP の Ga(KU)の話者は否定表現を使わないことがあってもよい。

(6) KU-L では、「名即心 (めいそくしん)」という考え方をする。これは、「名前を与えることがすでに心を含んでいる」の意である。Ga(KU)の話者が「私、本、読む」と言うとき、「私ね、本読むの」といった JPa の心的表現は、排除されているのではなく、「N と V」がそれ自体であると見る。

(7) JPa のうち、列挙の「や」や並列の「も」などは、重度の MD・SD を負っていてもめったに理解が失われず、幼児においてもかなり早い時期 (他の JPa を覚えるよりも早く) に列挙・並列の概念として習得される。

また、虐待・性暴力被害や CVD など後天的に SD に陥った場合も同様に、C-JPa (いわゆる文法格) の使用がほとんど破滅的に失われても、なお列挙・並列助詞の概念は失われない。例えば、

「彼女が花に水をあげる」

「彼女も花も美しい」

においては、前者が理解できず後者が理解できるという事態が起こる。従って、列挙・並列の JPa は、Post-GI-L のどの段階でも用いる。

(8) 感動や詠嘆を表す End-JPa の多様性は、むしろ Ga(SHUn)に近い段階にならないと現れにくい、End-JPa で表されるそれらの概念が C-JPa(KA)や言 G に内包されているためである。

(9) Con-Jpa とされる「ば」の使用法の一つである仮定表現は、ISReJP では、SAJPCJP のように Mo-con に付かず Mo-ipf に付くことも多い。

(10) 「けれども」「が」などの逆接表現は、幼児や重度の DD 者においては、順接表現よりも理解が遅れる (乏しい) 傾向にある。これは、逆接表現をするような事態が幼児期には

²³ 鈴木大拙 (1972) 『日本的靈性』 岩波書店

起こりにくいためであると考えられる。

また、後天的に MD・SD に陥った女性も、まずは逆接表現から順に失っていく傾向が見られる。

一方、JPaV の「ない」「なし」「ず」は、先述の Ga(KU)の段階を除き、幼児や重度の MD・SD 者でも理解していることが多い。

「逆接」なる概念と「打消」なる概念は、彼ら及び原始人類にとって異質のものである可能性があり、ISReJP では、Ga(GU)段階あたりまでは逆接表現の使用をなるべく控える立場を取っている。

例えば、「食べ物が必要だけれども（食べ物が欲しいけれども）、食べ物がない」は、単に「食べ物がない」ことよりも後の時代に認識される。「食べ物欲しい。そして、食べ物ない」と順接表現で書くほうが望ましい。

(11) TOP「は」の使用に制限はないが、特に Ga(GU)段階あたりまでは、KA 自体も TOP 的である。

(12) 「れる」「られる」「る」「らる」は、幼児期（かつ日本語史）の最初は「自発」として理解される。次に「自ら利益になることを望む」ことが可能となる Ga(KI)時代になって、「可能」が分化する。「可能」は、平安時代には「できる」の意として多用されたが、「できない」不満を伴うことが多くなって「れず」「られず」（他に「え…ず」）表現が増える。Ga(NO)時代を終えると、「行為の実現可能性」への意識が生じて「受身」が分化する。さらに、「これ（あなたに）使われますか？」との婉曲表現から「尊敬」が分化する。

逆に、後天的に SD に陥ると、まずは基本的に「尊敬」表現から順に失われる。Umt(ISReJP)もこれに従えばよい。「尊敬」や「受身」としか受け取れない文を Umt(SAJPCJP)が書いたとすると、Ga(SHIN)段階の重度の SD 者には理解されない可能性が高い。

(13) 伝聞・様態・推量（「らしい」「ようだ」など）を表す表現は、「自己」と「自己と互いに影響を及ぼし合う他者・物体・自然界」との区別が意識される Ga(Pre-KYU)時代に主に生じる。

(14) 男我燈（だんがとう）の「益荒男（ますらお）」「男（おとこ）」は、Ga(SHIN)である男性が主に女性について述べる際に用いることができる。

巫女燈（みことう）または女我燈（じょがとう）の「巫女（みこ）」「手弱女（たおやめ）」「女（おんな）」は、Ga(SHIN)である女性が主に男性について述べる際に用いることができる。

(15) 神燈（しんとう）と仏燈（ぶつとう）は、主に巫病的な DD に陥った Umt(ISReJP)

の女性が神仏に託して物を言うときに用いられる。男性が用いてもよい。

(16) ISReJP では、V の Mo-pre は古語の Mo-pre であっても構わない。

以下の例のような場合は、N に付く SHIN または ZETTAI によって V の意味が決定される。「shi・ma・ru」と「shi・me・ru」は、重度の MD・SD には「shi・m」までで「閉」の意味が認識されており、「a」と「e」の違いは、ISReJP の Gb「う」と Gm「お・あ」の違いとほぼ同一視される。

従って、Ga(KU)に近いほど、V はほとんど古語の Mo-pre か ISReJP の Vint を用いるのがよいが、基本的に自由である。以下の例の「閉まる」と「閉める」による文意の違いは、KYU「きゅう」の有無による文意の違いよりも、ずっと小さい。「ボクは扉を閉まる」といった幼児期特有の「誤り」も、ISReJP では「誤り」とはならない。

「扉閉まる」＝扉が閉まる。

「扉閉める」＝扉が閉まる。

「わきゅう扉閉まる」＝及我の私が影響を及ぼしたことで扉が閉まる。

「わきゅう扉閉める」＝及我の私が影響を及ぼしたことで扉が閉まる。

(17) ISReJP では、Adj は古語の「し」終止となってもよい。

「赤」は「明か（あか）」の意であるが、「赤という状態である」ことを強調・抽象化して「あかし」「あかい」となった。

ISReJP で「赤い」「美しい」と言うと、すでに Gki を内包すると見なされることが多いため、Mo-pre-Gb としては、「赤いる」「美しいる」の他に「赤く」「美しす」としてもよい。

このように、ISReJP の品詞体系は、SAJPCJP と古形日本語とを網羅することを試みつつ、日本語の変遷過程が幼児の日本語獲得過程に重なることをも同時に念頭に置き、なおかつ重度の PDD・MD・SD 者らにも負担のない体系を志し、それらを東洋思想を基盤とする「自己意識の流動」という観点から説明しようとしている。

もし ISReJP の立場が妥当であるならば、例えば以下の発表・論文などで指摘されている疑問点を解決しうるかもしれない。失文法などの SD の本質を未だ言語学が説明できていないのは、ひとえに、SD 者らが「世界を認識する」こと、あるいは「何かに感動する」こと、彼らの心が「傷つく」ということが、すなわち「幼児期の世界認識に前戻る」ことや「日本語史をさかのぼって上古代的自己を志向する」ことと同義である、という点に、現在の言語学が体験的に気づくことが難しいからであろう。

井原浩子 & 藤田郁代 (1995)「失文法患者の産出文に見られる到達点を表す「に」と起点を表す「から」の非対称性について」 日本言語学会第 111 回大会

井原浩子 & 藤田郁代 (1996) 「失文法患者の主格を表す「が」の産出状況に関する意味的要因について」 日本言語学会第 113 回大会

西部真由美 (1997-2003) 「産出面からみた失文法における格助詞」 名古屋大学人文科学研究 26, 143-164

水本豪 (2008) 「幼児の単一項文の理解からみた格助詞理解と作動記憶容量のかかわり」 日本言語学会第 136 回大会

水本豪 (2009) 「幼児の文理解発達に及ぼす作動記憶容量の影響 ―日本語児における単一項文の理解から―」 『九州大学言語学論集』 第 30 号, 1-27

§ 引用文献

- DSM-IV-TR (精神障害の診断と統計の手引き) (2000) アメリカ精神医学会
American Psychiatric Association (2000). DSM-IV-TR (4th ed.). American Psychiatric Press.
- ICD-10 (疾病及び関連保健問題の国際統計分類) (2007) 世界保健機関
International Statistical Classification of Diseases and Related Health Problems, 10th Revision.
- 児島康宏 (2007) 「グルジア語の能格」 麗澤大学言語研究センター
- 鈴木猛 (2006) 「日本語の獲得過程で現れる S 標識の分裂」 東京学芸大学紀要人文社会科学系. I Vol.58
- 櫻井彰人 & 酒井邦嘉 (2002) 「言語獲得のモデル」 数理科学「脳情報数理科学の発展」－21 世紀に広がる脳科学の新しい胎動－, サイエンス社
- 近藤健二 (1994～2002) 「能格的なものの発展をめぐって(1)～(10)」 *Studies in language and culture*
- 永澤済 (2007) 「漢語動詞の自他体系の近代から現代への変化」『日本語の研究』第 3 巻 4 号, 『国語学』通巻 231 号
- 宮地幸一 (1968) 「非情の受身表現考」『近代語研究』第二集, 武蔵野書院
- 小杉商一 (1979) 「非情の受身について」『田辺博士古稀記念国語助詞助動詞論叢』, 桜楓社
- 奥津敬一郎 (1983) 「何故受身か?—<視点からのケース・スタディー>—」『国語学』132 集
- 田中道治 (2002) 「非情受身とその類似機能表現」 富山国際大学人文社会学部紀要 vol.2
- 佐々木冠 & ダニエラ・カルヤヌ (1999) 「水海道方言の四つの斜格」『一般言語学論叢』第 2 号, 筑波一般言語学研究会
- Fillmore, Charles J. (1968) "The Case for Case". In Bach and Harms (Ed.): *Universals in Linguistic Theory*. New York: Holt, Rinehart, and Winston, 1-88.
- Jakobson R.(1941) *Child Language, Aphasia and Phonological Universals*
- Jespersen, Otto (1905) "Growth and Structure of the English Language"
- Klimov, G. A. (1974) On the character of languages of active typology. *Linguistics* 131: 11-25.
- de Saussure, F. (1986). *Course in general linguistics* (3rd ed.). (R. Harris, Trans.). Chicago: Open Court Publishing Company. (Original work published 1972). p. 9-10, 15.

§ 参考文献

- 北原保雄 (1970) 「『む』はなぜ未然形につくのか」『月刊文法』第 2 巻第 8 号: 17-24.

- 釘貫享 (1996) 『古代日本語の形態変化』 和泉書院.
- 阪倉篤義 (1961) 「古代日本語における名詞の構成」 『國語國文』 第 30 卷第 11 号.
- (1988~2001) 『言語学大辞典』 三省堂
- 大野晋, 佐竹昭広, 前田金五郎編 (1990) 『岩波古語辞典』 岩波書店
- 松下大三郎, 渡辺文雄編 (1901~03) 『国歌大観』
- (1983~1992) 『新編国歌大観』 角川書店
- (1976) 『校註国歌大系』 講談社
- 白川静 (2007) 『字統』 平凡社
- 白川静 (2007) 『字訓』 平凡社
- 白川静 (1996) 『字通』 平凡社
- 武田祐吉 訳注 (1977) 『新訂 古事記』 角川書店
- 坂本太郎, 井上光貞, 家永三郎, 大野晋 校注 (1965) 『日本書紀』 (上)(下) 岩波日本古典文学大系
- 高木市之助, 五味智英, 大野晋 校注 (1960) 『萬葉集』 (一)~(四) 岩波日本古典文学大系
- 伊藤博 (1995~1999) 『萬葉集釋注』 集英社
- 佐伯梅友 校注 (1979) 『古今和歌集』 岩波日本古典文学大系
- 久松潜一, 山崎敏夫, 後藤重郎 校注 (1975) 『新古今和歌集』 岩波日本古典文学大系
- 久松潜一 (1960, 61, 68) 『和歌史』 全五卷 東京堂
- 三上章 (1963) 『日本語の論理』, 『日本語の構文』 くろしお出版
- 幸田露伴 (1947) 『音幻論』 洗心書林
- 村山七郎 (1979) 『日本語の誕生』 筑摩書房
- 金谷武洋 (2002) 『日本語に主語はいらない』 講談社
- 松本克己 (2006) 『世界言語への視座 歴史言語学と言語類型論』 三省堂
- 井筒俊彦 (1983) 『意識と本質 精神的東洋を求めて』 岩波書店
- 鈴木大拙 (1972) 『日本的靈性』 岩波書店
- 池上嘉彦 (1981) 『「する」と「なる」の言語学』 大修館書店
- ダグラス・ホフスタッター=著, 野崎昭弘, 柳瀬尚紀, はやしはじめ=訳 (2005) 『ゲーデル、エッシャー、バッハ——あるいは不思議の環 20 周年記念版』 白揚社
- Hopper, Paul J., ed. (1982) *Tense–Aspect: Between Semantics and Pragmatics*. Amsterdam: Benjamins.
- Berdinetto, P. M., & Delfitto, D. (2000). Aspect vs. Actionality: Some reasons for keeping them apart. In O. Dahl (Ed.), *Tense and Aspect in the Languages of Europe* (pp. 189–226). Berlin: Mouton de Gruyter.
- Shields, Kenneth (1982) *Indo - European noun inflection: a developmental history*. University Park and London: The Pennsylvania State University Press.
- Burrow, T (1955) *The Sanskrit language*. Glasgow: The University Press.

- Jakobson, Roman. (1990). Shifters and verbal categories. In *On language* (pp. 386–392). Cambridge, MA: Harvard University Press. (Original work published 1957).
- James Clackson (2007) *Indo-European linguistics: an introduction*
- Saussure, Ferdinand de. (1878) *Mémoire sur le système primitif des voyelles dans les langues indo-européennes* (*Memoir on the Primitive System of Vowels in Indo-European Languages*), Leipzig: Teubner.
- Jakobson R. (1959) *On Linguistic Aspects of Translation*, essay
- Jakobson R., (1971–1985) *Selected Writings* (ed. Stephen Rudy). The Hague, Paris, Mouton, in six volumes
- Gödel, Kurt (1931) "Über formal unentscheidbare Sätze der Principia Mathematica und verwandter Systeme, I." *Monatshefte für Mathematik und Physik* 38: 173–98.
- Steiner, H., Carrion, V., Plattner, B., Koopman, C. (2002). "Dissociative symptoms in posttraumatic stress disorder: diagnosis and treatment". *Child and Adolescent Psychiatric Clinics North America* 12: 231–249.
- Steinberg M (1995) *Handbook for the Assessment of Dissociation: A Clinical Guide..* American Psychiatric Press.
- Colin A. Ross. (2002) Prevalence, Reliability and Validity of Dissociative Disorders in an Inpatient Setting. *Journal of Trauma & Dissociation*. Volume 3, Issue 1
- David Spiegel, M.D. et al (2011) Research Article: Dissociative Disorders in DSM-5. *Depression and Anxiety* 28. Wiley-Liss, Inc.